

世界最強の兵器はここ
に！？

ピラフドリア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

題名：世界最強の兵器はここに!?

?? あらすじ??

追放された「科学文明（アルシミー）」に憧れ、研究を続けるサージユ村の次期村長「パト・エイダー」。

そんな彼が出会ったのは、体が機械で出来た少女、「ヤマブ

キ」であった。

パトはヤマブキとの出会いで、大きく「運命」を変えることになる。

——異世界からやってきたヤマブキの「目的」とは……。

——彼らの先に待ち受ける “結末” とは……。

異世界ならではの魔法や世界観、個性豊かなキャラクター達による “世界最強” の新たな物語が今始まる。

??ピラフドリア??

初心者の書き手です。誤字なども多いと思います。

イラストや動画制作もしているので、そちらもよろしければご覧ください。

??注意??

悪質な行動やコメントはお控えください。私だけではなく、関係者や他の読者が不快に思われる場合がございます。

出来る限りを尽くしますが、全てのコメントやメッセージを把握できるとは限りません。

大幅な修正は極力控えますが、事情により修正が加えられる可能性があります。

投稿頻度に関しましては、現段階では安定は保証できません。場合によっては長い期

間お待ちしてもらおうのですが、お許しください。

二次創作や宣伝に関しましては、一度作者（ピラフドリア）を通してください。作品への影響を考え、検討させていただきます

??詳細??

以下のサイトでも投稿してます。

- ・小説家になろう
- ・エブリスタ
- ・カクヨム
- ・ハーメルン
- ・pixiv
- ・ノベルアップ+
- ・アルファポリス
- ・MAGNET
- ・ツギクル
- ・note
- ・YouTube
- ・MACROLINK

目次

サージユ村編

第1話【俺が出会った消えた文明】

1

第2話【村への滞在を許可しま

す】
22

第3話【日向ぼっこソムリエ】

43

第4話【天才魔法使いの本性】

60

第5話【冒険者一行】

第6話【ゴブリンの軍勢】

第7話【科学と魔法】

第8話【洞窟】

第9話【洞窟へ】

第10話【骸骨】

第11話【覚悟】

第12話【過去と向かって】

244

オーボエ王国編

第13話【旧友と仲間の行方】

266

第14話【盗賊に襲われて】

290

第15話【手っ取り早く倒した

い】
311

222 198 177 150

第16話 【オーボエ王国】

331

第17話 【失ったもの】 — 352

第18話 【動物姫との骨の魔

術師】 — 368

第19話 【エリスの目的】

390

奴隷解放編

第20話 【消えた村】 — 411

第21話 【ヤザ村の英雄】

433

第22話 【村を救いに】 — 453

第23話 【月の光】 — 470

第24話 【アングレラ帝国へ】

493

第25話 【氷の女王】 — 509

第26話 【剣の声】 — 523

第27話 【モンスターの民】

540

第28話 【過去の償い】 — 557

第29話 【天才魔法使い】

576

第30話 【奴隷との戦い】

592

サージユ村編

第1話【俺が出会った消えた文明】

——“空”（天）が泣いた。

天候は荒れ狂い、大地は砕け散る。

住居は崩れ、作物は腐った。

人類滅亡の危機、そこに二人の英雄が立ち上がる。

“科学文明”を信じ、研究を続けてきた兄『アルシミー』。

“魔法文明”を愛し、実験を続けてきた弟『マジ』。

アルシミーとマジ、二人の兄弟は“協力”し、何十年と続いた“嵐”から人類を守

り続けた。

嵐が過ぎ去った後、二人は国を作り、科学と魔法を両立した文明【ブライト】を完成させた。

“二つの文明”はお互いを尊重し合い、そして競い合い。魔法は生活を豊かにし、科学は人間を支える。人類史で最も栄えた時代、それがここにあった。

しかし、“カタチ”在るものは、いつか“壊れる”。

ある時、二人は道を分かちた。

そして“全人類”と、“文明技術”を巻き込んだ。戦争（“文明戦争”）が始まる。科学と魔法。お互い譲らない戦いは、熾烈を極め、そして10年後、ついに“決着”

がつく。

戦争に敗れた【科学文明（アルシミー）】は衰退し、この地から“追放”され、勝利した【魔法文明（マジー）】は、戦後から現代に至るまで“成長”し続けた。

??????????

??????????

春風が緑の匂いを感じさせ、人々の心を穏やかにする。

草原と岩山に挟まれた小さな土地。木造の防壁に囲まれ、自然と一体になれる村、【サージュ村】。

この村に、追放され消えた文明を研究し、過去の技術を探究する少年がいた。

「うおお!! 高速で鉄の塊を飛ばす武器、鉄砲!! す、すげー!! そんなものがあるのか!!」

村にある木造の家。窓を開け、日差しを浴びながら、分厚い本を読む茶髪の少年。

彼の名前は『パト・エイダー』。サージュ村、〃村長〃ガオ・エイダーの息子であり、衰退した【科学文明（アルシミー）】を研究する、研究家である。

……とは言っても、大昔に残された科学文明（アルシミー）に関する書物を読み更けるだけに過ぎない。

現在この地に残っているアルシミーに関する書物には、その〃技術〃の作り方や〃原理〃については全く書かれていない。ただ「存在したであろう」、記録のみが書かれている。

全ての技術は追放された科学文明（アルシミー）が持つて行った。

その為、彼ら（パトたち）にとって科学（アルシミー）とは未知の技術であり、神話

のようなもの。

現実存在するかも不確かな技術である。

だが、もしも“存在”するのなら、パトはその技術に今と違った“希望”があるのではないか。そう、信じている。

「おい、パト！」

パトが自室で書物を読んでいると、部屋の外から野太い声で呼ばれる。パトの父親、『ガオ・エイダー』だ。

「ん、何!! 父ちゃん」

パトは本を閉じず、椅子に座ったまま、首だけを声の聞こえた方に動かし、大声で返事をする。

すると、部屋の外から返事が返ってくる。

「ライトさんがな。井戸から水が取れないって言っているんだ。ちよつと手伝いに行つ

てくれないか！」

村人からのちよつとした「頼み事」だ。

村長は村を支える事が仕事である。

盗賊やモンスターに襲われたら、村長が指揮を取り、最後まで村を守る。客人が来れば、村長が中心にもてなす。

しかし、それだけが「村長の仕事」ではない。このような村人からの身近な頼み事もひとつひとつこなしていくのも「村長の仕事」である。

「次期村長」であるパトもそれは分かっている。

最近、井戸水が減っていて、なかなか上手く水を取れない。他の村人なら、問題なく取れるのだが、村一番の年長者であるライトには少し難しいのだろう。

それでもパトは科学文明（アルシミー）の書物を少しでも読みたい。今ならパトの父親ガオに任せれば、書物を読み続けることができる。

「だったら、父ちゃんが行けばいいじゃん」

パトは村長である父親のガオに任せようとする。しかし、それは叶わない。

パトの言葉にガオはすぐに答える。

「行つてあげたいのは山々なんだが、これからコット村で『村長集会』があつて、今から出ないとならないんだ。やつてくれたらシルバさんからまた本を貰つてきてやるよ！」

『シルバ・マーキュリー』。コット村の村長であり、科学文明（アルシミー）を研究する研究家だ。

パトが科学文明（アルシミー）に興味を持ったのは、シルバの影響が大きい。そしてシルバはパトの師匠でもある。

そんな尊敬している師匠のシルバから、科学文明（アルシミー）に関する本が貰えるのなら、これほど嬉しいことはない。

パトは即座に本を閉じると、立ち上がる。そして山積みになった机には本を放り投げ
る。

「分かった。今行くよ」

返事をした後、急いで部屋を出る。

部屋を出ると、リビングで身支度を終えたガオが待っていた。

「ライトさんは外で待つてる。頼むぞ。……それとできる限り早く帰るようにするが、
それまで村をよろしくな」

早く帰るようにする。それは「村長集会」のことだ。周辺の村から村長を集めて集
会を行う、村長集会。

今回の議題は最近、『大量発生しているモンスター』についてだ。

これはここ最近、サーージュ村を中心に、多くの村で「問題視」されている。

「モンスター」「は」「家畜」「や」「人間」を襲う、そのため「冒険者」を雇ったり、王国

から「騎士」を呼び寄せ、駆除をしているのだが、近年の異常な大量発生には、それでも手に負えないほどである。

その為、村単体でなく、周囲の村で力を合わせ、「対策」を行おうということになったのだ。

しかし、今回のモンスター大量発生の原因「が分からない。原因が分からない以上、会議も長引くことになるだろう。

そのことがガオの「不安」を煽っているのだろう。

村長集会の際、次期村長であるパトが「村長代理」となる。ガオはパトなら問題はな
いと分かっているし、信じている。しかし、それでも不安というものは生まれてしまう。

もしかしたら、目に見えないところで、全てを「失う」ことになるかもしれない。
何十年と暮らし、寄り添ってきた村を……。たった一人の唯一の息子を……。

その恐怖から生まれる言葉、それが「早く「帰る」である。

しかし、そんな言葉を受けたパトも、「不安」はあっても「自信」が無いわけではな

い。ガオや先代の村長たちが守ってきたこの村を、任せてもらえることに、
“誇り”を持っている。そしてだからこそ、任されたのならば、全力でそれに努める。
それがパトの出来る、任せてもらったものに対する “礼儀” である。

「ああ、任せといてよ。これでも父ちゃんの “息子” で、次期村長だよ」

パトは右手で左胸を叩き、ガオを “安心” “させようと、強気を見せる。

ガオが村や自分を “心配” して、そのようなことを言ったことはパトにも分かっている。だからこそ、そんな “不安” を持ったまま、村長集会には参加して欲しくない。いつもの “力強く” “頼り” “になるサーージュ村の “村長” として、村長集会に参加し、他の村長達に “見せつけ” てほしい。

そのためにパトは自身の意気込みと、村は任せて集会に集中できるように、父親に胸を叩いて “見せた” “のだ。

それを見たガオは “笑う” “。その笑いには焦りと圧迫感から “解放” “された、いつも

のガオの姿があつた。

「なんだよ」

父親のために取つた行動、それがプラスに働いたのなら嬉しい。だが、ここまで大袈裟に笑われると、さすがのバトも恥ずかしい。

頬を赤めるバトを見ながら、ガオは胸を張つて言い放つ。

「ふ、さすがは俺の『息子』だ」

ガオは大きな荷物を肩に掛けると、

「じゃあな」

手を振り、家を出て行つた。

その背中はとても大きなものに見え、そして進むべき道を示している。

ガオを見送ると大きく息を吸い、気持ちを落ち着かせるように深呼吸をする。

『村を任せてもらえた』ということは“信頼”されていること。だからこそ、その“信頼”には答えないといけない。

その為にパトがまずやること。それはガオに任された“仕事”をこなすことだ。

パトは扉を開き、家から飛び出す。

外は雲一つない快晴、春風がパトに果実の香りを匂わせた。

「お待たせしました。ライトさん。井戸水ですね」

パトは家の前に立っている、バケツを持った腰の曲がったお爺さんに話しかける。

「……ああ、そうじゃ……。すまんのう、頼むよ。パト君」

彼は『ライト・マヤギ』。村一番の年長者であり、物知り。今では杖を使わなければ、上手く歩くことができない。

だが、昔はその体一つで『魔石』『発見の為に多くの』『洞窟』『や』『ダンジョン』を攻略していたらしい。

「それじゃあ、行こうかのう……。パト君」

「はい」

ライトはパトにバケツを渡し、井戸の方へと歩いていく。パトはその横に並び、ライトのペースに合わせて『ゆつくり』と歩く。

サージュ村の『井戸』は、元々村の中心にあつたのだが、『数年前』に井戸水が出なくなってしまう、それからは村の『丘』に『新しい井戸』を作り、そこから井戸水を取っている。

そこまで遠い距離では無いが、丘を登るために不便ではある。

パトやガオ、他の村人たちは何か「改善策」はないか対策を考えているが、未だに発展がない。

パトは丘を登り始めたところで、ライトに質問をする。

「そういえば、ライトさんって、何年「魔石発掘家」をやってたんですか？」

「ううん？ 何年だったかなあ、確か、今年で83歳だから、62年かな」

ライトは顎の下から伸びた白い髭を触りながら、自慢げに言う。

長い間続けてきた「天職」。人生の大半を費やしてきた仕事に、ライトは誇りを持っている。

「62年ですか!? そんなに長くやってたんですか!？」

「なんじゃ、知らなかったのか? とは言っても、数年前に洞窟で「魔素」にやられて、

こうして “杖” 無しでは生活出来なくなつてのうゝ、もう辞めてしまつたかの」

「いや、でも、ライトさんは凄いですよ。 “シーヴ” から聞いた話ですが、オーボエ王国の “教科書” に載つてゐるらしいじゃないですか」

ライトは恥ずかしそうに、髪のない頭を搔く。

「あれは運が良かっただけじゃよ。それに今のワシがあるのは、 “彼ら”のおかげだしのう」

「彼らつて、 “70年前” に村を救つてくれたつて言う “冒険者” ですか」

ライトは村を囲う防壁を見つめる。

かなりの高さのある防壁だが、丘の上にいる為、見下ろしている状態だ。

「また彼らに会つて、礼を言い……………ん？ パト君や、ちよつと、いいかのう？」

何かを見つけたライトは、防壁の“外”を指で指す。

「あそこに……………」

「……………」

パトはライトの指差す方向を凝視する。すると、防壁の外にある草むらに、誰かが倒れている“の”が見える。

「た、大変だ!! ライトさんはここで待ってて!!」

「あー! パト君!!」

バケツを振りながら、丘を降りるパト。

村を出るために村の入り口に向かう。

村の入り口には槍を持った“門番”の二人“が立っていた。

パトの走る姿を見た金髪の門番の一人、エスが声をかける。

「おう！　パト、そんな急いでどうしたんだ？」

「防壁の“外”で人が倒れているのが見えたんだ!!」

パトは走りながら説明する。

それを聞いたエスは、もう一人の門番であるルンバに仕事を任せると、槍を片手にパトの後ろを付いて行く。

「どの辺りだ？」

「この先にある、村の“東側の草むら”!!」

パトは走りながら、エスの質問に答える。エスは東側と聞き、持っている槍を“強く握りしめる”。

「さつき見張りのニントから報告があつて、その周辺で『ベアウルフ』を見かけたらしい。もしかしたら……」

パト是最悪の場合も『覚悟』する。厳しい表情を浮かべるパトの頭にはガオの顔が浮かんでくる。

——父ちゃん、もしかしたら、俺——

しかし、悩んでいる暇もなく、パト達は草むらに着く。

「この辺りか!!」

「そのはずなんだが……」

しかし、腰の高さまで生茂る中、倒れている人を見つけるのは困難。
エスは不安な表情を浮かべる。

「どうする?」

しかし、ここでパトが「諦める」「わけにはいかない。」「村長代理」として、ガオに任せてもらった「信頼」を……、ガオたち先代の村長たちが築いてきた村人の「信用」を失う「わけにはいかない」。

「片っ端から」探す。エスはモンスターが近くにいないか、「警戒」をしてくれ!!」

パトが草むらに足を踏み込んだ時、後ろからかすれた声で呼ばれる。

「パト君や、あそこ」「じゃよ」

後ろを振り向くと、そこには同じように声の主を見て、驚くエスの姿と、草むらの奥を指差すライトの姿があつた。

「え? ライトさん!? なんでここに!?!」

「なんでって、ずっと後ろにいたじゃろ。それより、あそこじゃよ!! パト君や」

パトたちはライトの指差す方向を見る。そこには草むらから生えたように人間の足があった。

「だ、大丈夫か!!」

パトたちは周囲を警戒しながら、草を退け、草むらから倒れた人を引つ張り出す。

「誰じゃろう、村人では無いようじゃが?」

水色の長髪に、胸の辺りには「宝石」の付いた「不思議な」服装をした「少女」。
しかし、少女は倒れた状態のまま、「眠った」ように動かない。

「怪我はしてないようだが、念のためにザミーネさんと呼んできてくれ」

パトはエスに、村にいる“医者”を呼んでくるように頼む。

「分かった。待っていてくれ」

エスはパトに槍を渡すと、村の入り口へと走っていく。

パトは受け取った槍を、地面に置き、ゆつくりと驚かせないように“少女”に近づく。

「……………起動、起動」

少女の前に着き、姿勢を低くしようとした時、少女の口が動き出す。

「……………システム異常ナシ、メモリー破損ナシ、起動オブジェクト正常、コレヨリ通常運転デ“再起動”ヲ開始シマス」

続く

第2話 【村への滞在を許可します】

「……………システム異常ナシ、メモリー破損ナシ、起動オブジェクト正常、コレヨリ通常運転デ 〃再起動 〃ヲ開始シマス」

少女の目が開き、 〃紅い瞳 〃がパトの姿を映し出す。

「保護対象 〃パト・エイダー 〃ヲ確認。コレヨリ 〃平和プロジェクト 〃ヲ開始シマス」

少女はその場で立ち上がる。

少女とパトの鼻が擦れ合い、二人は 〃目 〃を合わせる。

「君は……………一体……………なんで、俺の名前を……………？」

一度も見たことのない少女。しかし、少女はパトの「名前」を確かに言った。
そしてパトはその「疑問」と同時に、その少女の「瞳」に吸い込まれるような「不思議」な感覚を覚えた。

「私ノ名前ハ『ヤマブキ』。」「カナル様」の命ニヨリ、パト、アナタヲ「主人」「トシ、」「守り」「マス」

「俺を」「主人」として、」「守る」「……？」

「ハイ、イツデモ、アナタ（パト）ヲ」「保護」「デキルヨウニ、アナタノ家ヘノ、」「居住」「ヲ希望シマス」

「な、な、なあ!？」

パトは驚きながら、三步下がる。

「何を言ってるんだ!! 君は!!」

「何力、問題デモアリマスカ？」

「問題ありありだ!! なんで、見ず知らずの人間を、家に泊めないといけないんだ!!」

ヤマブキは「表情」を一つも変えないまま、首を傾げる。

「駄目デスカ」

「駄目というか、……そうだなあ、困っているなら力を貸してあげたいが、まだ素性の分からない君を、
「村長代理」である俺としては、簡単に「村」に入れることはできない……」

パトは焦りながらも、冷静に村長代理としてヤマブキを「警戒」する。しかし、ヤマブキに「敵意」を向けるわけにはいかない。

「敵意」を向ければ、向こうからも「敵意」を向けられるかもしれない。警戒し過ぎれば、向こうからも強い「警戒心」を持たれるかもしれない。

出来る限り穩便にことを進め、相手について知る必要がある。パトはまずヤマブキについて“情報”を得ようとする。

「ヤマブキさんは、どこから来たん、ですか？」

素朴な質問。だが、それがとても重要である。この質問への回答次第で、パトはヤマブキに対する行動を変えなければならない。

だが、パトのヤマブキが答えようと口を開くと同時に、後ろにいたライトが大きな声で叫んだ。

「パト君や!! モンスター!! じゃ!!」

「なっ!? 本当にですか!? ライトさん!!」

パトは即座に槍を拾い、構える。

「ど、どこですか!!」

「その娘の後ろの、草むらの奥じゃ!!」

パトはヤマブキの後ろへ移動し、ヤマブキを守ろうと立ち塞がる。

「ガルルルウウ!!」

低い唸り声と共に、草が揺れ、影が蠢く。

「……………そこか」

パトは影に槍を向ける。

「ガルルウウ、ガウウ!」

草むらから『白い獣』が、牙を剥き出しにしてパトの首元に飛び込んでくる。

パトは槍を横に持つと、槍を獣に噛ませて攻撃を防ぐ。押し倒されそうになりながらも、何とか耐えて獣を振り払う。

「はあ、はあ、……ハ!？」

獣を振り払うと同時に、パトとヤマブキを囲み、四方の草むらも揺れ出す。

「な、まさか……」

「パト君や!! 一匹じゃない、五匹じゃ」

ライトの言う通り、草むらから残り四匹のベアウルフが姿を見せる。

「……………これは……」

「ベアウルフ」。

“狼”と“熊”の『魔素』を核にし、“モンスター”と化した魔素の『集合体』。群れを成し、陣形を組みながら人間や動物を襲う。

しかし、“ベアウルフ”は狼や熊の多く生息している、大陸の北東にある“エルノム山”に多く発生する。サージユ村の周囲で発生するのは極めて珍しい。

「……………これも、“モンスターの大量発生”と関係があるのか……」

五匹のベアウルフは、二人にゆっくりと迫ってくる。完全に囲まれた状態で、二人が“無事”に逃げるのは難しい。

ガオに村を任されたパトは命に変えても、村と村人を“守る”と決めていた。パトはライト、ヤマブキを“守る”ため、“決死の決断”をする。

「……一度しか言いません。聞いてください。ヤマブキさん」

パトは槍を強く握りしめる。

「俺が道を作つて、時間を稼ぎます。その間にライトさんと一緒に“逃げて”ください」

ベアウルフたちがゆつくりと、二人との距離を詰めてくる。

パトは一匹のベアウルフに狙いを定めて、槍を投げる!!

「グウワア！」

しかし、槍は簡単に避けられ、ベアウルフたちは“一斉”に襲いかかつて来る。

パトは“槍を避けたベアウルフ”に駆け寄り、飛びかかつて口を塞ぐ。

「逃げて!! ヤマブキさん!!」

パトは一匹のベアウルフの動きを止め、ヤマブキを逃がそうとする。

「早く!!」

しかし、ヤマブキはその場から“一歩も動かない”。

「ヤマブキさん!？」

「防衛システム起動。コレヨリ『殲滅』ヲ開始シマス」

ヤマブキの胸元にある『宝石』が蒼く光、身体の中で何かが動き、回転しセットされる。

そしてヤマブキの背中が扉の様に開き、そこから円柱状の何かが姿を覗かせる。

「戦闘システムR00005。追尾型拡散ミサイル発射」

爆発音と共に、円柱状の何かが火花を散らし、ヤマブキの背中から外へと放たれる。それは空中で半円を描きながら、四匹のベアウルフ達に降り注ぐ。

「い、これは!?! ……まさか!?! 《ミサイル》かあ!?!」

ベアウルフ達は避けようと、草むらに飛び込むが、『ミサイル』は軌道を変え、ベア

ウルフを追跡し、*“確実”*に一匹一匹仕留めていく。

五秒も経たず、四匹のベアウルフは駆除され、残りはパトの押さえるベアウルフのみ。

「す、凄い……」

パトが「ヤマブキ」、そして「ミサイル」に見惚れていると、ヤマブキは背中扉を閉じ、パトの方へ右手を伸ばす。

「ん？」

「戦闘システムB0006。機関銃発射準備」

「……………」

ヤマブキの腕が音を立てながら、変形し、穴の開いた鉄の塊になる。

パトは嫌な予感がして、ベアウルフから手を離し、草むらに飛び込んで姿勢を低くす

る。

「……発射」

光を放ち、連続で発せられる爆音。ヤマブキの腕から飛ばされた小さな鉄の弾は、ベアウルフを無残な肉の塊へと変えていく。

やがて、光と爆音は止み、ヤマブキの腕から現れた鉄の塊は体の中へと戻っていく。

「敵対反応消失。防衛システムヲ終了シマス」

パトとライトが腰を抜き、動けずにいると、村の入り口の方から誰かが走って来る。

「おーい!! パト!! ライトさん!! 大丈夫か!? 今、凄い音が聞こえたが!!」

医者呼びに行ったエス。そしてサージュ村の女医ザミーネ。その娘のリーラだ。

三人は完全に討伐されたベアウルフの姿を見て驚く。

「こ、これは……ベアウルフ!? 襲われたのか!」

「ああ、でも、ヤマブキさんが助けてくれた」

パトはその場に座りながら、エスの質問に答える。

まだ心の底では“動揺”しているが、村人たちに“不安”を与えないように、“冷静さ”を失うわけにはいかない。

三人は同時にヤマブキを見る。

ヤマブキも三人の視線に気づき、三人に顔を向けるが、表情は全く変わらない。

ザミーネは右目を掛かった前髪を耳に掛け、ヤマブキに近づく。

リーラはその母親の後ろで隠れながらヤマブキを見つめる。

ヤマブキの目の前に着くと、長身であるザミーネは膝を曲げて、視線を合わせる。

「ありがとね。えーつと、名前は……」

『『ヤマブキ』デス』

「ヤマブキちゃん。パト君とライトさんを守ってくれたのね。感謝するわ」

ザミーネは本当にヤマブキがベアウルフを倒したか半信半疑のようだ。

しかし、状況やこの場にいる人間を見て、ヤマブキ以外にベアウルフを退治できる者はいないと判断した。

そしてそれが善であれ悪であれ、同じく村に住む者を救ってくれたことに感謝をしている。

しかし、ザミーネの言葉にヤマブキは反応することはない。

その場にまさに石の銅像であるかのように、
“無表情”で立ち尽くす。

「……………あ、……………」

母親の後ろに隠れながら、リーラは顔を覗かせ、ヤマブキの顔を凝視する。

ヤマブキもリーラの視線に気づき、体を動かさず、顔を下に向ける。

リーラは小さな声で、顔を赤くし、恥ずかしがりながらも、ヤマブキに質問する。

「……………その、……………ヤマブキさん……………は、冒険者 なんです？」

しかし、ヤマブキは「否定」する。

「イイエ、私ハ、平和プロジェクト用アンドロイド『三号』デス」

その回答はこの「世界」では聴き慣れない言葉。この場にいるほとんどの人物は理解することはできなかった。ある一人の人物を除いて。

アンドロイドと聞き、パトは驚き立ち上がる。

「まさか、ヤマブキさん……君は、科学文明から生まれたのか……」

ヤマブキは否定をしなければ、肯定もしない。

「もし、そうであるなら、お願いがある」

パトはヤマブキに近づき、頭を下げる。

「俺にその“技術”を見せてくれ!! 俺は科学文明（アルシミー）が一体どんな“技術”と“力”を持っていたのか……それが“知りたい”んだ。頼む!!」

パトがさらに深く頭を下げる。

今までずっと、“科学文明（アルシミー）”を調べてきた。だが、この機会を逃せば、もう二度とヤマブキ（科学文明と繋がりがある人物）のような人に出会えないだろう。

本来なら、家にヤマブキが住む事も許してしまいたい気持ちの帕特であるが、それは村長代理として許されない。

——それでも——

その時、ライトがパトの肩を叩く。

「それなら、これはどうじゃ？ 理由は分からんが、ヤマブキ君は帕特君の近くで暮らす必要があるんじゃないやろ。じやったら、そうすればええ。帕特君もヤマブキ君について知りたいなら丁度ええじゃろ」

「それは……」

帕特は迷う。まだヤマブキについて何も分かっていない。盗賊のスパイだったりし

たら、村を危険な目に合わせることになる。

しかし、この機会を逃せば、もう二度と……。それに、この人（ヤマブキ）は……

「パト君や……………君はヤマブキ君をどう思うんじや？」

頭の中では“信用”できていない。正直なところ、パトはヤマブキに危険な目に遭わされた。

少し遅れていれば、ベアウルフと同じ運命を辿っていただろう。

だが、そんな事も気にならないほど、パトの“心”には残ったものがある。

それは二人が初めて“目”を合わせた時。

——瞳の中に、“鎖に繋がれた少女”の姿を見た——

パトの“心（たましい）”は、その少女に引き寄せられる。……元のところに帰るよ
うな。不思議な感覚を覚えた。

それは自分の“器”。自分と言う物を入れる専用の“器”。“この世に一つしかな
い”はずの、自分の“器”が二つ存在し、“波長”している。

遠くであり、近くである。

左右反転した物ではなく、“完全”に一致した。

“別”の物……。

——ヤマブキさんは危険ではない。いや、危険とか、そう言う問題じゃない。“ヤマ
ブキ”さんは“俺”、俺自身——

「……………でも」

それでも、パトはヤマブキを村に入れるわけにはいかない。

ガオとの「約束」がある。

一人の意見や考えで、村を危険に晒すわけにはいかない。

それが「村長代理」である者の定め。

「良いんじゃないよ。パト君や、やりたいようにやれば。いつも、君や、君のお父さんの頑張りは知っておる。わしらのやりたい事をいつも手伝ってくれたじやろ。今回はわしらがパト君を支える番じや」

ライトはそう言い、みんなに相槌を求める。

それに反応して、エスが答える。

「まあ、俺は構わない。村長たちの頑張りは知ってるし……」

続いて、ザミーネとリーラが答える。

「ええ、ライトさんの言う通り。いつも頑張ってるんだから、たまには私たちが支えるわ。他の村人たちも同じ意見だろうし」

「……はい。私も………パトさんは、いつも頑張ってますし……。それにこの人、……悪い人じゃなさそう」

ライトは次に、ヤマブキの方を向いて言う。

「お主も、この村でみんなと一緒に暮らす。それに異論はないじやろ」

「ハイ。問題アリマセン」

「そう言う事じゃ、パト君や。後は君の意見に任せるぞ」

「……………ヤマブキさん……………」

——みんな——

「君の村の滞在を許可します」

——ありがとう——

続く

第3話

【日向ぼっこソムリエ】

「……………う、うう、寒っ」

冷え切った体を震わせて、パトは目を開ける。

「寝ちやったのか……」

一人残されたリビング。

窓の外から差し込む朝日を見つめ、パトは“昨日の出来事”を思い返す。

——昨日は“夢”のような一日だった——

“科学文明”の“アンドロイド”。『ヤマブキ』に出会い、命を救われた。

その後、村に戻り、村人全員の前で“ヤマブキ”を紹介し、村に住むことを伝えると、村人は心良くヤマブキを受け入れてくれた。

簡単に承諾してくれるとは思ってなかった。しかし、村人たちはヤマブキを“信じる”、パトを“支える”と言った。

——村のみんなには、感謝しないとな——

パトは今まで以上に、この村にふさわしい“村長”になろうと、“決意”を強める。

そして昨日は、ヤマブキに搭載された“科学文明”の装備について聞くあまり、“村長日誌”を書くことを忘れていたことを思い出す。

“忘れられない出来事”だらけだが、だからこそ、忘れないように早め書き留めて

おきたい。

パトは『村長日誌』の置いてある、自身の部屋の扉を開けようと、ドアノブに手をかける。

「ん、……………ああ、そうだ」

手をかけたところで、『ヤマブキ』に部屋を自由に使って良いと、に伝え、貸したことを思い出す。

「昨日は、俺が質問責めして、遅くまで起きてもらっちゃったからな……。起こさないようにしないと」

ゆつくりと扉を開け、中に足を入れる。

「……………失礼しまゝす」

しかし、部屋には科学文明（アルシミー）に関する“本”や“資料”が無造作に置かれていてだけで、“誰もいない”。

「あれ？ どこかに出かけてるのかな？」

??????????

??????????

サージュ村には最も日当たりの良い、最高の日当たりスポットが存在する。そこは村を一望でき、気持ちの良い風を浴びる事ができる、芝生のベッドがある。

村にある丘の上、東側の斜面。

今日もそこに、井戸水で顔を洗い、小さな“お弁当箱”を持った一人の男が軽快に向かっていた。

「ううーん、今日も絶好の日向ぼっこ日和のようだなアッ！ ん、あれは？」

その男は、日向で気持ち良さそうに座る、二人の少女の姿を目にする。

「うううゝンツ！　そこにいるのはア！　ヤアアアマブキ君に、リイイーラちゃんではないかア！」

男はヤマブキとリーラの前に立つと、両手を広げ、風の流れに身を任せるように体を回転させる。

「うううゝンツ！　私よりも先に、このサイコオオな！　日当たりスポットに行くと
はア！　もしや、君たちも、日向ぼっこソムリエなのではア！」

男は体全身で踊り、日向ぼっこ仲間を見つけた喜びを、伝えようとするが……。

ヤマブキは無反応。リーラは不満そうな顔をして、男を睨み付ける。

男はその鋭い目線に気づき、踊りを止めて、リーラに手を伸ばし、その視線について問う。

「うううんッ！ どうしたのかア！ リイイイラちゃん」

「……えっと、その、ヤナックさんで日陰になって、しまつて……」

ヤナックの影が日を遮り、リーラの日向ぼっここの邪魔をしていた。
ヤナックはそれに気づくと、一步下がり、頭を下げる。

「あア！ ああ、すまなアゝい。私としたことが、影を作つてしまつてたようだ。本当に、申し訳ない」

二人に日が当たるように移動する。そしてお弁当箱を開き、中に入っているサンドイッチを二人に差し出す。

「良かったアアアア！ お一つドウオオオオオうぞ！」

リーラはサンドイッチを差し出され、戸惑う。

「え、……良いん、ですか？」

「ああア！ お浴びと言つてはなんだが、自称サンドイッチソムリエである僕の作ったサンドイッチだ、味は保証するよ」

「……ありがとうございます」

リーラはサンドイッチを二つ取り、一つをヤマブキに渡す。

「はい、……ヤマブキさんも、どうぞ」

「アリガトウゴザイマス」

リーラはヤマブキが、サンドイッチを食べる始めるのを確認してから、小さな口を開き、一口食べてみる。

中に入っているのは、シンプルにハムと卵なのだが、何か隠し味が入っているのだろうか、スパイスが効いている。

口は止まらず、気がつけば、小さく形を変え、サンドイッチはいつの間になくなっていた。

「美味しい……」

リーラの言葉に、ヤナツクは誇らしげに胸を張る。

「だろ。何せ、このサンドイッチソムリエの僕が作ったアアんだからね。ヤアアマブキ君はどうかかな？」

リーラよりも先に食べ終えていたヤマブキにヤナツクは聞く。リーラもヤマブキの感想が気になり、ヤマブキの方を向くが、ヤマブキは何もなかったかのように立ち上がり、丘の下へと歩き出す。

「どこオオに、行くのかい？」

「パトガ起キタヨウナノデ、私ハソロソロ戻リマス」

二人を背にヤマブキはパトの居る、村長の家へと向かう。

ヤマブキの後ろ姿に、リーラは立ち上がり、大きく手を振る。

「また一緒に、日向ぼっこしよう」

活発な方ではないリーラであるが、この時は珍しくヤマブキに聞こえるように大声を出して、自身の気持ちを“伝える”。

その声は村全体に響き渡りそうな大きな声であつたが、ヤマブキは何も答えず、一度も振り返る事もなく、その場から姿を消した。

「それエエにしても、リイイーラちゃんが、ここまで外から来た人と仲良くなるのオオハア！ 初めて見たなア！ 何かあつたのかい？」

ヤナツクはそう言い、リーラに尋ねる。

リーラは小さな頃のトラウマがあり、外から来る人間を極度に避けてきた。しかし、ヤマブキには心を開けているように見えた。

「……分かりません。でも、ヤマブキさんからは、パトさんに似たものを感じて……」

「パト君と…………」

ヤナツクは親指で顎を擦り、少し考えて続ける。

「正直、僕も同じことを感じイイたよ。ヤアアマブキ君からは、パアアアト君に近い何かを感じイイる。だからなのかな？ 昔から知っていたかのよオオに、彼女に違和感を感じないのオオは……」

??????????

??????????

「村長日誌」を書き終えたパトは、部屋の掃除を始めた。とは言っても、毎日欠かさず掃除はしている。

その為、目立った汚れがあるわけではない。だが、お客さんが来ている以上、どんな些細な汚れでも見落とすわけにはいかない。

雑巾を片手に、窓の淵や、棚の裏、部屋の隅々まで磨いていく。

掃除を終え、そろそろ外に在るであろう「ヤマブキ」を探しに行こうと、道具の片付けをしていると、玄関から扉を開ける音が聞こえる。

パトは部屋から顔を覗かせ、玄関を見る。

「あ、ヤマブキさん!!」

パトは手に持っていた雑巾とバケツを棚の上に片付け、ヤマブキの元へと駆け寄る。

「すみません。昨日は遅くまで起こしてしまつて、それに部屋も汚いままでしたし……」。今、掃除が終わつて、ご飯の準備を始めるところなので、適当に休んでてく

ださい」

「ハイ……」

リビングにあるテーブルの椅子を引き、ヤマブキを座らせる。

パトは朝食の準備を始めるために、井戸から持ってきた水で手を濯ぐ。

「あ、もし良かったらですが、朝ごはんを食べ終わったら、村を案内しますよ。昨日は俺がヤマブキさんに色々聞きましたし、今日は俺が村について教えます」

パトは「村」のことなら、誰よりも分かっているつもりだ。現役の村長であるガオにも負ける気はしない。

だからこそ、この村の「良さ」を知っている。そして「外」からやって来た人達に伝えたい。パトの自慢の出来る「家族（村）」を……。

「デハ、才願イシマス」

手を洗い終わったパトは、壁にかけてあるエプロンを身につけ、

「任せてください!!」

パトは嬉しそうに、返事をする。

「まあ、その前に朝ごはん……。少し待っててください。すぐ出来ますから」

パトはキッチンに立ち、朝食の準備を始め、フライパンと卵を手取る。

「ヤマブキさんは何か、食べたい物とかありますか？」

パトが聞くと、ヤマブキは少し考える。

「……アリマセン」

「そうか、じゃあ、有り合わせですが、適当に作ります」

パトは棚の上から、手のひらサイズの四角い石を取ると、石をテーブルの淵に叩き、刺激を与えてから、暖炉の下にある薪の中に投げ込む。投げ込まれた石からは火花が散り、火が起こる。

小さな火であるが、徐々にその炎は強くなり、その上にフライパンを置き、調理を開始する。

キッチンの上端に置かれた木箱から卵を取ると、額に卵をぶつけて、フライパンの中に黄身を落とし、作り始める。

「さあ、次は……」

パトが次の品に取り掛かろうとした時、玄関の扉がリズム良く叩かれる。

「あらあら、パトくん!! いるかしら?」

村人が訪ねてきたようだ。口調から急ぎではなさそうだ。

パトはフライパンをそのままにし、玄関へと向かう。

「はい!!」

扉を開けると、緑の天然パーマが特徴的な、ぽつちやり体型のおばさんと、その後ろにもう一人誰かがいる。

しかし、その誰かはおばさんの影に隠れてしまい、うまく見えない。

「アマルさん、おはようございます」

「あらあら、おはようね、パト君」

村一番の噂好き、アマル・ルリイ。パトの隣の家に住む奥さんだ。

「どうしたんですか？」

「いやね、それがね、さつき〃懐かしいお客さん〃が来たのよ」

アマルは嬉しそうに、右手で何もない空中を、連続で叩き続ける。

「それでね、あなたの家に寄りたいけど、久しぶりで忘れちゃったって言うから、連れてきてあげたのよ」

パトは誰だろうと思い、首を横に伸ばし、覗いてみる。

アマルの後ろに居たのは、紫色のマントにとんがり帽子を被った、魔法使いの少女。
”

「久しぶりね。パト」

少女はパトに向かって、
”爽やかな笑顔”を見せる。

「エリス!？」

続く

第4話 【天才魔法使いの本性】

「久しぶりね。パト」

少女は「爽やかな笑顔」をパトに向ける。

「エリス!？」

彼女の名前は『エリス・グランツ』。

パトの幼馴染みであり、現在は村を出て、「オーボエ王国」にある【王立魔法学園】に「特待生」として在学している。

「王立魔法学園」とは「魔法使い」や「聖騎士」を目指す若者たちが通う「学校」であり、「並外れた魔力適性」と「魔法知識」が無ければ、入学する事ができない。

その中でも“特待生”として入学しているエリスは、一言で言うならば、『天才』。天から与えられた“才能”を持った『天才少女』なのである。

「今ね。“魔素”を“魔力”に変換する研究をしていて、天然の魔素が豊富にあるこの地域に研究に來たの……。それで、少しの間で良いんだけど、泊めてもらえないかな？」

エリスは手を合わせ、申し訳なさそうにお願いしてくる。

「らしいのよ、久しぶりに会ったんだし、今はガオ君いないじゃない。部屋も“余ってる”でしょ？」

エリスから事情を聞いたのか、アマルも一緒に部屋を貸すようにせがむ。

「……………は、はい。分かりました」

パトは頭を掻き、断ることができず、渋々許可を出す。

「ありがとうね。パト」

許可を出すと、エリスはくるりと向きを変え、帽子を外して、アマルに頭を下げる。

「それじゃあ、アマルさん。道案内ありがとうございました。荷物の整理があるので、これで……」

「そうね。もつと喋りたい事もあるのだけど、ここまで来るのにも疲れただろうしね、それじゃあ、ゆつくり休んでね」

アマルは手を振り、帰っていく。エリスはアマルに対して深く頭を下げ、見えなくなるまで、礼を続けた。

アマルが見えなくなつてから、エリスは頭を上げ、パトを見る。

「それじゃあ、お邪魔するね」

「あ、ああ」

エリスは顔を上げ、パトに微笑む。パトは「戸惑い」ながら、返事をして家の中へと案内する。

エリスが扉を開け、家の中に入ると、エリスの顔が一瞬「緩んだ」が、中に人がいるのに気づき、すぐに笑顔を作る。

「あれ？ お客さん？」

エリスはリビングに座るある女性の姿に気づく。

そしてその女性に対峙するかのように、向かい合った。

「初めまして、私はエリス・グランツ。『王立魔法学園』で魔法の研究をしている魔法使いよ。あなたは？」

エリスはそう言い、手を伸ばし、握手を求める。

「『ヤマブキ デス』」

しかし、ヤマブキは軽く自己紹介をしただけで、握手にも応じない。

『笑顔』を見せながら喋るエリスとは『対照的』に、ヤマブキは反応が無いわけではないが、表情も何一つ変えず、『愛想』を感じさせない。

「ふうん、ヤマブキさんって、言うんだ。よろしくね」

エリスはヤマブキの手を無理やり掴み、無理やり握手をさせる。ヤマブキはエリスにされるがままだが、抵抗する様子もない。

パトは問題がないならと、遠くから二人の様子を見守る。

握手を終えたエリスは一步下がると、ヤマブキを下から上へ、ゆっくりと眺める。珍しい服装に興味を持ったのかとパトは一瞬思ったが、そうではなかった。

何かに気づいた。いや、最初から気づいていたのだろう。ヤマブキが常人ではないということに。

一人で納得したエリスは、腰を落とし、座っているヤマブキに視線を合わせる。

「ヤマブキさん、あなたそれなりの『魔力』を持つてるのね。特にその胸に付いた『魔石』。……少し見せてもらって良いかな？　『魔法使い』としては、その『魔石』に興味があるの」

突然のエリスの言葉にパトは止めに入ろうとする。だが、それよりも早くヤマブキは『拒否』した。

そしてエリスも拒否されることが『分かっていた』かのように、ヤマブキに軽く頭を下げて謝る。

「そうよね。ごめんね。会ったばかりなのに、『こんなこと』言っちゃって……」

エリスは軽く笑顔を見せ、場を和ませようとするが、ヤマブキは相変わらず表情一つ

変えず “無反応” を貫いている。

自分から言い出したこととは言え、ここまで反応がないと、さすがのエリスも “お手上げなのか”。それとも何かを “探ってなのか”。言葉数が少なくなり、エリスのヤマブキを見る目は徐々に鋭くなっていく。

「…………ふ、二人とも?」

二人の会話に緊張感が漂い始めたところで、パトは声を掛けようとするが、それと同時にエリスが立ち上がり、

「あ、そうだった。私、研究用のレポート書かないと行けないんだった。……パト、 “部屋借りる” ね」

そのまま、逃げるようにパトの部屋へと入っていく。

「あ、エリス!!」

パトもそれを追いかけて部屋へと入る。

扉を閉め、ヤマブキの居ない、〃二人〃だけの空間になる。

誰の目も気にする必要がなくなった瞬間、エリスが〃本性〃を見せる。

「あー、もう疲れたー」

エリスは全身の力を抜き、ベッドに倒れ込む。

キリツと開いていた目は半開きになり、口は開きつばなし、さつきまでの凜とした顔は綺麗さっぱり消えてしまった。

「あー、もー、めんどくさーい」

エリスは荷物も何も整理せず、ベッドで寝返りを打ちながら、ゴロゴロとダラける。

これが『エリス・グランツ』の『本性』。普段は王立魔法学園に通う、〃優等生〃とし

てそれらしい態度を“偽っている”。

だが、“パトと二人”でいる時だけ、“超めんどくさがり”の、“だらけ屋”へと変貌する。

「エリス……せめて荷物だけは片付けてから寝てくれよ」

パトはエリスの持ってきた荷物を“手慣れた”様子で片付ける。

「良いじゃない。“いつも”の事でしょ」

エリスはよく学校を抜け出し、こうしてパトの元に訪れる。

王国に友人や頼れる知り合いがないわけではないが、“本性”を曝け出し、全てを任せられる人は“パト”以外にはいない。

いつも“優秀な学生”として振る舞っているからこそ、“偽りの自分”に疲れた時は、それを意識しないで居られる“パト”の元に訪れるのだ。

エリスは寝つ転がりながら、横目で片付けをするパトを睨む。

「それで、誰よ。あの女」

女とはヤマブキについてだろう。

誰と言われても、先程自己紹介をしていた通りである。しかし、エリスが求めている答えが、そうでないと分かっているパト、語り出す。

「ヤマブキさんか……。ヤマブキさんは科学文明（アルシミー）の……………」

パトは一から説明しようとするが、エリスは寝返りを打ちながら、それを止める。

「あー、待った。めんどくさいから、関係する単語を並べて教えてー」

「え、……ああ、『ヤマブキさん』『科学文明（アルシミー）』『出会った』『助けられた』『居

候』『頼まれる』

パトは一瞬戸惑ったが、思い付く限りの単語を並べ、エリスに伝えると、エリスは小さく頷き、

「……うううん。だいたい分かったから、もう良いよ」

納得したようで、体を伸ばし、リラックスすると寝返りを打ち、目を瞑る。

いつもの事なのだが、パトはエリスに毎回驚かされる。

今ので理解できたとは思えないが、エリスなら理解できるのだろうと、パトは深く考えるのをやめる。

グチャグチャに入れられた荷物を入れ直したパトは、荷物を持って立ち上がる。

「ほら、エリス。立って」

「何よー？」

「俺の部屋なんだが、今、ヤマブキさんに貸してるんだ。すまないが、今回は父ちゃんの部屋で我慢してくれるか？」

そう、現在パトの部屋はヤマブキに貸している。

その為、使える部屋は、倉庫とリビング、そして父の部屋のみであるが、布団を敷けるのはガオの部屋しかないのだ。

春先は朝方が冷える。パトは布でも巻いて耐えれば良い。エリスには父のベッドを使ってもらおうと考えたのだが……。

パトの言葉を聞き、エリスは飛び起きる。そしてベッドの上で座ると、凄く嫌そうな顔をして全力で拒否する。

「嫌よ！ そんなの!!」

「…………いや、でも」

「絶対嫌よ!! だって……………あなたのお父さん、臭いじゃない!!」

まさかの理由に驚くパト。

「そんなことは…………!!」

パトは否定しようと、両手を前に出すが、

「……………それは……………そうだが……………」

否定できなかった。

「なら、あのヤマブキって子に、お父さんの部屋を貸せば、良いじゃない!!」

「ヤマブキさんはお客さんだぞ!! ああ臭い部屋を貸すなんて……………ん?」

エリスが冗談半分でパトに提案した時。
キッチンの方から焦げ臭い匂いが流れ込んでくる。

「……………何よ？ この匂い……………」

「まさか……………」

朝食の準備をしている途中に、エリスたちが訪ねてきたため、卵を焼きっぱなしだったことを思い出す。

「やばい!!」

パトはエリスを部屋に残して、急いでキッチンに向かう。

暖炉に置かれたフライパンからは、黒い煙が漂い、異臭を放っている。

「あちやう、やつちやつたな」

フライパンの中を覗くと、真っ黒に焦げた卵が出来ていた。パトは頭を抑え、貴重な卵を無駄にしてしまったことを悔やむ。しかし、もうやってしまったことはやってしまったことだ。

「……………」

だが、この状況を防ぐことはできたはずだ。

パトは後ろを振り返り、ヤマブキを見る。

ヤマブキは椅子に座ったまま、ずっと動かずにいたようだ。

こんな状態になっているのに、何も行動を起こさなかったヤマブキに、パトは疑問と不信感を持つが、責任を押し付けるわけにはいかない。

料理中に目を離れた自分が悪いと自分を責め、ヤマブキに頭を下げる。

「…………す、すみません。すぐ作り直しますから…………」

パトは焦げた卵を自身のお皿に盛り付け、新しい卵を割り、再び作り始める。

卵に火を通しながら、細かく砕き、塩胡椒で味をつける。

卵を焼いているうちに、パンをオーブンに入れ、焦げ目がつくまでじっくり焼く。

しばらく経ち、三つのパンが焼き上がった。

その上にスクランブルエッグを乗せ、さらにその上にケチャップをかける。

お皿に盛り付け、キャベツとトマトも一緒に乗せれば、完成。

スクランブルエッグトースト。

「よし、出来た」

パトはリビングにあるテーブルに出来上がった朝ごはんを置く。

「エリス!! 出来たよ!!」

パトが部屋で寛いでいるエリスに呼ぶ。すると、エリスはひよつこりと顔を出す。

「ん、朝ごはんね。ありがとう」

エリスは平然と席に座る。

パトはエリスに、朝ごはんが必要かどうか、聞いていないが、大抵エリスが訪ねてくる時は食べていない。

パトに作って貰えるからと、エリスはご飯を食べて来ないのである。

パトはコップを持ち、二人に聞く。

「二人とも、お茶と牛乳どっちが良い？」

エリスはテーブルに置かれた料理を見て、迷う事なく答える。

「牛乳でお願い」

それにつられるようにヤマブキも答える。

「私モ同ジデ、才願イシマス」

パトは二つのコップに、牛乳を注ぎ、二人に渡す。

「はい」

「ありがとう」

「アリガトウゴザイマス」

パトがコップを渡すと、二人は礼を言い、牛乳を一口飲む。

二人とも口元に牛乳の跡が付いている。

「それじゃあ、食べようか」

パトが席に座ると、三人は食べ始めた。

??????????

??????????

「そういえば、パト……」

半分ほど食べたところで、エリスはパンを皿に置き、パトの顔を見る。

「〃モンスター大量発生 〃。何か 〃原因 〃は掴めたの？」

「いや、まだ何も……父ちゃんが 〃村長会議 〃で議題に出してるから、それで何か、発見があれば良いけど」

モンスター大量発生の件については、前々からエリスにも相談していた。

「そう、……………一応、私の方でも調べてみたんだけど。この辺りで『魔術』に関する話を聞いたことはある？」

「いや、俺は聞いた事ないな。しかし、それが『モンスター大量発生』と何か関係があるのか？」

「確実にとは言い切れないけど、『可能性』はある。この前来た時、この辺りでは珍しいモンスターまで出現したって言ってたよね」

「ああ、昨日は『ベアウルフ』を見た」

「『魔術』の中には、『召喚術』に近いものがあるらしいの。専門外だから詳しくは分からないけど、いくつか実例も残ってる」

「じゃあ、その『召喚術』で『モンスター』が大量発生している可能性があるのか……………ん、だとすると、魔術を使える、『魔術師』が村の近くにいることになるよな」

パトは椅子から飛び上がるように、立ち上がる。

その様子を見ながら、エリスは落ち着いた様子で牛乳を飲む。

「念のためもう一度言うけど、『可能性』の話だから。もしも、『召喚術』が使われているのなら、『魔術師』の存在は否定しようはない。でも、他の『原因』だって考えられる。『季節』や『時期』的な『自然的な現象』。王国の『魔道具工場』からの『排気魔素』などの『公害的な原因』。『可能性』はいくつも考えられる」

パトはエリスに言われ、現状何もすることができないことを改めて気づき、再び座り食べ始める。

「でも、出来る限り早めに『原因』を突き止めないと。村の『結界』も弱くなってるし、結界を張り直したくても、張り直している間にモンスターに襲われる可能性がある以上、貼り直すのは困難」

「サージュ村」には村を覆う大きな『結界』が張られている。目には見ることがで

きないが、魔素”から生まれた”モンスター”の侵入を防ぐ効果がある。

”70年前”、かなりの腕の”実力者”が張ったものらしく。長い年月”の間、”結界”を張り直す必要はなかった。だが、さすがに”結界”も”弱まり”始めている。

その為、結界を貼り直したいのだが、70年前に貼られた結界はかなり”複雑”で、結界を貼り直すためには、かなりの時間がかかるようだ。

「……何か、手がかりはないのだろうか」

続く

第5話 【冒険者一行】

金髪の男がナイフを振り、ベアウルフに攻撃を仕掛ける。
しかし、ベアウルフは一步後退しナイフを華麗に躲す。

バンディ山の北西の外れにある林。そこに三人の冒険者と一匹のモンスターが交戦をしていた。

「ダズ!!」

金髪の男は丸刈り頭の男を呼び、指示を出す。

「分かってるっすよ!」

丸刈り頭の男は魔法陣を展開し、自身に《身体強化》の魔法を付与すると、

「ウオオっス！」

丸刈りの男はベアウルフに殴りかかった。

しかし、ベアウルフは宙へと飛び上がり、丸刈りの男の攻撃を間一髪で避ける。空振りに終わった拳は、流れるように地面に突き刺さり大地を砕く。

「すばしっこいっすね！ ……………って、なッ!？」

大地を揺るがした拳は地面にめり込み、埋まってしまう丸刈りの男は身動きが取れなくなる。

そんな身動きが取れない丸刈りの男を見て、好奇と思ったのか。ベアウルフは空中で向きを変えると、丸刈りの男目掛けて特攻してきた。

「危ない!!」

丸刈りの男の首筋に噛みつこうとしたベアウルフ。しかし、突如として現れた見えな
い壁にぶつかり、丸刈りの男に後一步のところで牙は届かなかった。

「《空壁（ミユールエール）》」

それは丸刈りの男の後ろにいた、オレンジ色の短髪の魔法使いの放った魔法。

空気を凝縮させ、クッションを作る作る魔法。風魔法の中でも中級レベルの魔法であるが、多くのところで活用される汎用性の高い魔法だ。

しかし、この魔法を放った魔法使いはまだ魔法の操作に慣れていないのか、持続することは出来ずにすぐに解除した。

「た、助かったつすわ。ミエさん」

「当然よ!! 私を誰だと思ってるのよ」

丸刈りの男は拳を地面から抜くと、魔法使いに礼を言う。

ベアウルフは消えた《空壁（ミュールエール）》を警戒し、丸刈りの男へと攻撃を仕掛けようと回り込もうとする。

「おい!! 油断するな! ダズ!! ミエ!! まだだぞ!」

ベアウルフの姿を少し離れたところから見ていた金髪の男が二人に向けて叫ぶ。油断していた二人だが金髪の男の言葉を聞くと、すぐに戦闘態勢に戻る。

金髪の男は《魔法陣》を展開すると自身に《軽量化魔法》を付与する。そして身軽になった状態で、ベアウルフにナイフを向け切りかかる。

丸刈りの男を狙っていたベアウルフであったが、金髪の男に気づくと、身軽な身体を利用して森の中を縦横無尽に動き出した。

「くらえ!!」

ベアウルフは上手く地形を利用して避けていく。金髪の男も負けず劣らず追いか

るが、致命的な一撃を与えられない。

「コイツ、早いつ」

丸刈りの男も魔法陣を展開し、金髪の男の援護に行こうとするが魔法使いに肩を掴まれ止められた。

「なんすか？ ミエさん」

「アンタが行っても意味ないわ」

「ひ、ひどいつすわ、ミエさん。俺だって《身体強化》を使えば……」

しかし、魔法使いは首を振る。

「それは無理よ。アンタ……デブなもの」

「ガーン！ ひどいつすわ〜」

丸刈りの男はお腹を摩る。

そのお腹はスイカでも入っているように大きい丸い。

「だから、アンタはトドメ。アンタのパワーなら確実に倒せる」

魔法使いに言われ、丸刈りの男は自身の拳を見つめる。

「……それも、そうっすけど……。どうやって、ベアウルフを捕まえるんすか？」

そう例えパワーが有ったとしても、当てられなければ意味はない。

「私に“作戦”があるの」

「“作戦”っすか……」

魔法使いは丸刈りの男の耳元で作戦を聞かせる。

そして丸刈りの男は魔法使いから作戦を聞くと、納得したようで再び、魔法陣を展開し、《身体強化》を付与すると戦闘をしているベアウルフと金髪の男の元へと走っていく。

金髪の男はベアウルフを追いかけ続けるが、そろそろ疲れてきたようで追いかける速度も遅くなってきた。

「リトライダーさん!!」

そんな金髪の男だが丸刈りの男がやってきたことで、一旦ベアウルフを追いかける速度を下げ息を整え直す。

「遅いぞ。ダズ!!」

「す、すまないっすわ。でもミエさんと作戦を考えたっす」

「作戦？　なんだ……」

金髪の男は作戦に疑問を持ち尋ねるが、丸刈りの男はそれには答えず、金髪の男の体を抱きしめるようにガッチリ掴む。

「ん？　なんのつもりだ………ダズ」

「それじゃあ、行くつすよ」

丸刈りの男は金髪の男を持ち上げた。

《身体強化》の魔法の効果により、運動能力が増上している。そのため簡単に持ち上げることができる。

そしてその強化された肉体を使い、

「お、おい!!　まさか!!」

「そのまさかつす!!」

丸刈りの男は金髪の男をベアウルフに向かって投げ飛ばす。

さすがのベアウルフも仲間を投げるとは思ってたようでも動揺し、避けるのが一瞬遅れてしまう。

しかし、ベアウルフの俊敏さは高く、遅れてもどうにか避けることができた。

だが、ベアウルフには見えてなかった。

投げられる金髪の男に隠れ、丸刈りの男が走ってきていたということに……。

「これで終わりっす!!」

しかし、ベアウルフは素早い動きで有名なモンスターである。

不意をついたとしても、普通の攻撃ではベアウルフに避けられてしまう。だから、

「ウウオオっす!」

丸刈りの男は金髪の男の足を掴むと、自身を軸にし回転し始めた。

金髪の男は足を掴まれたまま、ぶん回される。

すでに攻撃を警戒し後ろに下がったベアウルフであるが、金髪の男を武器に使った攻撃は、ベアウルフの想定していた距離よりも長く。

ベアウルフは金髪の男の頭部に当たり、吹き飛ばされる。

吹き飛ばされた衝撃で岩に背中を強打したベアウルフは気を失い倒れ、魔素と化し姿が消える。

金髪の男も頭に大きなタンコブが出来上がり、そのまま意識を失った。

「よ、よっしやっすー！」

「やった!! 私たち、三人だけでモンスターを討伐できた!!」

ベアウルフを討伐した二人は、初めて三人だけでモンスターを倒した喜びから、金髪の男を放置してハイタッチをする。

そしてお褒めの言葉を貰おうと、高木の上から見下ろしていた鎧の男を見る。

しかし、その男は頭を抱えるため息を吹く。そして武器を持って降りてくる。

「お前らな」

呑気に武器をしまおうとする二人を見て、鎧の男は再びため息を吹きそうになるが、それを抑えて金髪の男を指差す。

「ほら、お前ら、リトライダーを起こせ……。そろそろくるぞ」

二人は状況が分からず首を傾げる。

ベアウルフは討伐した。なのに何が来るといふのだろうか。

そんな二人が疑問に思っていると、森の奥から唸り声が聞こえだす。

そしてその猛獣のような唸り声に聞き覚えがあることを思い出し、二人は身を構える。

「ま、まさか……」

「まだ、いるんすか？」

怯える二人を背に、鎧の男は巨大なオノを唸り声の聞こえる林の奥へと向ける。

「当たり前だ……。ベアウルフは群れを好む。一匹のわけがないだろ」

??????????

??????????

月の光も入らない暗闇の森で、四人の男女は火を焚き、身を寄せ合っていた。

炎の脇には串に刺さった魚が置かれており、焦げ目がついた魚を各々が手を伸ばし口にする。

「ブッハアッ！」

リトライダーが喉を抑えてむせる。

「またつすか、リトライダーさん。しっかり噛まないから骨が刺さるつすよ」

「うるせー！ ダズ！！ テメーが俺を投げるから……こんな大きなタンコブが出来たんだ！！ 痛いんだよ！！」

魚の骨を魚で流し込もうと、どんどん口に入れるリトライダー。

その姿を見ていたミエは魚を入れた状態で大きく口を開けて笑う。

「アハハ！ でも、本当にでっかいタンコブ。ダズも酷いことするね……ッ!? 痛、骨が刺さった」

「いや、あれミエさんの作戦……ッ！ 骨がア！ 刺さったつす！」

骨の刺さった三人を無視し、ガーラは一人黙々と魚を食べ進める。

ガーラは『水晶（クリスタル）』の称号を持つ “冒険者” である。

“駆け出し冒険者” である三人とは、ある出会いがきっかけで、弟子 “入りをせがまれ、付き纏われている”。

「……ガーラ師匠」

ガーラが魚を食べ終わるのを見計らって、三人は立ち上がり頭を下げる。

「すみません。俺たちが未熟なばかりに今回も助けてもらって」

「俺はお前たちの “師匠” になった覚えはないが……………」

三人はさらに深々と頭を下げる。

「そうです。俺たちはただガーラ師匠を尊敬して、師匠の受ける依頼を追いかけているだけです。しかし、そんな俺たちを師匠は毎回助けてくれます」

ガーラは食べ終わった魚の骨を焚き火の炎の中に投げ捨てる。

「……………うぬ。毎回毎回……。いつモンスターに食われてもおかしくないな」

三人は申し訳なさそうに縮こまる。

「だが、毎回毎回、お前たちは成長してる。一匹のベアウルフとはいえ、お前たちは討伐した……………成長したな……………」

「し、師匠……………」

三人は泣きそうになりながら、ガーラに飛びつくようにするが、ガーラは体を捻り避ける。避けられた三人は地面に顎をぶつけるが、すぐにガーラに顔を向ける。

「俺は“師匠”になった覚えはない」

ガーラはそう言い、三人から目を逸らした。

??????????

??????????

翌日、冒険者一行はベアウルフの討伐を終えたことを「ギルド」に「報告」するために、「ルガル村」へと向かっていた。

「あ、ミエさん、それ、俺のオヤツっす」

「良いじゃない、少しくらい」

「良くないっす。ミエさん、いつもそう言って全部食べるっす」

小さな箱に入ったクッキーを取り合っている二人。

そんな二人の後ろから肩を上下させ、息を切らせて助けを呼ぶ声が聞こえる。

「ダズ、ミエ……………そろそろ、変わってくれねえか。もう疲れて……………」

三人分の荷物と装備を持ったリトライダーは、その場に座り込む。

「何よ。疲れたアピール？ そんなことしないでいいから、早く立ちなさいよ」

「そうつすよ。ジャンケンに負けた人が装備を持つて、言い出したのはリトライダーさんつすからね。俺は変わらないつすよ」

リトライダーはいつそのこと、荷物を全て置いて行こうかとも考えたが、二人の先にいるガーラが先へと進んでいくのを見て、置いて行かれたくない一心で付いて行く。

「……………ン？」

しばらく進んだところで、ガーラの歩みが止まる。

「どうしたんすか？ ガーラ師匠もリトライダーさんに荷物持たせる気になったつすか

「？」

「……………そんなふざけたことはしない。それよりも……」

ガーラは三人にバレないように密かに「魔法計算」を行い、『魔力感知』を使っていた。

『魔力感知』とは使用者を中心に、周囲の魔力や魔素の動きを察知できる魔法。

周囲の「警戒」や「探索」時などに使うことが大半であり、周囲の警戒のために使っていたのだが。

「あの洞窟……異常だ……」

その魔力感知にある洞窟が引つかかった。

魔力感知を使用していなければ気付くことはできないが、魔力の異常な流れと感覚。経験豊富なガーラはこの洞窟が通常とは違うことにすぐに気づいた。

「異常？ 何かいるんですか、ガーラ師匠？」

「……………」

最近ギルドでの依頼にある疑問を抱いていた。

それは本来ならば、北西の地では出現するはずでないモンスターの討伐依頼。何か異常事態が起こっているのではないかと懸念していたのだが、この魔力の感覚からガーラはある考えに至った。

「おい、お前ら、まずはギルドに戻る。俺たちだけじゃ危険だ。他の冒険者に頼んで……調査はそれから……………」

ガーラは洞窟が危険だと考え、一度ギルドに戻ろうと提案するが……。

リトライダー、ダズ、ミエの三人は洞窟に無鉄砲に入っていく。

「おい!! お前ら!!」

「大丈夫ですよ!! 何かあるなら探索あるのみです!!」

「大丈夫つて、どこからその根拠は来てるんだ……」

ガールは止めようとするが、止める前に三人は洞窟の奥へと入って行ってしまった。

「……………馬鹿が……………」

ガールは《魔法陣》を展開し、《魔法計算》を行う。
そして新しく《魔力感知》を使用する。

「……………昔の俺なら、気にすることはなかっただろうに……………今の俺はどうかしてる」

ガールはオノを手に洞窟の奥へと入っていった。

続
く

第6話 【ゴブリンの軍勢】

「話って何だよ、エリス」

エリスに話があると呼ばれたパトは洗濯物を干した後、自身の部屋へと向かう。

ヤマブキに村を案内すると言ったこともあり、長い時間は取られたくはなかったが、エリスの「表情」を見て断ることはできなかった。

普段二人でいる時に見せる「ダラけた表情」とは違う。しかし、だからと言って、「優秀な魔法使いエリスとしての作り笑顔」ではなく、ただただ深い「不安」を隠す「優しい表情」。

そんな表情を見たパトは、エリスの話を断ることは出来なかった。

どんな話の内容であるかは分からない。どんな事件が起こるかは分からない。でも、それに対して、エリスはパトを頼ろうとしている。

だからこそ、正面から話を聞こう。どんなに辛いことでも、どんなに大変なことでも、乗り越えられないことはない。

——あの約束もある。どんなことでも力になってやる——

パトは強く決意を決め、部屋の扉を開ける。

「あ、やっときた」

しかし、パトの決意は一瞬で揺らいだ。

パトの想定では、エリスは椅子に座り、真剣な表情で本題に入ると思っていた。

だから、こんな風にダラけモードでベッドの上でゴロゴロと寝っ転がっているなんて、微塵も想像していなかった。

「……………エリス」

「ん、なに〜？」

「『真面目』『な話があるんじゃないなかったのか？』」

想定外の光景に部屋でも間違えたかと思ったが、そんなことはない。取り敢えず、エリスは寝ているが、こちらとしては問題はない。

文句の一つでも言ってやりたいが、言い合いになる方が厄介なので、そのまま話を聞くことにした。

エリスは寝返りを打ち、仰向けになると気怠そうな口を開く。

「ええ、そうよ。……あのー、『ヤマブキ』さんって人。あの人について、気になること

があるの」

気の抜ける姿勢であるが、
「ヤマブキ」と聞き、その「話」の重要性に改めて理解する。

パトは「ヤマブキ」について、まだ深く知らない。彼女が「何者」で、「どこからやってきた」のか。未だに「不明」な点が多い。

しかし、エリスは何か知っている。

握手の時もそうだが、エリスにはヤマブキについて「情報」を持っているようだった。

パトは長話を覚悟し、椅子を取り出すとベッドの隣に置く。

「ヤマブキさんについてか……。何か知ってるのか？」

パトは椅子に座ると、エリスに顔を向ける。

たとえエリスが話をする姿勢で無いとしても、パトはそれに釣られるわけにはいかない。

どんな時でもどんな相手でも向き合うことが大切だとガオから教わったからだ。

しかし、エリスはパトの態度など関係なしに、今度は壁の方向に顔を向け、小さく体を丸める。

“ダラけモード”になったエリスだが、彼女の優秀さには嘘はない。

パトの頭の中にはエリスのあの表情がこびりついて離れない。

エリスが心配をかけないように誤魔化す時は必ず何かある。それはいつも彼女を傷つける。

優秀な彼女でも解決できないことはある。だからこそ頼ってほしい。

ヤマブキについて一体何を知っている。興味もあるが、それと同時に恐怖を感じる。

パトが喉に溜まった唾を飲み込むと、エリスが口を開く。

「……そう、ね。そうね。でも、その前に喉かが渴いたから、”お茶”ちようだい」

「……………え」

エリスからの突然の「お茶くれ」発言に、パトは困惑して硬直する。
エリスは足元にあった布団を、足で器用に引っ張ると、布団の中に潜り込む。

「……………早くー、喉乾いたー」

「何でだよー！」

真面目な話をするのかと思いきや、いつも通りの”ダラけモード”。
しかも、お茶が持って来いの命令付き。

「お茶くらい自分で入れろよ。どこにあるかは知ってるだろう？」

「いやよ、めんどくさい」

パトは深いため息を吹き、椅子から立ち上がる。

これ以上、エリスに文句を言っても意味がない。エリスがこの状態（ダラけモード）に入ると、絶対に動かない。

こういう時は大人しく、エリスの頼みを聞くしかない。

「はあ、分かった……」

それにパトはどんな “些細” なことでも、 “頼まれる” と断れない。

父親であるガオもそうなのだが、自身のことよりも他人のことを優先してしまう。そんな強い性があるのだ。

これも “村長家（エイダー）” の “呪い” なのだろうか。

「あ、ついでに “林檎” も剥いて、買ってきたから……」

お茶を入れてこようと、部屋を出ようとしたパトにさらに命令する。
パトにはもう文句を言う気力もない。

「はいはい。バックの中？」

「当たり前でしょ、さつき見なかったの？」

バックを覗くと、中には三つの林檎が入れられていた。

「は～や～く～」

「はいはい」

エリスに急かされ、三つの林檎を手を持ったパトは部屋を出る。
パトがキッチンでお湯を沸かし、林檎の皮を剥こうとナイフを手にした時。

玄関が勢いよく開き、駆けつけてきた。

「パ、パトさん!! 大変です!!」

それは村の門番であるルンバという青年。

ルンバは汗を垂れ流し、息を切らしてパトの元へと駆け寄る。

詳しい状況は分からないが、事件が起こつたのは明らかだ。

「何があつたんですか?」

パトはナイフを置き、急いでルンバにタオルを渡す。

ルンバはタオルを受け取ると、軽く汗を拭いて荒い呼吸のまま報告を続けた。

「ゴ、ゴブリンの大群です!! 大量のゴブリンが村に向かってきています!!」

「ゴブリンの大群!?!」

ゴブリンとは魔素から発生したモンスター的一种であり、人間に害を成すことから討伐指定モンスターに分類されている。

一匹一匹では脅威とはなり得ないが、群れをなし武器を使用することから、油断できるモンスターではない。

しかし、だとしてもモンスターを見慣れているはずの門番であるルンバがここまで動揺していることを考えると、通常のゴブリンとは何か違った点があるのかもしれない。モンスター大量発生の際もある。早めに打てる手は尽くした方が良いでしょう。

「分かりました。案内してください」

??????????

??????????

パトはルンバに案内され、村の“南側にある門”に着くと、すでにそこには騒ぎを嗅

ぎつけた、村の男共が顔を合わせていた。

「来たか……パト」

パトに気づいた村人達は道を開けると、一人の男が顔を出す。

男は周りに比べると小柄で、それもあつてか歳の割には若く見える。しかし、その顔は誰よりも落ち着いており、実際にこの場の誰よりもこの男は場数を踏んでいる。

「マテイルさん、ゴブリンの群れはどうなってますか？」

「ああ、現在も進行中だ。自体の重さは……直接見てもらった方が分かりやすいだろう」

『マテイル・ルリイ』。村の“防衛長”を勤め、若き頃は“王立魔法学園”に通っていたこともある実力者である。

そして彼の得意魔法は《風魔法》。周囲に風を起こし、それをコントロールすることによって優れている。

マテイルは“魔法陣”を展開すると、右手を下から上へと仰ぐように移動させる。すると、パトの足元から風が吹き上がり、パトの体が宙に浮く。

マテイルの《風魔法》により、上空に浮かび上がると、三メートルもある木造の防壁は既に足と腰の高さになり、外の様子を見下ろすことができる。

そして外を見下ろすことのできるようになったパトは、外を光景に言葉を失う。

「い、これは……」

パトはゴブリンの大群とはいえ、精々五十程度の群れだと考えていた。しかし、その予想を大きく外れた。

防壁の先にある、広く広大な草原。その土地を埋め尽くす全身緑色の小鬼。その数およそ“五百匹”。

パトの想定を遥かに上回る数のゴブリンが村に向かって進行していた。

「マテイルさん……下ろしてください」

パトは下にいるマテイルに風魔法を弱めるように頼む。

「ああ……」

マテイルが拳を握ると、風魔法の勢いは弱まり、パトの足は地面に降り着く。

パトが降りたところで、村一番の臆病者、『パキス・ナマトナ』が涙目でパトに抱きつく。

「……あ、あの数は異常だ!! 勝てっこないぜえ!! 逃げるしかねえよ!!」

パトはパキスの姿を見て同情の目を向けるが、やるべき事は変わらない。

「それは無理です、パキスさん。ゴブリン達は確実にこの村を標的にしてる。もう逃げ場はありません」

モンスターとは意志を持たない非生物。

魔法計算を使用し、魔力を使用した際に発生する魔素と呼ばれる有害物質が一定数集まると、そこにモンスターが出現する。

モンスターは、魔力を持つ動物やモンスターを食うことで、更なる上位のモンスターに進化し、魔素融合体としての活動を可能にする。

そのため、人間や家畜を襲うのだ。

「ああ、奴らはより多くの魔力の集まる場所を好む。逃げたところで追われるだけだ」

マテイルはパキスの肩を叩く。

パキスは顔を赤くし涙目になりながら、助けを求めるように周りを見渡す。しかし、それを理解しているのは、パトやマテイルだけじゃない。

すでに村人達の覚悟は決まっているようだ。そしてそれに気づいたパキスは地面を見つめて諦める。

パキスが納得したところで、マテイルがパトの顔を見る。

「どうする？ パト」

パトは集まってくれた村人達を見渡す。

「皆さん、手伝ってください。近づかれる前に数を減らします」

??????????

??????????

南の防壁に二十四人の男が集まっていた。

「ありがとうございます。皆さん」

パトが頭を下げ、感謝の気持ちを伝えると、集まってくれた村人達は当然の事だと言って武器を手を取った。

「ここは俺たちの村だ。俺たちが戦わなくて誰が戦うんだ」

「……みんな」

「だが、戦えない女、子供には、北門からコット村に逃げてもらおう。だよな、パト」

「はい。そうするつもりです。そちらはパキスさんにお願いしようと思いますが、お願いできますか？」

パトがパキスの方を向き、そう言うときみんなもパキスに顔を向ける。

パキスは自身の顔を指で指し、目を丸くして驚く。

「お、おれえ!？」

「はい、パキスさんならコツト村の人とも顔見知りですし、もしもの時に魔法も使えます」

「だったらパト、お前もシリバと知り合いだろうが!! 俺よりもてめーの方が……」

「俺は村を任されてます。今、村から離れるわけにはいきません」

パキスにはまだ不満があるようだが、マテイルに肩を叩かれ、パキスは口を閉じる。

「時間がないんだ。頼むぞ、パキス。お前にしか頼めないんだ。俺の家族を守ってくれ……」

パキスは下を向くと、拳を強く握りしめ、覚悟を決める。

「……………分かった。やってやる!! やってやるよー!!」

「ああ、頼んだ」

マテイルはパキスの背中を押し、村から脱出する人達を呼ぶために村へと走らせる。

残り戦う者たちはパキスに家族を任せて戦闘の準備をする。

防壁の数キロ先にゴブリンの大群がいる。

どこまで数を減らせるかは分からない。だが、やらなければ、後ろにいる家族に危険が及ぶ。

“家族”を守る為に、ここを最大の“砦”となる。

「マテイルさん、《風魔法》で何人まで上空に持ち上げられますか？」

「同時に持ち上げて安定感を持たせるなら、十人くらいだな。それ以上だとコントロールが難しい」

「分かりました」

パトは額に指を当て考えると、残った村人に指示を出す。

「弓を使える人はマティルさんの《風魔法》で上空から弓で攻撃してください。後の方は俺と一緒に防壁に来てください。この村を絶対に守りましょう」

それぞれが持ち場に着こうと移動し、マティルが《風魔法》で弓を持った村人達を空中に持ち上げた時。

村一番の慎重者『ルンバ・アイロボ』が何かに気づく。

「ま、待って!! ゴブリンの群れに、誰か居る!!」

「え!?!」

パト達がゴブリンの群れを注視すると、そこには三人の男女が必死になって逃げている姿が見えた。

装備や武器からして『冒険者』であろう。

三人は泥だらけになりながら、ゴブリンの群れから必死に逃げ続けている。少し揉めてるようにも見えるが、かなり危険な状態なのは確かだ。

「はあはあ、ヤバいつす、このままじゃ追いつかれるつすよ」

「嫌よ！ まだ死にたくない！！ リトライダー、あんた囧になりなさいよ！」

「嫌だよ！ 俺も死にたくはねえ！！」

ゴブリンに追われながら村に向かっては全力で逃げる『三人』。それを見た村人達は動揺する。

「どうする、パト！！」

マテイルはパトに意見を求める。

本来ならば、冒険者ごと弓で撃ち抜くつもりベストだろう。

冒険者とゴブリンの距離は精々数十メートル。すぐ側まで迫っている。冒険者達を助けようとすれば、自分たちにも「危険」が及ぶ。

「……村のため……です。彼らには……………」

パトが決断をしようとした時。

冒険者達の「声」が耳に入る。

「助けてくれ!!」

「私を助けなさい!!」

「助けてくれっす!!」

それは助けを求める。救済を求める言葉。

ただ、それだけの言葉。

しかし、その言葉がパトの“決断”を“鈍らせた”。

「……………」

「……パト、撃つていいのか？」

「……………待ってください。マテイルさん」

「パト……………辛いのは分かる。だが!!」

——パトは村長である父親のガオ・エイダーの背中をいつも見てきた——

どんな時でも、どんなことがあっても……………例えばそれが愛する者の死際であつても、人々の支えであつた。

困っている人を救い、助けを求める者に手を差し伸べる。

パトはそんな父親（ガオ）に憧れ、尊敬し、そして目指した。

だから、だからこそ、絶対に「助けを求める者を見殺しにはできない。

しかし、今のパトにはこの事態を奪回する策はない。どうするべきか。迷い、苦しみ、父親を求めるように村を振り返った時。

あるものが目に止まる。

——そうか、そうだよな。俺がやるべきなのは、「村を守る」こと……この「場所」を守るんじゃない——

「……マテイルさん、どんな結果になろうと後悔する。なら、今尽くせることを尽くすべ

きです」

パトは見渡す限り、村人が村に残っていないことを確認すると、

「マテイルさん、風魔法を解除してください」

マテイルに《風魔法》を解除し、弓での攻撃を止めるように指示する。

「待て、何をする気だ？ パト？」

パトの指示を疑問に思うマテイルだが、パトの言葉を聞き、パトの考えを理解する。

「ゴブリンを村の結界に閉じ込め、奇襲をかけます」

続く

第7話 【科学と魔法】

「な、本気で言ってるのか!？」

村人達は驚き、聞き返す。

しかし、パトは当然かのように返答する。

「はい、こうするのが最も最善の策です」

「なぜ、それが最善なのか、その理由を教えてください」

村人達は動揺の動揺、それは無理はないだろう。

殆どの村人がこの村で人生の大半を過ごし、この村から出て行った者たちにとっても、大切な故郷である。それはパトも例外ではない。

だから、村を戦場にすることに對して反對する。

もしも戦場になれば、村は壊れ、その形がなくなってしまう。

「壁外ではゴブリンに逃げ場が生まれます。少数でも逃げた村人達の方に向かわれれば、あちらの戦力では勝ち目はありません。それに村の中で戦えば、彼ら（冒険者）を救い、建物を利用して有利に立ち回る事もできます」

村人達はパトの判断にざわめき始める。

賛成する者、反對する者、どちらにも付くことが出来ず迷っている者。意見が割れ、それぞれが自分の意見を主張し、場が混乱する。

パトはそれを静めるため、声を張ろうと一歩踏み出そうとする。

しかし、それよりも先に一人の男が声を上げる。

「静かにしろ!! お前らの意見も分かる。だが、今は目の前の脅威をどう乗り越えるか。それを決める時だ。揉め合う時じゃない」

マティルの言葉に、ざわついていた村人達は大人しくなり、意見の主張を止める。

「みんなも分かつてるだろ！　ガオやパトがこの村の為にどれだけ尽くしてくれているか。村を守るにはこれしかない。それぞれ思い入れもある。だが、思い出ならまた作れば良い!!　パトを信じよう!!」

「……マティルさん」

村人達は静かに頷き、作戦に賛同する。

村には思い出や歴史が詰まっている。何年、何十年と積み上げてきた時間が、ここまで作り上げてきた。

だが、全てを守ることではない。守る為には何かを犠牲にしなければならない。分かつてはいるが、辛いことだ。

人が居れば意見をまとめるのは難しい。それにこんな話、誰の反対もなく進むのは普通ならば不可能だ。

だが、意見は固まった。

人によってはまだ迷っているかもしれない。反対の気持ちはまだ強い人がいるのかもしれない。

でも、例えそうだとしても、彼らは信用する。村と村人達のために、全てを尽くす人達を知っているから。

どんな結果になっても、彼らの決断なら後悔はしない。そう思えるから。

パトは敬意を払う。それは誰に対してと決まったものではない。村人に、この村に、そしてこの暖かい村を作った歴代の村人と村長に対して。深い感謝と尊敬を込める。

そしてその暖かい信頼に全力で期待に応えられるよう、全てを尽くすと誓う。

「では、エスは西門を、ルンバさんは北門を、ニントさんは東門を閉めてきてください」

パトは村の中でも運動能力に優れた三人に、閉門の指示する。

指示を聞いた三人は活気溢れる声で返事をする、それぞれ門へと走っていく。

三人が離れたところで、パトは次の指示を出す。

「他のみんなは村の中でマテイルさんの指示に従って先頭の準備をしてください。その間に俺がゴブリンたちを誘導します」

パトの指示を聞き、その場にいる人達は全員固まる。

ゴブリンを誘導するということは囹になるということ。

つまり、パトは自分から一番危険な役割をやるうとしているのだ。

マテイルはパトに駆け寄り、肩を掴む。

「パト、お前が囹役になる必要はない。それなら俺が!!」

「マテイルさんには俺の出来ない、指揮能力と戦略を練る力があります。俺が指揮を取るより、マテイルさんに任せる方が被害を最小限に抑えられるはずです」

「だとしても!!」

マテイルはパトを説得しようと試みるが、パトの目を見てそれは不可能だということに気付かされる。

それは決意の目。学生時代にも何度か目にした、不敗の目。マテイルはこの目をした者が負けるところを見たことがない。

全てを尽くし、全力でやり遂げる。

今の自分の出来る最善をやり通し、成功させる。

パトには不安も恐怖もない。それには一点の曇りもない。

マテイルはパトの肩から手を離すと背を向ける。

「……………分かった。絶対に生きて来いよ!!」

「当然です。父ちゃんとの約束ですから」

マテイルはパトを残し、村人を引き連れる。

「よし、じゃあ、みんなついて来い」

村人達はパトを心配しながらも、何も言わずにマテイルに付いて行つた。

最初はみんな、パトを囿にすることに反対だった。しかし、それぞれマテイルとは違ふところから、パトの覚悟を理解した。

呼吸、言動、経験、深く関わってきたからこそ、パトの気持ちが村人達に伝わった。

全員が村の中へと入ったことを確認すると、パトは深く息を吸う。

村を任せられる。

それは次期村長を目指すパトにとって、将来の自信と未来への期待を感じることに出来る明るく有意義な時間だ。

嬉しいことも、楽しいことも、大変なことも、全てを含めてこの経験が将来村長になる日に役立つと信じて、夢を持って過ごす。

だが、それと同時に強い責任感も感じる。

人の命や思い出がパトの行動に簡単に消えてしまうこともある。軽はずみな行動はできない。いつも体に重りをつけられている感覚に陥る。

今回の作戦もそうだ。

冒険者を助けたい。全員無事でいて欲しい。そんなパトの行動が村を戦場にした。息苦しく感じる。吸った空気が喉から肺まで届いていない。村を背負う責任。

だが、負けるわけにはいかない。

ガオとの約束がある。そして将来村長になるという夢がある。

パトは吸った息をゆっくり吐き出す。

「全部守り抜いてみせる」

パトは生まれ付き、魔力貯蔵量が少ない。その為、魔力が足りず殆どの魔法は使うことが出来ない。

だから、努力してきた。

日々村の為に、知恵を付けて、体を鍛えた。

今のパトにはゴブリンから村を守る自信がある。

「ゴブリンは足の速いモンスターじゃない。ギリギリまで引き付けて、冒険者達から遠ざけ、村の中に誘導する」

パトが走り出そうとした時。

後ろからこちらに向かって足音が、近づいてくるのが聞こえる。

気になり振り向くと、そこにいたのはすでに避難していると思っていたヤマブキであった。

「な、なんで……ヤマブキさん!？」

ヤマブキはゆつくりとパトに近づいていく。

「なんで、残ってるんだ。ヤマブキさん。パキスと避難したはずじゃ……」

「ハイ。シカシ、避難ハ断リマシタ」

「なっ!? なぜ………」

ヤマブキはパトを通り越し、ゴブリンに向かい合う。

「私ニハアナタヲ守ル。使命ガアリマス」

「使命……俺も守るってやつか。俺なら大丈夫だ!! だから避難を……」

パトはヤマブキを避難させようと右腕を掴むが、ヤマブキはそれを払い、そのままそ

の腕を横に真つ直ぐ伸ばした。

「イイエ、ソレハ出来マセン。アナタ世界ニ必要ナ存在デス。必ず守リマス」

決して強く払われたり、強い口調で言われた訳ではない。しかし、ヤマブキのパトを守るという使命感の強さに圧倒され、パトはその場から動けなくなった。

ヤマブキはパトを、その場に置き去りにし、ゴブリンの群れに向かって足を進め出す。

「パト、アナタノ作戦ノ成功確率ハ低クハアリマセン。シカシ、アナタヲ守ル確率ヲ上ゲルノナラバ」

「ヤマブキさん!! 何を!？」

ヤマブキは右手を前に出す。

その体制はベアウルフを粉々の肉片に変えた機関銃を放った姿勢。

「まさか……、や、やめろ!!」

「彼ラノ命ハ、アナタト比べレバ、価値ハ無イ」

ヤマブキの右手が音立てて変形し、機関銃へと形を変える。

「戦闘システムB0008。機関銃……」

パトはヤマブキを止めるため、ヤマブキの背中に抱きつくようにタックルをし、押し倒そうとする。

しかし、ヤマブキは微動だにせず、銃口をゴブリン達、そして冒険者に向ける。

「存在価値が無いなんてことはない。人は精一杯生きてるんだ。その命を簡単に奪って良いものじゃない」

パトはヤマブキを止める方法はないか、必死に頭を回し考える。

しかし、ヤマブキは気に留めず、機関銃を発射しようとする。

「……………発射」

ヤマブキが攻撃を開始しようとした時、パトラヤマブキの言葉を思い出す。

——彼ラノ命ハ、アナタト比べレバ、存在価値ハ無イ——

もしも、ヤマブキの目的が本当にパトを守ることならば、パトが射線上に飛び出せば、攻撃を中断するかもしれない。

しかし、一瞬でも送れば、昨日のベアウルフのように肉片になってしまう。

人を簡単に殺そうとする人間だ。パトを守ると言っているが、信用できるとも限らない。

だが、やるしかない。

パトは勇気を振り絞り、ヤマブキの前に飛び出す。

ヤマブキはパトが飛び出してきたことに気づき、瞬時に機関銃の発射を止める。

「……………パト、何ノツモリデスカ？」

ヤマブキは銃口を下げず、そのままの質問する。

「ドイテクダサイ」

「退かない」

パトはヤマブキを睨む。

「ナゼ、邪魔ヲスルノデスカ？」

「俺は彼らを知らない。だが、彼らを見捨てることは、俺を信じてくれた村の人達を裏切

ることになる。そんなことはできない」

「理解デキマセン。アナタモ、村ノ方々モ、ナゼ自分カラ危険ナ道ヲ選ブノデスカ」

なぜ、危険を犯すのか……。

そんなの決まっている。

「後悔させない為だ!!」

パトはヤマブキの腕にある銃口を両手で握り、押さえる。

ヤマブキは振り払おうと振るが、ガツチリと掴んでパトは離さない。

「もしもここで彼らを見捨てれば絶対に後悔する。そんな事はしたくないし、させたくない。犠牲の上にある平穏なんて気持ちの良いものじゃない」

「……………」

ヤマブキには納得出来ないようで、一步も下がろうとしない。

いや、パトはヤマブキに分かってもらおうとは思っていない。ただ、この件はパトが村人達と話し合い、そして考え合った結果、この作戦に至った。

ここで諦めるわけにはいかない。ここで諦めたら、ヤマブキは冒険者を見殺しにする。それはパトを信じた村人達を裏切る事になる。

力尽くでもパトを引き剥がそうとするヤマブキにパトはしがみ付き、どうにか振り払われないように踏ん張る。

そんな事をしているうちに、ゴ布林達は近づいてきている。

ゴ布林達の接近が後ろを向けているパトからも分かる。荒い息を吐き、地面を勢よく蹴り飛ばす。

その荒々しい小鬼達の接近に、パトはこのままではマズいと焦り出す。

そんな時、村門から一人の少女が顔を出し現れた。

「ねえ、お茶まだ？」

「……………え」

村から顔を出したのは、ヤマブキと同様に避難していると思っていたエリス。

「エリス!？」

「ん、ゴブリンの大群じゃない。そー、だから、騒がしかったのね」

エリスはゴブリンの軍勢を見ても、全く焦る事なく一人で納得し、パト達のいる村の外へと歩いてくる。

「エリス、お前も早く逃げろ!!」

パトはエリスを心配し逃げるように促すが、エリスはヤレヤレと気怠そうに答える。

「なんで私が逃げないといけないのよ。めんどくさい。あんなのさつさと倒しちゃえ

ば、終わりじゃない」

エリスはそう言うと、左手を上には伸ばす。

すると、左手に魔法の杖が突如として現れ、エリスの手に収まる。

魔法について疎いパトであるが、エリスがこれから何をしようとしているのか。なんとなく理解する事ができた。

「エリス!! あそこにはまだ人が!!」

「大丈夫よ。私を誰だと思ってるの?」

エリスはその場で杖を前に倒し、冒険者達に向ける。

「まずは……《極守（パルフェ・ブクリイエ）》」

エリスは冒険者達に防御系魔法を付与する。

走る冒険者達の体は蒼く光るが、彼らは必死で逃げているため、魔法が付与された事に気づいていないようだ。

「よし、それじゃあ……」

エリスが杖を掲げると、エリスの体から大量の魔力が漏れ出す。

普通ならば、魔力は目に見えるものではない。しかし、エリスの膨大過ぎる魔力はそれすら可能にしてしまう。

エリスならば、この漏れ出す魔力をコントロールすることも余裕だろう。しかし、エリスはめんどくさがり、余分な魔力を適当に放出させる。

しかし、この漏れ出した魔力ですら、エリスの力の一部にも満たない。

パトが空を見上げると、晴れていた空は、いつの間にか雲に覆われ、今にも破裂しそうな音を唸らせている。

「まさか……いや、エリスならやりかねない」

魔法というものは本来、魔力を消費し、魔法計算を行った元で使えるものだ。

しかし、エリスは今までの魔法計算を全て暗算で行なった。杖を転送させた転送魔法、冒険者達に付与した極守（パルフェ・ブウクリイエ）。どれもレベルの高い上級魔法である。

そしてレベルの高い魔法になればなるほど、高度な魔法計算が必要とされる。

どれだけの計算式を頭の中だけで計算しているのか。もうそれは誰にも想像できないものではない。

エリスは杖を振り下ろす。

「大災害（デザストル・トネール）」

村より巨大な雷が、一瞬のうちに何十本とゴブリン達に降り落ちる。

雷の直撃したゴブリンは悲鳴を上げる暇もなく、黒こげになり消滅していく。

数秒のうちに全てのゴブリンは全滅した。ゴブリンを討伐したエリスは適当に杖を振り、上空に作り上げた雲を払う。

「はあ、終わった終わった」

ゴブリン大群のいた場所は、クレーターが出来上がり、全てが灰になっている。

あれだけの雷を落としながら、村や周りの森には被害は出ていない。なの雷一つ一つをコントロールし、他への被害を減らしていたのだ。

エリスの力を知っているパトであるが、その威力と精密さは想像を大幅に上回っており、驚き声すら出す事ができない。

騒ぎを嗅ぎつけたマティルや他の村人達が駆け寄るとあたり一面に広がる灰に言葉を失う。

「い、これは………」

「これはエリスちゃんが………やったのか」

「さすがはエリス!! 村一番の天才だ!!」

「ああ、俺たちの誇りだ!!」

エリスは村人達が到着する前に、杖を隠して自身の仕業ではないように見せようとした。

しかし、この状況を作り出せるのは、この場にいる中で一人しかない。

エリスは村人達の声にすぐには反応せず、一呼吸の間を置き振り返る。

パトは、その間の感じから、振り向くのがめんどくさかったんだろうなと理解したが何も言わずそのままにして置く。

その後、冒険者達は村人達の手により、灰の山から救出された。

続く

第8話

【洞窟】

パトはゴブリンに追われていた冒険者リトライダー、ダズ、ミエの三人から事情を聞いていた。

「それでその洞窟で何があったんですか？」

彼らの話ではあのゴブリンの群れが現れたのは、ある洞窟かららしい。

モンスター大量の何かヒントになるかもしれない洞窟。その洞窟で何があったのか。村の危険を減らす為にも話してもらいたい。

すると、リトライダーと名乗った金髪の男がゆつくりと口を開く。

「ああ、最初はなんの変哲のない洞窟だった。ガーラ師匠が何をそんなに焦っているのか。俺たちには全く理解できないほどに……」

??????????

??????????

「この洞窟なんて名前なの？」

洞窟内は薄暗く、ミエの光魔法（エクレレ）をランプ代わりにして辺りを見渡す。森が近いからか、洞窟の壁や天井には木の根が諸所で姿を見せている。

「プティ洞窟っすね」

「ふん」

ミエは自分で聞いておきながら、興味なさげに返事をする。ダズはそんな素っ気ない

反応をされ、肩を落として軽く落ち込む。

洞窟に入ってからガーラの姿は見えていないが、近くにいると信じ切っている三人は安心してどんどん洞窟の奥へと進んでいく。

「また分かれ道か……どうする？」

しばらく進むと、洞窟に入ってから数回目の、分かれ道に遭遇した。

道は三本。右の道はさらに下へと続いているようだが風のような音が聞こえる。左の道は道幅が狭く人一人通るのがやつとの道だ。真ん中の道は木の根が道を塞いでいるが通れないことはなさそうだ。

「じゃあ、私は右ね」

「俺は左っす」

我先にミエとダズは自分の進みたい道を決めて、その道を指差す。

「あ……じゃあ、真ん中」

最後に残ったリトライダーは余り物の真ん中を選ぶ。

それぞれが道を選んだら、三人は顔を円陣を組むように集まる。

そして右拳をそれぞれ前に突き出すと、

「ジャンケン!! ポン!!」

三人は大声を上げ、ジャンケンをした。

ミエとダズは拳を握りしてグー、リトライダーは手を開いたパーである。

「俺の勝ちだ!! 真ん中だな」

リトライダーがドヤ顔でジャンケンに勝った手を上に掲げると、ミエが横目で睨む。

「納得いかないのよね」

「何が？ 俺の勝ちか勝ちだろ？」

「今、後出ししたでしょ」

ジャンケンの勝敗に文句をつけてきた。

実際にリトライダーが拳を出すタイミングは一瞬遅れた。しかし、それは誤差の範囲。後出しをしようだなんて考えてもいない。

「そんなことするわけないだろ!! 証拠を見せろ! 証拠!!」

「そうね……証拠は私たちよ!! ダズ!!」

ミエはダズに相槌を求める。ダズは突然のミエの振りに驚き何も考えずに適当に「ああ」と頷いてしまう。

「という訳で、さあ、右の道に行きよ!」

「お、おい!! そんなの証拠じゃ……………」

リトライダーは納得していないようだが、ミエは話を聞かず、右の道へと進んでいく。

こんな調子で洞窟の奥へと進むリトライダー達だが、しばらく進んだところで足を止める。

道の先が木材の壁で封鎖されている。木材は道を完全に塞いでおり、侵入を拒むようになっているが、古くからあるのか腐っており、所々穴も開いている。

「なんつすかね〜?」

「あれじゃない? この先にお宝でもあるんじゃないかしら?」

ミエは嬉しそうに穴の隙間から、奥を覗いてみる。しかし、明かりもない状態で洞窟の奥が見えるはずもなく、すぐに覗くのをやめる。

奥は見えなかったものの、奥にお宝があると勝手に解釈したミエは二人に先に進むことを提案する。

「ねえ、この先に進んでみない？」

ミエはそう言いながら杖を木材の壁を叩いてみせる。
すると、杖は木材の壁に当たるやゴムに当たったように不思議な力に弾かれてしまう。

「なっ、何よ！ 結界魔法!？」

ダズは不思議な力で跳ね返された杖を興味深そうに見つめる。

「結界魔法っすか？ なんか、凄そうっすね」

「やつぱり、この奥にお宝があるってことじゃないかしら!!」

ミエは嬉しそうに、もう一度、壁に開いた穴を覗き込む。だが、やはり中は暗く何も見えなかったようだ。

「ねえ、ダズ。この結界を壊してよ」

「え、これ壊せるんすか？」

「まあ、だいぶ古いものっぽいし、ちよつと強い力をぶつければ壊れるはずよ」

「そうなんすか。でも、これあんまり壊さない方がいい気がするんすけど……」

「大丈夫よ!! それより何? お宝が欲しくないの?」

「それは欲しいいつすけど」

「じゃあ、やりなさいよ」

ミエに言われダズは肩を狭くし、仕方がなさそうに右手に魔法陣で展開する。数秒後、魔法計算を終えると、ダズの拳に身体強化の魔法が付与される。

「やるつすよ!!」

ダズは強化された拳で、結界魔法ごと木材の壁を打ち壊す。

「うん、これで進めるようになったね。行くよ」

三人はなんの警戒もなく、ドンドン洞窟の奥へと進んで行く。

「ん、なんか、灯りが見えないか?」

しばらく進むと、道の先に光が見える。

「外かしら?」

ミエは光に興味を示す。

リトライダーは人差し指を舐め、濡れた指を立ててみる。

「風……………。外と繋がってるな」

リトライダー達が残念そうに戻ろうとすると、後ろから誰かがこちらに向かって行くのに気づく。

それは重たそうな鎧を着て、金属の擦れる音を鳴らし、全力で走ってくる。

「おい!! お前らこれ以上進むんじゃ無い!!」

それは赤い鎧を纏ったガーラ。

ガーラは強面の顔をさらに鬼のようにし、リトライダー達を睨んでいる。

「あれ? どうしたんすか? ガーラ師匠?」

「どうしたじゃない。ここはヤバいんだ。さっさと応援を呼んで……………」

ガーラは三人を連れ帰る為に追いかけてきた。

しかし、三人はガーラの忠告を理解できていなかった。

「なら、こつちが出口だな!! 風も感じるし!!」

「おい!! そつちは出口じゃない!!」

三人は光の見える方向へと足を進める。

そしてそこに広がっていたのは、天井に大きな穴の開いた空間。とてもじゃないが、外までは高すぎて登ることは出来そうにない。

外は森なのだろうか。外からはツタが垂れ、穴のそばには木の根つこのようなものが、所々から見られる。

「ねえ、あれ見て!!」

天井に目を奪われていたリトライダーとダズであつたが、ミエは一人空間の奥にいる

ある生き物に気を取られていた。

ミエに言われ、リトライダーとダズもそれに気づく。それは青いフードを被った人型の何か。壺を持ち、洞窟の奥へと進んで行く姿が見えた。

「なんだ？ 今のは？」

リトライダー達はその姿に気を取られ、いつの間にか追いかけるように広場へ降りていた。

それは一瞬の出来事。

「危ねえッ!!」

ガーラの叫びに頭上を見上げると、天井の光は闇に曇る。

リトライダー達は何が起こったのか理解できず、動くことができずにいると、頭上で硬い何かが衝突する。

それは爆発が起こったような強烈な音を鳴らす。

見上げると巨大な岩の塊をガーラがオノで弾いている。

「ガーラ師匠!？」

ガーラはオノで岩を弾くと地面に着地し、広場にある人型の巨大な銅像にオノを向ける。

「ガーラ師匠……何が……」

「ゴーレムだ」

ガーラの言葉に反応したかのように銅像は動き出すと立ち上がる。

「で、デケえ」

その身長は約3メートル半。

肩から伸びた腕はダラリと伸ばしただけで、地面に付いている。

「……………」

ゴーレムは冒険者達を見下ろすと長い腕を高くさらに高く、上へと伸ばす。

「来るぞ!!」

ガーラが叫ぶと高く伸びたゴーレムの腕が振り下ろされる。

しかし、それは攻撃というよりも、ただ振り下ろしているだけに近い。

「《身体強化》!!」

ガーラは素早く魔法陣を展開し、魔法計算を行うと自身に身体強化の魔法を付与する。

そしてオノを振ってゴーレムの腕を弾き返す。

「お前ら、早く逃げろ!!」

「えっ!？」

リトライダー達は驚く。

「なんで!! ガーラ師匠なら、あんなゴーレム……」

「俺じゃ勝てない」

ガーラの予想外な言葉に、リトライダー達は大きく口を開く。

「な、何言ってるんですか!! ガーラ師匠!!」

「俺の《身体強化》込みのフルスイングで、ヒビすら入ってないんだ。いや、それ以上に……」

ガーラのオノの刃にはヒビが入っている。

「ツチ、ディアモンクラブの殻を使った特注品だぞ。コイツはア……」

ゴーレムは再び、腕を伸ばすと攻撃の体制になる。

「早く撤退しろ!! ここは俺が食い止める!! 急いで増援を呼んでこい!!」

ゴーレムの振り下ろされる腕をガーラは同じように弾き返す。

「でも、ガーラ師匠を置いてくなんて出来ないっすよ!!」

「そうよ!!」

三人は武器を手に取り、戦闘の構えを取る。

「俺たちも戦います。四人なら、なんとかなるはずです!!」

「おい!! バカなことをするんじゃない……」

ミエは魔法陣を展開すると、リトライダーとダズに《身体強化》の魔法を付与する。そして二人は魔法の付与が終わると、ゴーレムに向かって無鉄砲に飛び出した。

ゴーレムはリトライダー達に気付くと、両手を横に広げて、体を回転させる。

「な、なんだ!!」

その巨体から繰り出される攻撃はまさに岩石の竜巻。

竜巻は周りの当たるもの全てを粉碎しながら、リトライダー達に近づく。

「そんな回転攻撃。簡単に避けられる!!」

移動速度はさほど速いわけではない。身体強化の付与されているリトライダー達は余裕とばかりに避けようとする。

だが、ゴーレムの攻撃はそんな単純なものではなかった。

リトライダー達がゴーレムの攻撃を避けようと跳躍するため、地面を蹴ろうとした。その時。

ゴーレムは突如、回転を止め、両腕を地面に叩きつける。

「なんつすか?」

「なんだ!?!」

ゴーレムの一撃で地面が揺れる。それにより、リトライダー達は飛び上がることができず、その場で軽く尻をつく。

そして地面とゴーレムの腕が当たった衝撃で、砂埃が舞い上がり、一気に視界が悪くなる。

リトライダーとダズは何が起きたのか分からない。

何も見えない中、何かが風を切る音だけが聞こえる。その音は最初は近くにあったが、遠くへと行き、そして再び、こちらに向かってくる。

砂埃の中、突然体を吹き飛ばされる。

しかし、それは攻撃というよりも、たくましく、強く、そして優しい……。

「ガーラ師匠!!」

ガーラがリトライダーとダズに突き飛ばし、砂埃から押し出す。

「はっ!？」

そして次の瞬間、鎧の碎ける音と一緒に、ガーラの体が砂埃の中から吹き飛ばされる。そしてガーラは壁に叩きつけられた。

「ガッバア！」

ガーラは口から血を吐き、その場に蹲る。

「このやあ……ろっ……。ハア……。ハア……。鎧を……。碎きやがった」

ガーラの鎧は粉々に碎け散り、まるで粘土であるかのように、ボロボロに剥がれていく。

「……………師匠」

ガーラはリトライダー達が無事なのを確認すると、オノを支えにしてふらつきながらも立ち上がろうとする。

「お前ら、……………俺の弟子になりたいんだよな」

ガーラはまともに立つこともできない。

それでも、リトライダー達に弱っているところは見せまいと、ゴーレムに向かってゆっくりと歩み寄る。

「なら、こいつは試験だ……。お前らは無事に帰還し、援軍を呼んでこい。それが出来たなら……………」

ガーラは彼らの顔を振り返ることはせず、ゴーレムにオノを向ける。

「弟子にしてやるよ……」

その後、リトライダー達は素直にガーラの言うことを聞き、援軍を呼ぶ為に洞窟を引

き返すことにした。

洞窟の出口に近づいてきたところで、ゴブリンの群れが現れ、どうにか洞窟を抜けたリトライダー達は現在に至る。

??????????

??????????

話し終えたリトライダーは、その場に立ち上がる。

「だから、頼みたい!! ガーラ師匠を助けてくれ!!」

リトライダー達はさすがの思いでパトに助けを求める。

話を聞いたエリスは呆れた表情でリトライダー達に答える。

「なら、ギルドに行つて、冒険者組合に援軍を要請すればいいじゃない。こんな村なんか

に頼むんじゃない」

リトライダーは少し飛び上がり、理解する。

「あつ!! そう言われれば、そうだ!!」

その隣に座っていたダズとミエも今理解したようではんつと手を叩く。

「そうっすね。そういえば、そうっす」

「ま、まあ、私は分かっていたけど……」

「何言ってるんすか? 声震えてるっすよ。ミエさん」

「はあ、うるさいよ。デブ」

「ひどいっすわ」

パトとエリスは顔を合わせ、悠長に喧嘩を始める冒険者を呆れた様子で見守る。
言い合いをしているミエとダズを他所に、一人考え事をしていたリトライダーが立ち上がり、嬉々とした声を上げる。

「そうだな!! よし!! これからギルドに向かおう!! ガーラ師匠を助けるぞ!!」

リトライダーが右手を突き上げて、奮起に満ちた声を叫ぶ。

それを様子を見ていたミエとダズも立ち上がり、右手を突き上げる。

「うおおおお!! やっすよ!!」

「私もやるよ!!」

やる気に満ちた三人の姿を見ていたパトは、申し訳なさそうにあることを告げる。

「それが……この村にはギルドがないんですよ」

それを聞いた三人の表情は一瞬曇ったが、すぐにリトライダーがならばとパトに聞く。

「なら近くにギルドのある、村か、街を教えてください!! 俺たちはすぐに師匠を!!」

リトライダーの提案にミエとダズも一瞬表情が晴れかけていたが、パトの言葉で全てが無に返された。

「この近くにはありません。一番近いのはルガル村にありますが……この村からルガル村まで、丸一日かかります」

その言葉に冒険者達は下を向く。

「そ、そんな……そんなに時間がかかったら、師匠は……」

しばらくの沈黙。

そして沈黙の間、リトライダーがあることに気づく。

「そういうえば、さっきのゴブリンの群れを一掃したのは、そこのお嬢ちゃんなんだよな？」

エリスは嫌な予感がしたようで、目を逸らす。

面倒臭がりなエリスのことだ。こんなことには巻き込まれたくないのだろう。

しかし、もう遅かった。

「え!! ああの強力な魔法を放ったのが、こんな可愛らしい女の子だったっすか」

「嘘でしょ!! 凄い!!」

エリスの体がゆっくりと三人から離れて行く。

「あそこまでの魔法が使えるのは、冒険者でもそうそういないよ。ギルドに助けを呼びに行くよりも、この子に手伝ってもらった方がいいんじゃないの！」

ミエの言葉により、完全にエリスの逃げ場がなくなつた。

「そうだ!! そうだよな!!」

「お願い、エリスちゃん!! 私たちに手を貸して!!」

続く

第9話 【洞窟へ】

エリスは完全に逃げ場を失った。

ここまで期待され、頼まれると、断りづらい。
だが、エリス。この程度では諦めない。

「私も手伝ってあげたいのは山々なんだけど、あれだけ大きな魔法を放った後だと、魔力が回復するまで数日掛かるのよ。だから、ギルドへ向かうのを勧めするよ」

そう言い、逃げようとするエリスをパトは横目で睨む。

実際に大災害（デザストル・トネール）は超強力な上級魔法。通常はフラスコの中で実験などに使う程度の魔法だと聞く。

広範囲攻撃感覚で使うのはエリスくらいだろう。

しかし、あれほどの規模の魔法を使えば、魔力を使い果たし、目眩や眠気などに襲われても、おかしくない。だが、エリスはピンピンしている。つまり、エリスは魔力は全然有り余っているということだ。

「そ、そうか、それは残念だ……」

リトライダー達は立ち上がると頭を下げ、荷物を持つ。

「どちらにせよ。迷ってる暇はない。急ぐぞ」

リトライダーに連れられ、ダズとミエも一礼し、荷物を持って出て行くとする。

荷物を持ち、旅立とうとする三人をパトは引き留めようとする。

洞窟の魔力にゴレム。彼らの居た洞窟には謎の部分が多い。それらはもしかしたら、モンスター大量発生と関係があるかもしれない。

しかし、そんなことはできない。

パトには彼らを助ける力がない。権利もない。彼らを見送ることしかできないのだ。

その時、扉が開く。

「待ちたまえ!! 冒険者達!!」

玄関から声が聞こえ、振り向くとそこにいたのはパトの父親である、ガオ・エイダーだった。

「父ちゃん!? 帰ってきてたの!？」

パトは立ち上がり、ガオの側へと駆け寄る。

「ああ、さつきな!!」

ガオがコートを脱ぐと、パトとはそれを受け取り、玄関先にあるコートを掛けに掛ける。

パトは心配そうにガオを見る。

「村長会議は……」

もしかしたら、ゴブリン襲撃の騒ぎを嗅ぎつけ、会議を中断して帰ってきたのかもしれない。

しかし、それは違った。

「ああ、それなんだが……。モンスター大量発生が発生源を突き止めることができた」

ガオの言葉にパト、そしてエリスも驚く。

「それは……………一体……」

「プティ洞窟だ」

それを聞いた、冒険者達三人、そしてパトとエリスは顔を合わせる。

「それって、リトライダーさん達の言っていた……」

「ああ、そうだ」

ガオの言葉を聞いたエリスは発生源を突き止めた方法を知りたそうに、顔を睨む。
エリスですら、知ることのできなかつたモンスター大量発生の情報。その情報源が気
にようだ。

ガオは腕を組む。

「俺も詳しくは分かん。だが、あいつらが言うんだ……。否定は出来ない」

「あいつらって……」

「シルバの姉、コノエ・マーキュリー。そして六英雄の一人、カレン・ミアだ」

「な、なんでそんな人達が……」

パト達は驚く。

六英雄、カレン・ミアとは、70年ほど昔、地上に大災害をもたらしたドラゴンを倒し、人類を救ったとされる大英雄。

しかし、ドラゴンとの戦闘後、姿を消し、伝説のみが受け継がれてきた。

そしてコノエ・マーキュリー。シルバ・マーキュリーの実の姉であり、国一番の科学文明（アルシミー）の研究者。

だが、コノエはシルバと仲違いし、その後行方不明だった。

そんな二人がなぜ、同時に現れ、モンスター大量発生を知っていたのか、教えてくれたのか。理由は分からない。

だが、一つだけ言えることがある。その二人が言ったと言うことは、信憑性が高い。

「あいつらの目的がなんなのかは分からない。だが、俺としては発生源の可能性がある

場所が分かった以上、その原因を突き止めたい。だから、ちょうど良い機会だ」

ガオはパトを示す。

「パト、お前が行ってこい」

ガオの言葉にパトは戸惑う。

「な、お、俺が!？」

「ああ、お前が村長になるための良い経験になる。人助けは俺たちの使命みたいなものだ。モンスター大量発生とその冒険者達の件。二つとも片付けて来い！」

??????????

??????????

「よし、それじゃあ、行ってくる」

ガオに言われ、プティ洞窟に行くことになったパト達は洞窟に向かって進んでいた。

三人の冒険者達に案内され、その後ろをパトとヤマブキ、エリスの三人が付いて行く。

パトが洞窟に行くということになったら、エリスとヤマブキが付いてくると言ってきた。

実際二人がいるのは心強いのだが、あまり無茶をして欲しくないのが本心である。とはいえ、パトだけでは自衛手段も頼りなく、天才魔法使いのエリスと、科学文明の武器を持つヤマブキがいた方が、モンスターに襲われたとしても問題はない気がする。

エリスが魔力探知で警戒してくれているとはいえ、村の外に出る機会の少ないパトはマティルさんから預かった槍を大事に抱え、用心深く進んでいく。

草原を超え、森を抜け、しばらく進むと何の変哲もない洞窟に辿り着いた。

「ここだ。ここがプティ洞窟だ」

冒険者達は装備を整え、早速洞窟に入ろうと準備をする。
しかし、

「待って」

エリスが冒険者達を止める。

そして真剣な眼差しで洞窟の奥を警戒する。

「何が来る」

エリスの言葉でこの場にいた全員が、武器を取り警戒態勢を取るが、中からは何も訪れない。

冒険者は首を傾げ、不思議そうに洞窟を覗くが、暗さもあり何も発見できなかったようだ。

「何が来るのかしら？ エリスちゃん」

ミエは杖を握りながら、エリスに尋ねる。エリスは無言のまま、返事をしない。

一時の沈黙。

この場でエリスしか分からない。何かが起きている。しかし、それが分からない以上、下手な行動も推測もできない。

それでもこの場にいる誰もがエリスの言葉を、冗談などとは考えていなかった。この中で一番優秀な魔法使いは間違いなくエリスだ。魔力探知で探れる範囲もどこまでか想像もできない。

だが、そんなエリスだから、そしてそんなエリスの言葉だからこそ、疑うことは死に直結すると思える。

無言の時間に重い空気が漂う。鼓動が直に聞こえ、次の瞬間起こる出来事に恐怖を感じる。

「……………っ」

パトが唾を飲んだ。その時、

「来る……ッ!! みんな避けて!!」

エリスが叫ぶと同時に、地響きが洞窟の中から聞こえ、こちらに近づいてくる。

「なっ!!」

エリスは周りを見渡すと、近くにあった草むらに飛び込む。

パトも近くにいたヤマブキを引き連れ、急いで近くにあった草むらに飛び込む。

「……………おい!! お前らも早く!!」

草むらに隠れたパトは冒険者達に叫ぶ。

「りよ、了解っす!!」

「ああ……」

「そうね……」

冒険者達は急いでパト達の隠れる草むらに駆ける。

リトライダー、ダズと草むらに入り、残るミエが間に合えば安心というところで、

「きゃっ!」

焦ったミエが杖に足を引っかけ転んでしまう。

ミエは地面にうつ伏せに倒れ込む。

「ミエ!!」

「ミエさん!!」

リトライダーとダズがミエを助けに行こうとするが、エリスに止められる。

「もう来る!!」

足音は入り口付近まで近づいてきていた。

それはもう誰が聞いても明らかだ。

現段階で飛び込んでもリスクが上がるだけ、それら彼らだつて分かっている。しかし、それでも仲間を見捨てられないのが冒険者だ。

リトライダーとダズはミエを助けに行こうと、飛び出そうとする。しかし、それよりも早く。

「パト!?!」

パトが草むらを飛び出していた。

パトは倒れているミエを抱えると、洞窟から大量のゴブリン達が猛ダツシユで駆けてくる。

パトはミエを抱え、間一髪のところまで草むらへ飛び込む。
もう少しでゴブリン達の下敷きになるところだった。

パトは安心のあまり、力が抜けて尻をつく。

「あ、危なかった」

「それはこっちのセリフよ。何やってるのよ」

「そりゃー、危ないところだったから」

「それはそうだけど……。お人好しいけど、自分の心配もしなさいよね」

エリスはパトの行動に叱咤する。

リトライダーとダズはミエに抱きつき、「無事で良かった良かった」と泣きついていく。

ミエは苦笑しながら二人を宥めると、パトに感謝を伝える。

「ありがとう。助かったよ」

「ああ、無事で良かった」

「でもあんなこともう二度としないですよ。それでも私だつて冒険者の端くれよ。村人に助けられたんじゃ、冒険者の恥よ」

ゴブリン達は洞窟を出ると、森の奥へと走っていったため、もうその姿は見えない。ゴブリンの姿が見えなくなったのを確認し、パト達は草むらから出る。

「それじゃあ、先を急ぎましょう」

パト達は洞窟に入って行く。

「光魔法（エクレレ）」

ミエが光魔法で光源を作り、辺りを照らす。

薄暗かった洞窟は、小さな光源に照らされ、彼らをより奥へと導く。

「そうね。確かにこの洞窟、異常ね」

エリスは辺りを見渡すと一人でに納得する。

パトは首を傾げ、眉をひそめる。

「どう言うことだ？」

「普通、魔素はある一定量が貯まると、突然変異を起こしてモンスター化するの。でも、これだけの魔素が漂っているのにモンスター化しない。いや、そうじゃない、特定のタ
イミングでモンスター化する。これは明らかに異常な事態よ」

パトは息を呑む。

確かにエリスの言っている通りだ。魔素がある程度あるなら、それはモンスター化しているはずだ。だが、そうはならず、あるタイミングで爆発するようにモンスター化している。

異常だ。自然にはこうはならないだろう。人の手が加わらない限り……。

パトは静かに心の奥に潜む、燃えるような怒りを抑え咄く。

「やはり魔術師なのか……」

「そう考えるのが妥当ね」

さらに洞窟の奥へと進む。

奥に進むにつれて、洞窟入り組み、分かれ道が増えて行く。

最初は一度この洞窟に来たことのあるリトライダー達を頼ろうとしたパトだが、

「確か……ここは左だな」

「違うよ。この時は私がジャンケンで勝って、真ん中選んだでしょ」

「二人とも記憶力大丈夫ですか？ この時は右ですよ」

「ああ？ ダズ!! 今なんてった？」

「そうよそうよ！ リトライダーはともかく、私の記憶力は完璧よ！」

こんな調子で分かれ道になるたびに喧嘩を始める。彼らに痺れを切らしたエリスは、魔素の流れを頼りに、彼らの言葉を無視して進んでいくことにする。

「……………下ね」

パトは彼らよりはエリスの方が信用できるし、ヤマブキもエリスの選ぶ道に異論はないようだ。

順調に深層に進み、太陽の光が少し恋しくなってきた頃。先行を歩いていたエリスが足を止める。

「また何か来る……」

エリスの魔力感知に再びモンスターが引つかかったようだ。
それにヤマブキも続ける。

「大量ノ生命反応ガ接近シテキマス」

リトライダー達はうろたえる。

「な、またっすか!？」

入り口出会ったゴブリンとは足音が違う。カサカサと這い回るような、小さな足音が無数に近づいて来る。

「先程ノモンスターヲ遙カニ超エル。接近反応デス」

冷静な口調だが、ヤマブキもどこか焦っている風を感じる。

無数の足音は洞窟を這い回り、羽を鳴らす。

暗闇に同化した暗黒の身体は、紅瞳を強調し輝かせる。

紅瞳は洞窟という夜空に浮かぶ、星々を思わせる。

「ま、まさか!! あノモンスターは!？」

黒い胴体から生えた六つの細い足。どこかで見たことがあるような虫の体。

ゴミだろうが、同胞だろうが食らう。その虫は多くの物から嫌われ、恐れられている。

「キャファールだあ!!」

それはゴキブリが巨大化したモンスターだった。

続く

第10話

【骸骨】

悪臭を放つ虫型のモンスターの集団は群れを成して、こちらへ向かってくる。

キャファールを見たリトラライダー達は口を開け、驚愕の顔を浮かべる。

「最悪っす!! キャファールっすよ!!」

「あんなのに襲われた日には何回お風呂に入っても匂いが取れなくなるじゃない!!」

「うあああっ!! どうしよう!!」

そして頭を抑え、焦り暴れ回る。

そんな中、エリスは小さな声で「めんどくさいな」と呟き。杖を構えると、

「ここは私に任せなさい」

と前に出る。珍しく自分からやる気を出してくれるのはいいが、エリスがやろうとしていることに気づいたパトは、急いでエリスを止める。

「待て待て待て待て!! 何する気だ!!」

「そんなの決まってるじゃない。適当にドバツとやっちゃうのよ」

「まさか! あのゴブリンに使った魔法を使う気だろ!」

「まあ、そんな感じね」

エリスの回答に、パトは首を激しく左右に振る。

「あんな魔法こんな小さな洞窟で使ったら、息埋めるなっちゃわ!」

「大丈夫よ。あなた達には防御魔法付与してあげるから」

「ダメだ！　俺たちがこの洞窟に来た目的を忘れたわけじゃないだろ!!」

パトはそう言い、エリスを退げらせる。

「ここはあの人に任せよう」

パトはそう言い、隣に立つ青髪の女性に目を配る。

そう。ここにはある文明技術を持った人間がいる。パトは彼女に期待している。

ヤマブキはパトの期待に答えるように頷く。

「ハイ。ココハ……………私……………」

しかし、ヤマブキはキャファールを目をやると、動きが鈍くなり、いつしか動かなくなる。

そして独り言をぶつぶつと唱え始める。

「……………虫、虫、虫……………虫」

「や、ヤマブキさん？」

ヤマブキは目を閉じる。

「異常事態発生、コレヨリシステムヲ、ダウンシマス」

「え……………」

その場にいる者たちの動きが止まる。

ヤマブキはその場に立ち尽くしているが、目を動き眠るように動かない。
パトは助けを求めるようにエリスに目を配る。

「なあ、エリス。今から攻撃って間に合う？」

「もう近すぎね」

「……………」

沈黙。頭の中が真っ白になる。そして一つの答えを導く。

「……………逃げるぞ」

パトはヤマブキを抱え、来た道を指す。

パトの判断にエリスは頷き、リトライダー達は息を呑む。

「よし、……………急げ!!」

パト達は全力疾走でキャファールから逃げる。

「や、ヤマブキさん!! 大丈夫ですか!!」

パトはヤマブキを抱え、頬軽く叩いてみる。しかし、ヤマブキはぴくとも動かない。

「ヤマブキさん!! 何があっただんだ!!」

「その子。虫がどうのこうのって言ってたつすよ!!」

走りながらエリスは冷静に考える。そして

「虫が嫌いなんじゃない?」

走っていると分かれ道に出会う。

「曲がるぞ!!」

パト達が曲がり隠れると、キャファールの大群は真っ直ぐ洞窟の入り口へと向かって行き、どうにかやり過ごす事ができた。

どうにか逃げ切った事に安堵するリトライダー達。

「た、助かった」

「ま、まあ、私にかかればあんなの余裕だけどね」

「ミエさん。キャファールの群れを追いかけるっすか?」

「それは嫌よ」

パトはヤマブキを床に寝かせる。

「パト、あなた、科学文明（アルシミー）について調べてるんだから、なんだか分からないの？」

「いや、機械が虫嫌いななんて初めて聞いたよ……。いや、それ以上にあの時の……」

パトがヤマブキの顔を凝視していると、ヤマブキの目が突然開く。

「システム復旧。破損データナシ。通常運転デ起動シマス」

ヤマブキは何事もなかったかのように目覚める。

「何力問題デモアリマシタカ？」

ヤマブキの寝ぼけたような発言に、パトは困惑する。

「い、いや、何も……」

ヤマブキが目覚めた事に気付いたリトライダーは、先を急ぐように促す。

「よし、何があつたかは知らないが、無事みたいだな。先を急ぎたい。行くぞ」

そう言い、リトライダーが一步踏み出した時。

突然地面が揺れだす。

「な、なんだ!？」

「まさか、リトライダーさん!!」

「いや、俺がそんな強く足踏みできないか!!」

そう、リトライダーが地面を踏んだだけで、こんな揺れが起こるはずがない。こことは別で何かが起きている。

揺れにより洞窟が崩れ始め、地面や壁にヒビが入る。

パトはこのままでは危険だと考え、まずは密集するように指示する。

「みんな、集まってくれ!!」

しかし時すでに遅し。

洞窟の床は崩れ、パト達は下層へと落ちてしまった。

????????????

????????????

頭が重い。体が怠い。落ちた衝撃で意識が飛んだ。

パトは重い体をゆっくりと動かし、立ち上がる。

「みんなは……」

周りを見渡すが、暗くてよく見えない。

「おーい!! みんなー!!」

とりあえず叫んでみるが、返事がない。

近くに誰はいない。

「まずは合流しないとな」

パトは壁に手を当て、手当たり次第に洞窟を進んでみる事にした。

暗闇の中、同じ所をグルグル回っている可能性もある。動かないのも一つの手ではあるが、このままジツとしているのは耐え難い。

誰かが助けを求めているかもしれないのに、落ち着いていられるはずもなく、パトは焦燥感を抑えきれず、ソワソワしながら進んでいく。

しばらく進み、暗闇の奥に一筋の光が現れる。

出口か、それとも誰かが放っている灯りか。どちらにしろ。パトはこの光を目指すしかない。

「おーい!! 誰かいるのか!!」

パトは光に向かい駆け出し、叫ぶ。
すると、光は揺れ動く。

「良かった。無事だったか」

「ハイ」

そこにいたのはヤマブキ。ヤマブキは胸にある宝石を光らせ、光源にしていた。

「他のみんなは?」

「分カリマセン」

「どこにいるか。分かるかな？」

「近クニ生体反応ガアリマス。案内シマスカ？」

「ああ、頼む」

パトはヤマブキに連れられ、洞窟を進む。

しばらく進んだところで、ヤマブキは足を止める。

「此処デス」

そう言い、ヤマブキはある方向に光を翳す。

そこには地面に倒れ込んでいるエリスがいた。

「エリス!!」

パトはエリスに駆け寄る。

意識を失っていたエリスはゆっくりと目を開ける。

「ん……こは……パト。それにヤマブキさん……」

エリスは周りを見渡すと、すぐに状況を理解したようで、その場に座り込む。

「つまり私たちは、さらに洞窟の奥に落とされたってことね」

エリスは冷静に状況を分析する。

「ああ、後はリトライダーさん達と合流出来ればいいんだけど……」

パトの言葉にエリスは賛同する。

「でも、合流するのもだけど。なぜ、突然洞窟の床が崩れたのか。それも調べないとね。あれだけの揺れよ。相当強力な力が働いてる」

エリスは立ち上がると、早速洞窟の奥へと進む。

しばらく進み、パトはあることをふと思う。

「この洞窟、自然にできたにしたら形が整っているよな」

そう、かなり複雑に入り組み、迷宮のようになっていいる洞窟だが、急激に段差があるわけでもなく、道幅や高さは常に一定のものになっている。

「ハイ。私ノ分析デモ、人工物デアル可能性ガ、高ク推測サレテイマス」

人工物であるとなると、魔術師があるという可能性の面がより強くなる。大昔に探索し尽くされ、何もない洞窟には誰も人は寄り付かないだろう。そうとなれば、魔術師にとってこの洞窟は絶好の隠れ家となる。

「早くリトライダーさん達と合流して、ガーラさんを救出。魔術師についても調べない

と……」

しばらく進むと、少し開けた空間にでる。

暗く、うまくは見えないが何か壺のようなものが並んでいるようにも見える。

「なんだこれ？」

パトが気になり、壺に手を伸ばすと、横から何かに伸びてきて、パトの腕を掴んだ。

「騒がしいと思えば……何者だ貴様ら……」

男の声。それも今にも攻撃を仕掛けてきそうな、険しい声色。

パトは手を振り払おうと左右に振ってみるが、ガツチリと握られていて振り払う事ができない。

「何をしに来た……」

男の掴む力が強くなる。

触った感覚から細い腕だが、力は強い。

「それは俺たちの台詞だ。ここで何をしている」

パトの言葉に男の声は一瞬退く。

「研究所だ……」

男が指を鳴らすと視界が突然明るくなり、手で目を覆う。

「な……」

目が慣れると、男の正体に驚愕する。

それは青いフードを着た骸骨。言うなればスケルトンだったのだ。

「が、骸骨!？」

パト達は驚きの声を上げるが、そんな事は気にせず。骸骨は真剣な声色で脅迫する。

「さあ、今度はこっちの番だ。何をしにここに来た？」

緊張感が漂う。

喋るモンスターは初めて見た。魔素から生まれたモンスターが感情を持ち、敵意を向けている。

これは大発見であり、そして危険を示していた。

下手をすれば、殺される。エリスやヤマブキも骸骨に向け、いつでも反撃できるようにしているが、近くにいるパトには骸骨の攻撃を防ぐ手段も、攻撃方法もない。

だが、このような事で怖気付くパトではない。

大切な村のためなら、命すらも使う。その覚悟と勇気がある。

パトは勇気を振り絞り、強い口調で言い放つ。

「調査だ」

「調査？」

骸骨は疑問符を浮かべる。

「最近この地域でモンスターが大量発生している。その原因を調べに来た」

パトは骸骨を睨みつける。

その眼差しに骸骨は一步退く。

「まさか、俺がその犯人だと？」

「それ以外に誰がいる。モンスター!!」

骸骨は何を言われているのかわからず、しどろもどろする。

「モンスター? 俺が? 何を言ってるんだ!？」

「モンスターだろ。自分の顔をよく見ろ。骸骨!!」

骸骨の掴む力が弱くなり、パトは腕を払い除け、近くにあった壺を開ける。壺の中には水が一面に広がっており、光が反射して鏡のようになっている。

「ほら!!」

パトは骸骨に壺を押しつけ、水面を見させる。

「……………」

水面に浮かぶ、白骨の顔に骸骨の時間は止まる。

「ギヤアアアアアアアアッ!! 骸骨ウウ!! モンスターだ!! なんてこんなところにスケルトンが!!」

骸骨は驚き、叫び回る。

それを見たパトは思わず。

「それはお前だよ!!」

骸骨の反応に同じような声量の大声を出して、パトはツツコんでしまう。

「どうして俺がモンスターにいい?」

自分の姿を見て困惑する骸骨。

そんな骸骨の姿を見て、エリスが冷静に攻撃的な口調で言う。

「あなたがモンスター大量発生の原因ね。さあ、何が目的か、洗いざらい話してもらおうじゃない」

骸骨は混乱していて、そんな話が耳に入らない状態かのように思ったが、モンスター大量発生という単語を聞き、少し冷静さを取り戻したようだ。

「モンスター大量発生？ なんのことだ？」

「惚けないでちょうだい。あなたが全ての元凶だって証拠は全て出揃っているのよ。この魔術師!!」

??????????

??????????

ゴーレムと死闘の末、傷を負ったガウラは物陰に隠れ、ゴーレムから身を潜めていた。

「なんて強さだ。……あのゴーレムは……」

ガーラは物陰で傷の手当てをしながら、危機感を感じる。

「ゴーレムでさえあの強さだ。あれを使役する術者はそれよりさらに上か……。俺じゃ敵しいか」

弱音を吐くことの少ないガーラであるが、この時は珍しく弱音を吐いた。

いや、それは正しくはない。最近弱音を吐かなくなったガーラが久しぶりに弱音を吐いた。

「しかし、あいつら……無事に援軍を呼んでくれたんだろうな。せめて俺と同等、それ以上の実力を持つ冒険者じゃないと、齒が立たないぞ」

鎧も砕け、武器も失ったガーラにはゴーレムに対抗する手段はない。
今はただ、リトライダーたちを信じて応援を待つしかない。

「……………本当にあいつら、大丈夫だろうか」

続く

第11話 【覚悟】

「ハハハは……………」

目覚めたリトライダー、ダズ、ミエの三人は辺りを見渡した。
周りには一緒にいたはずのパト達はない。
落ちた時にハグれてしまったようだった。

「ねえ、どうするの?」

ミエが不安のこもった声でリトライダーに聞く。

「そりゃー、探すしかないだろ。俺たちが巻き込んだんだ。放っておくわけにはいかな
い」

そう言い、リトライダー達は洞窟の奥へと進む。

何層にも重なっていた洞窟は、いくつかの層が崩れ、吹き抜けのようになっていた。それに大量に散らばる瓦礫の山。

「まさか、埋もれてるとかはないっすよね」

ダズがおずおずとそんなことを口にする。それを聞いたリトライダーとダズはビクリと体を震わせる。

「ま、まさか、そんなことはないだろ……」

その時、瓦礫の山の一角が崩れ、物音が響く。

「そ、そうよ、そんなことはないはずよ……」

再び、瓦礫が崩れ、今度は瓦礫の山がガタガタと震えだす。

「お、おい!! どうしよう!! どうしよう!!」

リトライダーが大量の汗を垂らしで焦りだす。だが、そんな様子とは別に瓦礫の山は大きく膨らみ。

「待ってくれっす。なんか、大きいっすよ」

瓦礫の山から巨大なゴーレムが這い出てきた。

「「ギャオアアア!!」」

??????????

??????????

洞窟の側、鎧を失ったガーラは身を休めていた。

「はあはあ、あいつらは……脱出できたのか……」

ガーラは折れた斧を見つめる。

「お前もよく頑張ってくれたな……」

呟くガーラに答えるように、斧は光を反射する。

それは暗闇の洞窟を照らす一筋の光。

ゴーレムとの戦闘の結果、洞窟の一部が崩れ、天井が抜き出しになっていた。

戦闘で傷を負ったガーラであるが、外までの高さは数メートル。怪我を負った状態とはいえ、登ることはできない距離ではない。

しかし、

「……………」

ガーラはゆつくりと外から視線を逸らす。

そしていつか戻ってくるであろう、弟子たちのことを思い出した。

??????????

??????????

洞窟のある場所に到着したパトたちは、紺色のフードを羽織ったスケルトンと対峙していた。

「さあ、モンスター。白状しなさい!!」

エリスは堂々と前に出て、骸骨を圧倒する。エリスの勢いに押された骸骨は気圧され

るが、ここから退散する気はないようだ。

骸骨は食い気味に言い返す。

「誰がモンスターだ！ 俺は人間だ！！ 見ればわかるだろ！」

「どこからどうみてもモンスターよ！」

エリスに言われ、骸骨は自身の白い腕を見つめ、一瞬固まる。

「あ、そうだった。……って、今はそうだが、俺は人間なんだよ！」

言っていることはアベコベだが、骸骨は嘘をついている様子はない。

だが、そんな様子にお構いなしに、エリスは杖を骸骨に向ける。

「さあ、モンスター！！ 覚悟しなさい！！」

エリスの杖からいくつかの掌サイズの炎が生成され、骸骨に向かって飛んでいく。骸骨は魔法計算もなく、寸時に魔法攻撃を仕掛けてきたことに驚くが、素早い身のこらしで炎の弾を回避していく。

「ま、待ってくれ!! だから俺は人間だつて!!」

骸骨は炎を避けながらも、自身が人間であると主張し続ける。その言葉には必死さがあり、パトはそんな骸骨の姿に疑問を感じる。

そしてもう一人、この場で全く動かず、成り行きを見守る人物に気がついた。

「ヤマブキさん? あの骸骨についてどう思う?」

パトの中では既に、あのモンスターは敵ではないのではないか。と言う考えが芽生え始めていた。

そしてそれはヤマブキの回答により、さらに育つこととなる。

「ハイ。敵対反応ハアリムセン」

敵対反応はない。それはつまり、パト達に対して好戦的な感情を抱いていないと言うことだろう。

「つまり、モンスターじゃない」

「ソノ可能性ハ十分高く考エラレマス」

モンスターであるならば、生物の発する魔素を食らうため、人間や動物を真つ先に襲うはず。それなのに敵対行動を起こさない骸骨。それに知能があると言う点もおかしい。

パトが悩んでいると、ふと昔、ライトから聞いた話を思い出した。

それはライトがまだ現役の魔石発掘家だった頃のこと。

魔素の濃い洞窟である人物に出会ったという。それは魔素により身体を侵され、モン

スターのような姿になってしまった人間。

自我が残っているものの、体はモンスターと化してしまい、洞窟から出ることのできなくなっただけの話だった。

その後、その人物はどうなったのか。その続きは知らない。だが、もしもこの骸骨もその話に登場する人物と同じように、魔素に侵され、自我を残したまま、モンスターの姿になっているのであるとしたら。

パトは勇気を振り絞り、エリスと骸骨の中に割って入った。

「待って!! エリス!!」

「パト!?!」

パトが突然飛び出してきたことに、エリスは驚きの動きを止める。

パトの行動により攻撃が中断されたことに驚きながら、その場に立ち止まった。

「なんで止めるの？」

エリスの質問にパトは迷うことなく、瞬時に回答する。

「もしもこの人の言うことが本当なら、俺たちは戦う必要はないからだ」

そう、相手が人間であるなら話し合いが可能だ。

争う必要など、一つもない。

それにこの洞窟によるモンスター大量発生の原因。それについて、理由を知っているかもしれない。

「あなたは本当に人間なんですか？」

パトの言葉を聞いた骸骨は戸惑い、パトの事を見つめる。

「君は俺が人間だと信じてくれるのか？」

「そうだと言うのなら、僕は信じます」

「君……………」

骸骨は自身の言葉を信じてもらえたことが嬉しいのか、パトを見つめる。そしてパトの顔を見て、何かを思い出したかようで、懐かしそうに呟いた。

だが、その声は小さく、独り言だったため誰にも聞こえてはいなかった。

骸骨は壁に背中を付け、一休みする。

エリスは未だに骸骨を信用する気はないようで、睨み続けている。

「それであなたはなぜここに？」

まずは事情を聞くため、パトは骸骨に尋ねる。

するとオルガ・ティダードと名乗った骸骨は、深刻な顔付きで、刻々と語り出した。

70年も昔。彼は各地を渡り歩く冒険者をやっていた。

奇妙な体験、愉快な仲間、白熱の討伐戦。その日々は色鮮やかなものであった。しかし、ある日突然、仲間は姿を消した。

——オルガ、一人を置き去りにして——

それからオルガは仲間を探すため、一人大陸中を探し回った。

なぜ、突然いなくなったのか。なぜ、俺だけが置いて行かれたのか。なぜ、俺はここにいるのか……。

しかし、何ヶ月。何年と何十年と探し続けても、仲間は一向に見つからなかった。

それでも仲間を忘れられなかった彼は、ある方法で仲間を探すことにした。

それは……………。

「魔術ね……」

オルガの話に割って入り、腕を組んだエリスが答えた。エリスはそのまま怒ったような口調で続ける。

「魔術は魔法と違い、特定の条件を満たすことによって使用ができるようになる。そしてその効力は絶大」

つまりは魔術を使い、逸れた仲間を見つけ出す。魔法でもできない芸当のできる魔術ならでのことだ。

でも、魔術には欠点がある。

「……魔術を使用した時。大量の魔素が流出する。あなたはそれを分かっていたの？」

そう、魔術は魔法よりも高度な力を発揮する分、大量の魔素を放出する。

魔素は集中すれば集中するほど、強力なモンスターや大量のモンスターを発生させる。だとすると村を襲ったゴブリンやモンスター大量発生の原因はほぼ決まったと言っても過言じゃない。

「分かっている」

オルガは口を開く。

「なら、あなたが!!」

その言葉にエリスは強く反応するが、すぐにオルガは返した。

「だが、対処はしておいた」

「対処？」

パトとエリスは首を傾げる。

??????????

??????????

「ギャアアアオアア!!」

すぐ後ろから地面を強く踏みつける音が響く。

「ヤバイっす！ ヤバイっすよ!!」

「どうするのよ！ どうすのお!!」

「そりや……………逃げ続けるしかねえだろ!!」

リトライダー達は突如瓦礫の山から現れたゴーレムから逃げ回っていた。

「チクシヨオオ!! どうしたらいいんだよ!!」

リトライダーは頭を抱える。

現在リトライダー達を追っているゴーレム。この個体には前回も出会っている。そしてガーラがリトライダー達を逃すために足止めをしていたはずなのだ。

「ガーラ師匠は!? ガーラ師匠はどこなの!!」

彼らはこの場にいない。最も頼りになる人物に助けを求める。しかし、そんな人物は現れるはずもない。

リトライダー達は逃げ回り、洞窟の最深部へと進んでいく。

「ハハ、ハハハハハ」

逃げ回っていたリトライダー達はある部屋にたどり着く。

そこは洞窟の中には似合わない。綺麗に陳列された壺や大きな窯の置かれた部屋。

ダンジョンというよりも研究施設に近い部屋に彼らは疑問を感じるが、考える暇もなくゴーレムは追ってくる。

部屋の出入口は一つ。出口にはゴーレムが立ち塞がり、逃げ場はない。

怯える二人を尻目に、リトライダーはガーラの姿を思い出す。

どんな時でも、どんな強敵でも、背を向けず、恐れることなく立ち向かった憧れの姿。

そして冒険者試験の時、聞こえて来た彼の過去……。

彼が一人、ゴーレムに立ち向かい。洞窟に残ったのは、再びあの悲劇を起こさないためなのだろう。

リトライダーはガーラの姿をなぞるように覚悟を決める。

「や、やる。やってやるぞ……」

リトライダーは腰から下げたナイフを手に取り構える。

リトライダーの手にはわずかに震えが残っている。その様子を見て、ミエとダズも各々の武器を手にはリトライダーと並んだ。

「私たちだって……」

「やってやるっすよ」

リトライダーは二人と一緒に戦ってくれることが心強く。恐怖が少し和らぐ。

しかし、敵はガーラですら、圧倒していたゴーレム。駆け出し冒険者である彼らには真っ向から戦って勝利できると言い難い。

だが、彼らはただの駆け出し冒険者ではない。

「いくぞ……」

彼らには師匠がいる。

「いつも通り、ミエ！ 援護頼むぞ！」

「任せなさいな!!」

「ダズ!! 行くぞ！」

「おうっす！」

リトライダーは魔法計算を行い、自身に《軽量化魔法》を付与し、ゴーレムに向かっていく。

ゴーレムは長い腕を横なぎに払い、リトライダーに攻撃を仕掛けるが、リトライダーは風に乗るようにゴーレムの腕をスレスレのところで躲す。

『お前はいちいち迷いすぎなんだ。考えることは大事だが、迷うな』

ゴーレムはリトライダーを追って腕を振り回すが、リトライダーには当たらない。

ゴーレムがリトライダーに気を取られているうちに、ダズは魔法計算を行なつて、『身体強化』を自身に付与すると、ゴーレムの懷に潜り込み、ゴーレムを胴体を殴り付けた。

ゴーレムの体は宙に浮き、ヒビが入る。

『お前は攻撃をするとき、いつも腰が引けてるよな。何をビビってるのか知らんが、いちいちビビるな』

ゴーレムはダズの攻撃に驚き、ダズに警戒を切り替える。そして長い腕を振り下ろし攻撃をするが、

『お前は後衛なんだろ。パーティの土台だ。周りをよく見て判断しろ』

しかし、ゴーレムの腕は空気の壁に弾かれ、ダズには届かない。

「《空壁（ミュールエール）》」

ミエが風魔法を使い、風の壁を作って、ゴーレムの攻撃を防いだ。

「助かったっす!!」

「当然よ」

ミエの魔法により、ゴーレムが動揺している隙に、ダズとリトライダーは一旦ミエのいるところまで後退し、作戦を練ることにした。

「どうするっす?」

「相手はゴーレムだ。俺の攻撃じゃ歯が立たない。俺が囷になる。隙を見て攻撃できるか?」

「ええ、任せてちょうだい」

「ああ、いけるっす」

「よし! ならそれでいくぞ!」

リトライダー達はゴーレムに向かって、向き直す。

第12話 【過去と向かって】

——お前は臆病者だな——

頭の中に響く。過去の音色。

——ねえ、知ってる？　こういうモンスターはね——

懐かしい日々。充実していた……あの頃。

——おい!!　そっちに行ったぞ!!　——

——何言ってるんだよ!　——

破滅する。

——こいつ!! このモンスターの数は!?! ——

——振り返るな!! 走れ!! ——

壊される。

——なあ、知ってるか? あいつのこと? ——

——ああ、あの全滅したパーティの生き残りか。知ってるよ。仲間を囚にして逃げたんだぜ——

俺は……。

瓦礫の崩れる音。近くで洞窟の一角が崩れ落ちたのだろう。

そんな音を聞けば、普通なら恐れ、すぐにでも洞窟から脱出しようとするはずだ。

しかし、ガーラは悪い夢から目覚めたことに、深く安堵し、音の聞こえた方に無意識のうちに歩き出していった。

崩れた瓦礫の山を通り抜けると、開けた広場にたどり着いた。
そこからさまざまな音が聞こえる。

破壊。魔法。防御。音が混ざり合い、戦闘の激しさを物語る。だが、それ以上にガーラには聞こえた。

「そつちよー！」

「おい、まだだ。まだ早い!!」

「そうっすよ！ 早すぎるっす！」

それは仲間に掛け合う音。助け合い、頼り合う声。これはガールにとって恐ろしく。そして最も遠いもののように思っていたもの。

だが、今の彼にはこの声が、とても身近なものに感じられる。

「おい!! そこじゃねえよ!!」

「すまないっす!」

「ゴメンで済んだら、騎士なんていらないのよ!」

そこが自分のいるべき場所のように感じる。

穴だらけの陣形。隙だらけの戦闘。とても褒められるようなものではない。それを支えるのが、彼の役目。

「……………」

飛び出そうとしたガーラの脚は止まる。

それは過去の記憶。……強敵。敗北。恐怖。過去の記憶がガーラの動きを止めた。

この、一歩が重い。

重い。とても重い。

だが、今動かなければ……。

その時、ガーラの耳にある声が聞こえた。

「ガーラ師匠はまだっすか!!」

「本当よ!! まだなの!?!」

「安心しろ！　ガーラ師匠はいつだって、俺たちを助けてくれた。俺たちの師匠であり、仲間だ！」

それは仲間の声。ガーラにとってはもう出来ることのないと思っていた仲間の声であつた。

??????????

??????????

15年前。オーボエ王国、冒険者ギルド。

「なあ、あんた、新人か？」

冒険者試験に合格し、冒険者になりたてだったガーラに三人の冒険者グループが声をかけて来た。

駆け出し冒険者であつたガーラにとって、未知の領海に勇氣を持つて足を踏み入れている先輩冒険者達。彼らはとても輝かしく憧れであつた。だが、それと同時に緊張からなかなかパーティに入れないでいた。

そんな中、声をかけて来た一つの冒険者達。

「なあ、お前まだパーティを組んでないのか？　なら俺たちと一緒に来いよ」

軽い気持ちで声をかけただけだったのだろう。深い意味も感情もない。ただ挑むクエストに前衛の人数が欲しかっただけ。

だが、それでも

「ああ!!」

ガーラにとっては初めてのパーティ。それでとても嬉しかった。

クエストは王国から西に進んだ場所にあるオルジュ洞窟。そこに出現するという蛇型のモンスターの討伐依頼。

パーティーメンバーはリーダーであり、前衛であるマルクスという男性と、女狙撃手のケティス、魔法使いのトーマに、ガーラの加わった四人パーティー。

「助かったぜ、引き受けてくれてありがとな」

「いや、はい。それでその蛇型のモンスターってというのはどんなモンスターなんですか？」

「ああ、それについては俺たちに任せとけ。お前は知らなくていい」

ガーラはマルクスの受け答えに疑問を感じながらも、初めてのパーティーでのクエストであることから、あまり深く考えずに彼らについていくことにした。

森を抜けてたどり着いたオルジュ洞窟。蔦で覆われた洞窟には様々なところに植物が生えていた。

自然の多いところには魔素が溜まりやすく、協力的なモンスターも発生しやすい。

ガーラの中で想像していた、蛇型のモンスターは洞窟の様子を見て、一気に強敵へと変化する。どんなモンスターか分からない以上、ガーラにとっては未知数である。

だが、彼には今心強いパーティーメンバーがいる。それがガーラに安心感と信頼を与えていた。

だが、ガーラの安心と信頼は全て裏切られる。

洞窟の最深部、そこで現れた巨大な蛇型のモンスター。それと対峙しようとした時、マルクス達はガーラを置いて逃げ出した。

「お、おい!!」

ガーラはマルクス達を追いかけようとするが、マルクス達はすでに目には見えない。モンスターの標的にされているガーラでは背を向けて逃げ出すこともできず。ガーラはモンスターと対峙する。

マルクス達はどこに行つたのか。どうしてしまったのか。ガーラが心配していると、遠くから声が響いて来た。

「本当に置いて来てよかつたの？」

「何言つてんだよ！ 提案したのはお前だろ！」

「だってしょうがないじゃない。お宝を取ったら出てくるモンスター。逃げるにしても私たちじゃ、逃げきれない」

「だからって、新人を罠に使うか……。ま、これで金が入るなら、俺は文句はないがな」

それはマルクス達の声。

「だけど、あいつも間抜けだよな。罠にされてるとは知らずに真面目によ」

そして衝撃の事実。

マルクス達はガーラに囚に使い、モンスターの出現を察知して、逃げ出していたのだ。

しかし、そんな事実を知って、ガーラは怒ることもできず、ただ呆然とするしかなかった。

憧れであつた存在に裏切られた。

そしてガーラだけでは到底逃げ切ることのできない強敵。ガーラは諦めた。

だが、蛇型のモンスターはガーラをしばらく見つめると、体を捻り、ガーラの元から離れ、どこかへ消えていった。

そしてしばらくした後、洞窟に悲鳴が響き渡る。

悲鳴が聞こえなくなつて数分後、洞窟の最深部に宝箱が降ってくる。
おそらくマルクス達の盗んだ宝箱なのだろう。

マルクス達がやられた以上、次狙われるのはガーラだ。
怖くなったガーラは何も考えることができず、ただ走り出した。

やつとの思いでギルドに帰り着いたガーラ。だが、マルクス達の姿は見えなかった。

それから何度も何度も、ガーラは裏切られ続けた。そしてやがて、仲間を作ること
を恐れ、ひとり、孤独な冒険者となった。

そんなガーラの元に届いた声。恐れ遠ざけ逃れ続けた声。

ガーラは重い足を踏み締める。そして壊れた斧を手に声のする方へと走り出した。

「うおおおおお!!」

ガーラはゴーレムに向かって飛び上がると、壊れた斧でゴーレムの後頭部を殴りつけ

た。

強化魔法を使っていないはずのガーラの攻撃だが、ゴーレムはその衝撃で体制を崩し、尻餅をつく。

「ガーラ師匠!!」

ガーラが現れたことにリトライダー達は歓喜するが、それをすぐにガーラは制御する。

「集中しろ！　まだ敵は動けるぞ!!」

ガーラだって完璧に冷静なわけではない。リトライダー達の声がガーラの心を溶けてしまいそうなくらいに熱くした。

だが、それでもガーラは冷静さを装わなければならない。それはリトライダー達に失望して欲しくないからだ。ガーラ自身が味わった冒険者の本性。

それが真実だとしても、『こいつらの前ではこいつらの信じる冒険者でいたい』。そうガーラは思ったのだ。

「はい!!」

ガーラの参戦により、リトライダー達の指揮は一気に上がる。

戦闘開始!

ゴーレムが立ち上がっているうちに、ガーラはリトライダー達の元へと行き、作戦を伝える。

「いいか、お前ら、あいつの弱点を知ってるか?」

ガーラの言葉にリトライダー達は首を振る。

「ゴーレムは魔力を消費して活動する。そしてその魔力の源は体のどこかに仕込まれた格だ。その格を破壊すれば、ゴーレムの活動を封じることができる」

「じゃあ、その角はどこにあるの？」

「それが分かってたら、苦戦はしない」

ガールは先の戦いですでに核を探して攻撃していた。しかし、それはゴーレムの長い腕のリーチと攻撃力、防御力によって見つけ出すことはできなかった。

「じゃあ、その角を探さないといけないんですね」

「ああ、そういうことだ」

話し合っているうちにゴーレムは立ち上がり、ガール達に向き直る。そして長い腕を振り回し、攻撃を仕掛けきた。

「来るぞ、避けるー！」

ゴーレムの腕が地面に叩きつけられる。

それと同時に地響きがあり、飛び上がって避けた冒険者達に砂埃を被せる。

「前が見えないっす!!」

「私に任せて!!」

ミエが魔法計算を行い、杖から風を起こし砂埃を吹き飛ばす。

すると視界が一気に良くなり、リトライダーの目の前にゴーレムの腕が伸びて来ているのに気づいた。

「よ、避けられない!!」

次の瞬間、ゴーレムの腕が弾かれる。

「無事か？」

ガーラが強化魔法を使い、ゴーレムの腕を弾いてリトライダーを守った。

攻撃を弾くと、ゴーレムの体はその長い腕の遠心力で大きく揺れる。その大きく揺れたゴーレムの体を見ていたガーラは、ゴーレムの左目の奥に強力な魔力を感じた。

ガーラが腕を弾いたことにより、無傷で済んだりトライダーはガーラに深く礼をして感謝する。

「は、はい!!」

戦闘中に敵から目を背けるなど言いたいガーラだが、そんなことを言っている暇もない。

ゴーレムは攻撃が防がれても、もう片方の腕でもう一度攻撃を試みってくる。狙いはガーラ。

振り下ろされた腕がガーラに直撃した。

「ガーラ師匠!!」

しかし、ガーラは両腕でガッチリゴーレムの腕を挟み、ゴーレムの攻撃を真っ向から耐え切った。

「ミエ、奴の動きを封じることとはできるか？」

ガーラはゴーレムの腕を支え、足を震えさせながらミエに問う。

「で、出来るけど……」

「じゃあ、やれ！ それで動きを封じたら、リトライダー、ダズ。お前達で一斉に攻撃しろ。こいつの核は左目だ」

戸惑う彼らにガーラは笑みを見せる。

「俺なら大丈夫だ。お前達なら知ってるだろ。俺の頑丈さを」

ガーラの顔を見て、三人の体は動き出す。

ミエは杖をゴーレムの足元に向けると、魔法計算を開始する。
リトライダーは軽量化魔法を、ダズは身体強化の魔法を自身に付与する。
そして魔法計算を終えたミエ。

「行くよ！ 氷魔法（グラス）!!」

ミエはゴーレムの足元に氷の魔法を放つ。その氷は地面を凍らせ、ゴーレムの足とガーラの足を地面に固定した。

「行くぞ。ダズ」

「おうっす!!」

二人はゴーレムに向かって飛びかかる。狙いは一つ。ガーラの教えた左目だ。

二人の攻撃がゴーレムの目の前にやってきた。

だが、二人の攻撃は空中で弾かれ、ゴーレムには擦りもしなかった。

戸惑いを隠せずにいるみんなに声がかかる。

「そこまでにしてくれ……」

それは洞窟の奥からの男の声。

そこに目をやると、青いフードをかぶったスケルトンがそこにはいた。

「新手のモンスターか！」

新たなモンスターの出現に、武器をさらに強く握りしめる。

現状、ゴーレムに苦戦している状態で、新しいモンスターが現れるのは最悪の事態と言っても過言ではない。

まさに最悪な事態。そう、思った時。

そのモンスターの隣から見覚えのある人たちが姿を現した。

「パト君!? それに他の方達も……」

それは一緒に洞窟に入ったサージユ村の住民達。無事でいたのは良かったことだ。だが、なぜモンスターと一緒にいるのだろう。

ゴブリンの大群の時や洞窟に侵入する時、何度も彼らに助けられたリトライダー達は、彼らを一目置いていた。だからこそ、あのモンスターと一緒にいるのには訳がある。そう思い疑問に思っていると、何も知らないガーラがパト達に向かって叫んだ。

「君たち!! 早くそのモンスターから離れるんだ!! 早くこっちに!!」

ガーラの声を聞いたパトは、ガーラとリトライダー達の姿を見て、合流できたことを理解したようで、安心したように一呼吸置き、首を振った。

「良かった、無事だったんですね。それと安心してください。この方は人間です。モン

スターじゃないです」

続く

オーボエ王国編

第13話

【旧友と仲間の行方】

サージュ村に帰ってきた一行はパトの家で休憩を取っていた。

「ありがとうパト君。君たちには救われた」

ガーラはパトに礼の言葉を伝える。そしてリトライダー達の方を横目で見ると、

「しかし、俺は冒険者を連れて来いって言ったはずだったんだがな……」

リトライダー達は目を逸らす。そんな彼らの姿を見ながらも、ガーラは誇らしげに言った。

「だが、戻ってきてくれたのは嬉しかった。お前達は俺の最高の仲間だ」

それを聞いたりトライダー達は一気に明るく笑顔になる。

「それでこれからどうするんだ？」

一連の話を聞いていたガオが腕を組みながらパトに聞いてくる。

やることと言ったら決まっている。

洞窟から戻ったばかりでまだ何があつたかは村の人たちに話していない。そして何より、オルガさんについても分かっていること多い。

「オルガさんは確か、70年前にこのサーージュ村の住民にあの洞窟での魔術研究の許可をもらったって言ってましたよね」

するとオルガは首を縦に振る。

洞窟でオルガから話を聞いている時、そう言っていた。だとすると、その時この村に

いた人に話を聞くのが一番だ。

「これからある人に会ってもらいます。そこであなたの話が本当か確かめます」

パトはオルガを連れてある住民の住む家に向かった。

そこには古びた探検の道具や装備が大事そうに並べられている。

「ライトさん！　いますか？」

パトはドアを叩き、村一番の年長者であるライトに呼びかける。その呼びかけに応えるように、家の中からコツコツと杖を突く音が近づいてくる。

扉が開くと、そこには立派な白い髭を生やした老人がいた。

「なんじゃ？　パト君や」

ライトは髭を撫でながら首を傾げる。

パトは後ろで待っているオルガの前に出す。オルガには村に入る時、他の村人たちを驚かせないように仮面をつけさせた。

顔の见えない状態、いや、それ以上に70年も昔の人物をライトは覚えているのだろうか。そう心配していたパトであつたがその必要はなかつた。

オルガはライトの前に立つと、ライトの杖は倒れた。

「ま、まさか、その服……お主、生きておつたのか……」

その言葉にオルガは恥ずかしそうに応える。

「ああ……久しぶりだな。ライト」

その返答にライトは首を振る。

「まさか、おぬしと再び会うことができるとは……。70年前のことをワシは昨日のよう
うに覚えている」

ライトは嬉しそうに語り出す。

「オルガ。おぬし達のおかげでこの村はここまで発展を遂げた。70年前におぬしが貼ってくれた結界。それがこの村を何度も窮地から救ってくれた」

その話を聞き、パトは昔ライトから聞かされたある話を思い出す。

それは70年前のサージュ村。当時の村はオーボエ王国から遠く離れているということから警備も浅く、よく盗賊やモンスターに襲われていたという。

そんな状態から救い出してくれたのが、ある冒険者達であった。

彼らは村を襲っていた盗賊を撃退し、さらには村に巨大な結界を張り、村が襲われないようにしてくれたという。

その冒険者である一人が、オルガだということだろう。

パトは一安心する。これでオルガは村に危害を加える気はなかったとわかった。

モンスター大量発生の原因がオルガによる魔術であつたとするならば、これでモンスターの襲撃も減ることだろう。

「それで仲間は見つけることはできたのか？」

ライトの言葉にオルガは下を向く。

「魔術を使つても探し出すことはできなかった……」

その言葉にライトも思わず言葉を詰まらせる。

オルガは仲間を探すために70年前に村の住民から洞窟を借り、魔術の研究をし続けた。しかし、その結果得られた情報は一つもなかった。

それにオルガは魔術により、村を危険に晒していたことに責任を感じている。

それに気がついたのか。

「そう、責任を全て背負うことはない。お主は一人で戦ってきたんじやろ。よくこころま
で頑張った」

ライトはそう優しい言葉をかける。

「でも、俺は……村を危険に晒した」

「それは知っておる。じゃが、今はそれを乗り越えてどうするかじゃ」

ライトはオルガに気にせず前を向いて生きろと言っているんだろう。

オルガの魔術は村に大きな損害を及ぼした、しかし、彼に悪意がなかったのは事実だ。
彼に洞窟の使用を認めたのも、元は村の住民達であることだし。

彼だけに罪を擦りつけるのはどうかともパトは考えていた。

「なら、オルガさん。結界を張ってもらえませんか？」

その話を聞いていたパトはオルガにそう提案した。

「あなたが70年前にこの結界を張ってくれたんですね。これほど強固な結界は並の術者じゃ貼れないらしいんです」

「それくらいなら、簡単なことだが……」

「村のみんなには俺から説明します」

オルガには罪悪感が大きく覆い被さっているようだった。だが、パトの表情を見て、オルガは懐かしむと、

「やっぱり。君はあの人の……」

そう言い、しばらく考えた後、オルガは答えた。

「わかった。俺が結界を張ろう。だが、もう一つ、俺にやらせて欲しいことがある」

パトは父親に呼び出され、家に戻り、オルガとライトの二人だけになった。

「オルガ。お主はなんであんなことを……？」

「ある人との約束だ。俺が70年も仲間を探すことを諦めずにいられた。それは彼女のおかげなんだ」

それを聞いたライトには分からなかったが、追求することはしなかった。

「そうじゃ、久しぶりに再開したんじゃ。仮面越しではなく、顔を見せてくれんかのう？」

「俺の顔を見たら、びっくりして腰抜かすぞ？」

「わしを誰だと思ってる……。お主がどうなっているか、大抵想像がつく」

??????????

??????????

「あのオルガさん。もしよろしかったらなんですが、俺にその仲間探しを手伝わせてくれませんか？」

それを聞いたオルガは驚く。

「本当か!! それはとても嬉しい。だが、もう魔術は使えないし、何か、探す方法はあるだろうか」

そう、魔術を使えばモンスターが発生する。対応策としてゴーレムで発生したモンス

ターは駆除していたらしいが、魔術の腕が上がれば上がるほど、ゴーレムでの駆除が追いつかなくなっていたらしい。

そして魔術でも見つけ出すことのできなかったオルガの仲間たち、現在はどこにいるのか。その見当もつかない。

だが、そんなパト達の前に自信満々に言い放つ。

「ありますよ。探す方法なら！」

そこに現れたのは青髪に青い瞳の少年。

「シーヴか」

彼の名前はシーヴ・レーベル。オーボエ王国にある王立魔法学園に通う生徒だ。そしてエリスの後輩だ。

シーヴの言葉を聞いたオルガは興味を持ち、すぐさま聞き直す。

「方法がある？　どんな方法だ？」

しかし、シーヴはオルガのことなど既に見ておらず、シーヴは周りをキョロキョロと見渡す。

そしてシーヴはその場から密かに立ち去ろうとするエリスの姿を見つけた。

「エリス先輩!!」

名前を呼ばれたエリスは肩はビクリと揺れる。

そして恐る恐るシーヴの方に顔を向ける。

するとシーヴは怒ったような口調で言う。

「教授が呼びです。直ちに学園に帰ってきてください」

??????????

??????????

オルガがライトと繋がりがあつた冒険者だつたことが分かり、一時的にこの村に泊めることになった。

そしてこの村には宿のないということで、村長の家に泊めることにしたのだが……。

「……流石に多すぎる」

父親であるガオは帰つて来ており、ヤマブキの居候も決まつた。それにエリスとその後輩シーヴが住み着き、冒険者のガーラ達は遠慮し、外で野宿をしてくるようだが、この人数は家がパンクしそうだ。

「それで教授が呼んでるってどういうことなの？」

「はい。それなんです……」

シーヴは恐る恐る説明を始める。

それは近々オーボエ王国内で開かれる魔法研究発表会が行われるが、学園の代表に選ばれていた生徒が突然代表を辞退し、他の学生もやりたがらないというものであった。

その発表会は毎年のように開かれており、ここ数年はずっと学園の生徒が優勝を勝ち取っていたらしい。ここでその評価を落とすわけにはいかない学園側としてはここでエリスに出てもらいたいようだ。

だが、それを即座にエリスは断る。

「いやよ」

「なぜですか！　せめて!!　せめて!!　教授と直接交渉してもらっただけでも!」

「いやよ。私はしばらく帰る気はないの」

それはそれでパトとしては困る。

いつも面倒を見るだけでも大変なのに、今はこの人数。エリスだけにかまっている暇はない。ここはエリスには大人しく帰ってもらいたい。

パトも同じくシーヴと一緒にエリスの説得に参加する。

だが、エリスは断固として王国に帰ろうとしない。

なかなか説得に応じないエリスにパトとシーヴが疲れて来たところで、ガオが台所から皿に乗せられた白く丸い物を持ってきた。

「何これ？ 父ちゃん？」

「ああ、村長会議に行った時にシルバさんから頂いた異国の食べ物だ。確か大福とか言ったかな」

パトが手に取つてみると、柔なく弾力がある。中には何が入っているようだ。

「いくつか貰ってきたから、みんなで食べてくれ、とっても美味しいぞ」

ガオは家に泊まっている全員に大福を渡す。大福を受け取った面々はそれぞれ大福を口にする。

「うん、たしかに美味しい。パトは？」

「はい。そうですね。エリス先輩。美味しいです」

「あんたはどうでも良いのよ。パトはどう？」

「ああ、美味しい……」

パトはこの時初めて食べる大福の味に驚いた。だが、それ以上にパトには……。

「……………」

大福を食べたヤマブキの表情が一瞬和らいだ。

いつも無表情を貫いていた、その表情の変化に不思議な使命感を感じるのであった。

??????????

??????????

翌朝、一向に王国に戻ろうとしないエリスに呆れていると、朝食の片付けを終えた方が独り言のように呟く。

「そういえば、そろそろ王国に行って、村で採れた作物の売買と買い出しをしないといけないんだよな」

サージュ村では定期的に村で採れた作物を王国で売却し、王国で村で使えそうな魔道具などを購入している。

「ああ、そうだったね。じゃあ、オルガさんの件もあるし、俺が行くよ」

その独り言に何気なくパトが返す。

すると、それを横から聞いていたエリスが立ち上がる。

「なら、私も行く」

「……………」

突然、王国に戻ることに反対していたエリスが、ついて来ると宣言してきた。

パトが理由を聞こうとしたが、すぐに気づく。

王国までの道のりは早くても丸一日はかかる。パトの予想では、村でのだらけきった生活を送れなくなるから帰りたくない。そう思っていたが、それだけではない。この道のりがめんどくさかったのだ。

シーヴと二人つきりでは先輩としての威厳もあるだろうし、道中サボるのは難しい。

だが、そこにパトが加わり人数が増えたらどうなるだろうか。

それはエリスにとって楽をするチャンスとなる。

しかし、パトもシーヴもエリスが帰ると言ったこのチャンスを逃すわけにはいいかない。

パトとしては才能豊かなエリスにはこんな小さな村に残らず、大きな舞台で活躍してほしい。なら、優秀な魔法使いの集まる王国にいるのが、エリスのためになるだろう。

パトとシーヴは静かに目を合わせ、頷き合う。

「よし、なら今すぐ準備してきますね。エリス先輩!!」

「ああ、俺も準備してくる。今日の正午には村を出発できるかな」

「ん、そうなの。じゃあ、早く準備を済ませましょ」

パト達が準備を始めると、オルガとヤマブキも身支度を始める。

「俺も当然ついて行く。王国で仲間を探す方法が見つかるかもしれないしな」

「私モ同行シマス。私モ任務ハパトヲ守ルコトデス」

こうしてパト、ヤマブキ、エリス、オルガ、シーヴの五人でオーボエ王国へと向かうことになったのである。

???????????

???????????

準備を終えたパト達は荷物を台車に乗せ、馬車に乗り込んだ。

「道のりは分かってるよな？」

「ああ、勿論だよ。それに地図もあるし」

心配そうなガオにパトは受け取った地図を見せる。

道のりはそう難しくはない。それにパトは何度か王国へは行ったことがある。そう
そう迷うことはない。

「皆さんも準備はできてますか？」

パトが馬車の中を見ると、みんな大丈夫だと首を振った。

「じゃあ、頼むよ。シーヴ」

「はい、任せてください」

馬車を操縦するのはシーヴ。パトも操縦することはできるが、よくエリスを迎えに来るシーヴの方が道のりには慣れていると引き受けてくれた。

しばらく馬車を揺らし、道沿いに南東へと進んでいく。

そのことに気がついたエリスが、荷台から顔を出し、シーヴに見る。

「ねえ？ どこに行ってるの？」

「そりゃー、オーボエ王国ですよ。ルガン村とヤザ村経由で向かいます」

それを聞くとエリスはため息をつく。

「なんで、バンデイ山を越えないのよ」

「え!?! いや、あそこは盗賊が住処にしていますし、危険ですから……」

「でも遠回りじゃない」

たしかにエリスの言う通りではある。シーヴが通ろうとしているのは、バンデイ山を

避け、大回りに迂回するルート。山を越えれば一日で王国に着くことができるが、そのルートで行けば、三日はかかってしまう。

しかし、数十年前から山を越えるルートは危険視されている。その理由は盗賊が住み着いているからだ。

毎年バンディ山を越えようとした商人達が何人も犠牲になっている。

噂によれば、盗賊の頭はオーボエ王国の十聖と互角かそれ以上と言われている。

そんな危険なところを好んで通ろうとする者はいない。

「エリス、さすがにあの山を通るのは……」

パトもエリスを説得しようとするが、エリスはそれを聞かず、馬車を操作するシーヴの元に行き、無理やり進路を変えさせた。

「あ!!」

馬車はバンディ山へと向かう道へと進路を変えて進んでいく。

「大丈夫よ。私はいつも山を抜けてくるけど、盗賊には会ったことないから」

「そ、そうなのか？」

しかし、そんなエリスの言葉を信じてしまったのが悪かったのかもしれない。

「おい、そこの！ 動くんじゃないぞー！」

パト達の乗る馬車は草木の生い茂る山のど真ん中で盗賊に囲まれていた。

続く

第14話

【盗賊に襲われて】

世界最強の兵器はここに!?! 14

著者：p i r a f u d o r i a
作画：p i r a f u d o r i a

第14話

【盗賊に襲われて】

パト達の乗る馬車は盗賊達に囲まれていた。

場所とは山のご真ん中にある森林。村からも王国からも離れているため救援は期待できない。

ざっと見渡しただけでも二十人はいるだろうか。統一感のない武器や装備を持った盗賊は、馬車を囲みジワジワと滲み寄ってきていた。

「え、エリスせんぱうい」

盗賊に気圧され、馬車を止めたシーヴが涙目でエリスを見る。しかし、エリスはそっぽを向いて知らんぷりをした。

しかし、自分のせいで盗賊に襲われていることに責任感を感じてだろうか。

エリスは馬車から降り、前方にいる盗賊を睨みつける。

「ああ？　なんだあ？　ガキ？」

「そこを退きなさい。私たちはあなた達に構ってあげる気は無いのよ」

「ああん？」

「えー！ エリス先輩!!」

エリスの言葉に気分を悪くした盗賊は武器を取り臨戦体制を取る。

「身包み全部剥がされたいらしいな」

しかし、盗賊の背後からそれを止める声が聞こえる。

「待ちな！」

そしてそこから現れたのは黒髪ショートヘアの女盗賊。

歳は二十歳前後のように見えるが、盗賊達に向ける目には尊敬の念が籠っている。

「姉さん、どうしてですか？」

盗賊の一人が疑問の声を上げる。それに女盗賊はパト達を睨みながら答える。

「それは魔力量が明らかに違うからだよ……」

女盗賊は腰に巻いたバックからナイフを取り出すと、それを手にパト達目掛けて走り出した。

そしてパト達を囲む盗賊達に向けて指示を出す。

「作戦Hだ！ お前達は配置に行け！」

「はい!!」

指示に従い盗賊達は次々と森の中へと姿を消していく。

そんな中、女盗賊は手に持っていたナイフをパト達の頭上へと投げる。

投げられたナイフは宙を舞い、空で半円を描く。

ナイフの落ちた音が森に響く。風の音が身近に感じる。

「今のは何だ？」

落ちたナイフをオルガは拾う。

さっきまでいた人間が姿を消した。
残されたのはオルガのみ。

「私の魔法を避けたか……」

??????????

??????????

頭上を飛ぶナイフを追い、上空を見上げた。パトは周りの状況の変化に驚いていた。

「い、これは？」

「ワカリマセン。シカシ、座標二変化ガアリマス」

さつきまでの場所と違う。森の中にはいるはずだが、地形も違うし、馬車も、そしてヤマブキ以外誰も見当たらない。

「場所が移動した？ 魔法か？」

魔法に関してはあまり詳しくないパトだが、空間を超えて移動する魔法の話はどこかで聞いたことがある。

状況が全て飲み込めていないが、このままではまずいと考えたパトはみんなと合流する手段を探す。

「魔法で瞬間移動させられたとしてもここはまだバンデイ山の中のはず……。どうやって合流するか……」

「けっけっけ、合流？ そんなことはさせないぜ？」

悩んでいると、森の奥から長剣を持った眼帯の男が、剣を大きく振り回し近づいてきている。

男はパト達を見ると、ちよつと残念そうに呟く。

「ツチ、弱そうなのしかいねえじゃねーか」

パトは男の顔に見覚えがあることを思い出す。

「熊の爪（オングル・ウルス）の総長、エンザン・コロン……」

「ほお？ 少年、俺のこと知ってくれてるのか。うれしいねえ」

エンザンの顔は手配書で何度か目にしている。

バンディ山の盗賊を従える凄腕の剣士。元フルート王国の団長。

エンザンは笑顔で剣を上下に振り続ける。

「一応言つとくぜ。俺は女だろうが子供だろうが……」

エンザンは剣を振る腕の力を緩めていく。するとだんだん剣の揺れは少なくなり、やがて動かなくなつた。

そして次の瞬間、風の音と共に、パトの顔を目の前で刃が止まる。

「ほお、俺の剣を止めるか。姉ちゃん」

パトは恐る恐る隣を見ると、ほんの数センチの隙間を開けた刃を素手で受け止めるヤマブキがいた。

「や、ヤマブキさん!？」

パトの心配そうな顔を見て、ヤマブキは無表情で返す。

「問題アリマセン」

しかし、問題はないと言われても、心配にならないはずがない。
不安な表情の帕特を横に、ヤマブキは剣を握る指に力を入れる。

すると、エンザンが剣を引っ込めようとしてもピクリともしなくなる。

「コレヨリ戦闘ヲ開始シマス」

??????????

??????????

オルガは馬車の前で女盗賊と対峙していた。

女盗賊がナイフを投げた際、展開した魔法陣。俺がだけに気づき、身を躲して
いた。

「ほう、私の転送魔法を避けたか。やはり只者ではないな」

オルガは現在、フードに仮面を被り、白骨化した姿は見せていない。そのため見た目は普通の人間なのだが、この女は気づいたということなのだろうか。

オルガが何も答えずにいると、女盗賊は続ける。

「魔力を見れば分かる。貴様は強い。そしておそらく貴様が噂の人物なのだろう……」

何を言っているかは分からないが、オルガの本当の姿はサージユ村の中でも僅か人しか知らなかった。だとすると、この女が言っているのは別人なのだろうか。

「天才魔法使い。貴様とは一度正々堂々と戦ってみたかった。だが、これも運命……。貴様との出会いに感謝し、名を教えよう」

オルガはなんとなく、女盗賊の態度や言葉に違和感と、苛立ちを覚え始める。

「私の名はミリア・アドラス・ニーオンだ。貴様の名は何だ？」

「オルガ・ティダードだ」

そしてミリアの名前とその態度や言葉にオルガはどこか懐かしみを感じる。しかし、そこには霏がかかったように、何も思い出すことはできない。

ミリアは腰に下げたナイフを取り出すと、身を低くして構えた。

「オルガ、いざ尋常に勝負だ!!」

ミリアはナイフを手に真っ向から突っ込んでくる。そのスピードは早く、魔法を使っていないのにも関わらず、気が付けばすでに懷に潜り込まれていた。

しかし、スピードに自信があるのは彼女だけではない。オルガも同様であった。

オルガは素早く後退すると、コートの中に隠してあった大鎌を取り出し、ミリアの攻撃を防ぐ。

だが、ミリアの攻撃を受け止めたと同時に、ナイフを残し、ミリアの姿が消える。そして突如、上空から大木が落ちてきた。

オルガは大鎌を持ち直すと、落ちてくる大木を真つ二つにする。大木は綺麗に割れ、地面へと激突した。

「さすがだな」

その様子を少し離れたところでミリアは拍手して見ていた。

そしてその光景を見たオルガは確信する。

移動系の魔法。それも魔法計算無し……。固有魔法か。

固有魔法は魔法計算を行わずに魔法を使用することができる。しかし、固有魔法を使える人間は限られているし、その人間は……。

「なかなかやるみたいだな。だな、これならどうだ？」

自信満々にミリアは指を鳴らす。

すると、オルガのいるところに突然巨大な日陰ができる。そして上を見上げると……。

「岩っ!？」

巨大な岩がオルガの上空に出現し、落下してきていた。

このままでは押しつぶされてしまう。しかし、大木と違い、この巨大な岩はオルガの持つ大鎌でも切断することは不可能。

「避けるしかないか」

オルガは岩を避けるため、地面を蹴り、後ろへと後退する。

しかし、オルガが後退したと同時にミリアは再び姿を消した。
だが、オルガにはミリアの現れた場所が分かっていた。

後ろか……。

それはオルガの使っている魔法。感覚強化によるもの。

いつからか、洞窟で生活するうちに体の感覚が無くなったオルガは、自身に感覚を強化する魔法を付与し、強制的に周囲の環境を把握していた。

風や匂い、あらゆる感覚を通じ、白骨化した体でも人間のように生活できるようにしていた。

そしてそれは戦闘面でも反映される。

強化された感覚は敵の鼓動や移動時に発生した風を感知し、通常よりも速いスピード

での動きを把握することができるのだ。

だが、そこにもデメリットは存在した。

それはダメージ。普通であれば、感覚器官のないモンスターになったのならダメージは感じないはずなのだが、感覚を強化しているオルガにはその痛みが何十倍にも感じる。

そのため小さな擦り傷であっても、オルガにとっては生死に関わるダメージへとbecomeかねないのだ。

岩とミリアに挟まれたオルガには逃げ場はない。そして背後に現れたミリアを大鎌での防御は間に合わない。

ミリアは勝利を確信し、ナイフを振り下ろす。しかし、ナイフは空中で弾かれ、オルガに届くことはなかった。

「なっ!?!」

大鎌での防御の間に合わないオルガであったが、もう一つオルガにはミリアの攻撃を防ぐ方法があった。

それは……。

「結界……」

オルガはミリアのナイフを防ぐため、一時的に小さな結界を張り、ナイフを弾いたのだ。

しかし、その結界は一時的の回避のために作ったもの、長く持つものではない。このまま結界も何度の攻撃を受け続ければすぐに壊れてしまう。

だが、結界を見たミリアは警戒し、距離を取った。

それによりオルガは表情には出さないようにしたがホツとする。

距離を取ったミリアは警戒を解かないまま、オルガを睨む。

「それは結界魔法か……。それに今、魔法計算を行わずに……。いや、そんなはずは

ない。それが出来るのはあの人しか」

ミリアは一人ぶつぶつと考え出すが、頭を左右に振り、切り替える。

「いや、相手はある噂の天才魔法使い。ならば、魔法計算を飛ばしたとしてもおかしくはないはず」

一人で勝手に解決したミリアだが、ミリアの言う天才魔法使いについてオルガには心当たりはない。

「ふつ、面白いぞ。オルガ。だが、私に奥の手がある……」

そう言い、ミリアはオルガに向かって手の平を向ける。

それを見たオルガはその奥の手を一瞬で理解した。

転送魔法による物体の移動。それは魔法計算を行なった場合、魔法計算に加え、転送前の座標と転送後の座標に魔法陣を設置する必要がある。

魔法陣の設置はあらかじめ設置しておくことも可能だが、目視できる距離であれば、その術者の実力次第でどこにでも展開することができる。

そしてミリアの固有魔法は魔法計算抜きで転送魔法を行うことができる。パト達を転送した際は、彼らに魔法陣を貼り付け、あらかじめ魔法陣を展開してあった場所に送ったのだろう。

あの時はオルガは魔法陣を展開しようとするミリアの動きにギリギリで気づき避けることができた。

だが、今は違う。ミリアは確実にオルガに魔法陣を展開できる体制を確立している。いや、一対一の状態で逃げたとしても、逃げ切ることは不可能だろう。

ミリアは強い。そう、オルガは感じていた。

そして結界を張ろうとも、転送魔法は防ぐことはできない。

結界はあらゆる害的な存在を弾くことができるが、空間を越える転送魔法はその結界を避けて通り抜けることができるのだ。

おそらくミリアもそのことを知ってる。だからこそ、結界に気がついた直後、距離を取り、攻撃手段を変えたのだ。

固有魔法で転送魔法を使うことができ、ここまで戦闘に活かすことができるのなら、最初からこの手段をとっていれば良いようにも感じる。

だが、それをしないのはミリアにそれを嫌う理由があるということだろうか。

手のひらを向けたミリアはオルガに尊敬の目を向ける。

「……すまないな。本来ならこのような手段は取りたくなかった。だが………私にはやらなければならないことがある」

ミリアの手に魔力が集中する。

汗も流れない体になったオルガであるが、死に直面し、体が硬直し、寒気を感じる。

おそらくミリアは俺の体の中に何かを転送してくる。何が送られてくるかは分からないが、骨に少しでも傷が入れば、その時点で俺はショック死してしまうだろう。

心残りは多くある……だが、なんだろう。こいつにやられることに抵抗を感じない……。

避けることも反撃をすることもできないオルガは諦めたように棒立ちになり、ミリアの攻撃を待つ。

そしてミリアの天のひらとオルガの体内に、魔法陣が現れる。

「さあ、貴様の心臓を貫く!!」

し、心臓だと!?

「心臓掬い（デロペ・ルキウール）!!」

ミリアの手が光り、魔法が発動する。

しかし、何も起こらなかった。

続く

第15話 【手っ取り早く倒したい】

世界最強の兵器はここに!? 15

著者：pirafu doria

作画：pirafu doria

第15話

【手っ取り早く倒したい】

「心臓掬い（デロペ・ルキウル）!!」

ミリアは転送魔法を使い、オルガの心臓を奪おうとするが、何も起こらない。

「……………ん? ……心臓掬い（デロペ・ルキウル）!!」

「……………」

「……………な、なぜだ!？」

ミリアは衝撃を受ける。

そんな中、オルガはホッと息をつく。

そう、スケルトンとなったオルガには心臓は存在しない。そのため、オルガの心臓を抜き取ろうと発動した転送魔法であったが、それは失敗に終わったのだ。

この時オルガは初めて自信が白骨死体になったことに感謝する。
そしてこのチャンス逃すまいと勝負に出ることにした。

「甘かったな。だが、その魔法は俺には効かない」

「な、なんだと!？」

「俺は魔法の効果を消失される魔法を使ったからな。その魔法が俺に届くことはない」

これは単なるハツタリ。そんな魔法はオルガには使うことはできない。

だが、ミリアの言う天才魔法使いなら、それも可能なかもしれない。そう、ミリアの態度から思い付いたからだ。

そしてそのハツタリの効果は予想以上に早く現れる。

ハツタリを聞いたミリアは汗を流し、焦りの表情を浮かべ出す。

「そ、そんな魔法を……だが、貴様ならば、………可能なのか」

しかし、それでもあと一押し足りていないようで、ミリアが疑いを向けていることがわかる。

ここでミリアを驚かせることのできる衝撃のことがあれば、もしかしたら……。そう考えたオルガはあることを思いつく。

それは……。

「ふふふ、ならば俺の正体を見せてやろう」

「……………正体……………だと……………」

ふふふ、俺だつて驚いたんだ。驚かない奴がいはいはうがない!!

オルガは自信満々に仮面を取る。

そしてオルガの白く硬い骨を顔がミリアの目に入る。

それを見たミリアは大きく口を開けて叫んだ。

「モンスター!?!」

「モンスターじゃねえ!!」

モンスターと言われ、思わず言い返してしまったオルガだが、しっかりとミリアを驚かせることには成功した。

そしてオルガの正体を知ったミリアは一步退く。

「くつ、あの天才魔法使いと言われる人間がモンスター……いや、その姿は魔素の影響か……。しかし、これは分が悪いか」

ミリアはナイフを腰にかけたバックにしまうと、オルガを指差す。

「今回は退いてやる。だが、次に会った時は覚悟するんだな!!」

そう言い、ミリアは森の中へと姿を消した。

??????????

??????????

転送魔法で森の奥深くへと転送されたエリスとシーヴは、盗賊達に囲まれていた。

「ど、どうしましょう……エリス先輩」

数はざっと50程度。

しかし、魔力から敵の様子を探っていたエリスは違和感を感じる。

それは盗賊達の動きが、盗賊というよりも兵士のように、統率を取り、規則正しく囲んでいるのだ。

その様子に同じく気づいたシーヴが怯えた様子で呟く。

「し、知ってますか。熊の爪（オングル・ウルス）はフルート王国の精鋭部隊だったそうです。ですが、アングレラ帝国に国を奪われて、それからここで盗賊に成り下がったんだとか……」

それを聞いたエリスは盗賊達の統率の取れた配置に納得する。そしてそれと同時に厄介な相手だと考える。

相手の元王国の兵士なら下手な攻撃じゃ、そう簡単には突破できない。

もしも一箇所突破口となる道を作っても、他の兵士がすぐに経路を塞ぐだろう。統率の取れた集団ほど、厄介な敵はいない。

「そうね。なら、ここはあなたに任せるよ。シーヴ」

「……え、え!? な、なんですか!? エリス先輩!!」

「それはこれはあなたが成長する良い機会だからよ」

盗賊達を相手にするのが面倒になったエリスは、シーヴに適当な理由をつけて、戦闘を押し付けることにした。

「わ、分かりました！ 任せてください!!」

エリスを信用し切っているシーヴは怯えながらも、エリスに言われた通り盗賊を一人で相手にすることに決めたようだ。

シーヴは魔法陣を展開すると、自身に身体強化の魔法を付与する。

そして魔力を頼りに森の中へ飛び込むと、一人一人順番に盗賊を殴り倒していく。

シーヴは魔法学園でエリスと同じく特待生での入学者であり、その魔力量と知識から多くの騎士団や魔法団体からの推薦を貰っている。

この盗賊達も元騎士ということもあり、そこらにいる盗賊よりは実力は上だろうが、シーヴとの実力差は明らかである。

「な、なんだ!?! あのがキは!?!」

「っ、強い! グハ!」

実力差を感じ、恐れ始めた盗賊達を見て、シーヴは自身を持ってきたのか。

「僕は王立魔法学園の生徒です。あなた達には負けません!」

胸を張ってそんなことを言い放つ。

さつきまで盗賊にびびっていた姿はどこへやる……。

相手と自分の実力を理解できないのが、シーヴの欠点であり、そしてこのように調子に乗るところもシーヴの弱点だ。

恐る盗賊達を見て、調子に乗り始めたシーヴはさらに身体強化 R e v e l 2 へと付与魔法を強化する。

Revealを上げることにより、魔法の性能は上がるが、魔力消費量は増加し、コントロールも難しくなる。

盗賊達を丁寧に一人一人追いかけて倒す。

そんなシーヴを見ていたエリスはやれやれと首を振った。

「時間のかけ過ぎよ」

そして立ち上がってシーヴに文句を言う。

それを聞いたシーヴは足を止めた。

「なんですか？ エリス先輩」

戦闘中で興奮していたこともあり、聞き取れなかったようだ。聞き返されたエリスは再び言う。

「時間のかけ過ぎなのよ。Revealを上げるんなら短期決着にしろさい」

本当だったら、めんどくさいし何も言う気はなかったが、このままではシーヴの魔力を無駄に消費する。

それにこんな事態になったのも、元はエリスの責任。その責任からエリスはやっと自分で動くことにした。

「良い、魔力には限りがあるの。だから、大量の魔力を使うときは、時間をかけてはいけないの」

エリスはそう言いながら、杖を取り出す。そしてシーヴに近くに寄るように手招きする。

シーヴは叱られていると思い、怖がりながらもエリスの元へと駆け寄る。

「敵は森の至る所に隠れてる。そういう時はこうするのよ」

エリスはまず自身とシーヴを囲むように正方形の結界魔法、絶対防御（ペルフェクシオン）を生成する。

「これは？ 結界魔法？」

「ま、一時的なものよ。長くは持たない」

結界魔法を貼り終えたエリスは、今度は杖を上に掲げ、杖の中心に強力な魔力が集まり始める。

膨大な魔力の流れを見たシーヴは、その力の強大さとそれを悠々と操るエリスの姿に見惚れる。

「大災害（デザストル・トルナード）」

魔法を発動すると、巨大な風の渦がエリス達を囲むように発生し、森を飲み込む竜巻へと変貌する。

竜巻は木々を飲み込み、盗賊達を宙に浮かし、森を破壊する。

そして森に隠れていた盗賊達はエリスの魔法によって一瞬のうちに一掃された。

大災害（デザストル・トルナード）を見たシーヴは口を開けたまま、しばらく固まっていたが、やっと状況が飲み込めたのか。

「え、エリス先輩!? 今のはなんですか!？」

「大災害（デザストル・トルナード）だけど？ 授業でやったことあるでしょ?」

「いや! それは知ってますけども!! あれはフラスコの中でやるのが基本で……。実際に竜巻を起こすことなんてできるんですか!？」

「当たり前でしょ、そういう魔法なんだから……」

まあ、その代わりに魔力の消費量は膨大で、何度も使えるような魔法ではない。

「エリス先輩……恐ろしや……………」

シーヴはエリスに尊敬と恐怖の混ざった眼差しを向ける。

「これで襲ってきた盗賊は倒せたけど。どうしようか」

「そうですね。僕が先にオーボエ王国に行つて警備隊を連れてきましょうか？」

「そうですね。そうしましょう」

????????????

????????????

エンザンは剣をやマブキに掴まれ、一切の身動きが取れずにいた。

「なんだ…………この力は…………」

エンザンの力がないわけではない。ヤマブキの力がエンザンの力に圧倒的に混ざっている。

エンザンは残っている片手でヤマブキの顔を殴る。しかし、ヤマブキは表情を変えるどころか、ダメージを受けている様子はない。

「クソ！　なんだ貴様は！」

エンザンの額には汗が流れ始める。

このような展開になるとは想像していなかったようだ。
そしてそれはパトも同様であった。

盗賊の攻撃を素手で受け止める少女の力に驚愕し、そして少年が希望を持っていた技術の恐ろしさを見ることとなった。

ヤマブキは剣を一瞬離すと、素早く両腕でエンザンの腕を掴む、そして両方の腕を徐々に近づけていく。

「な!? 何をする!? お、俺を潰す気か!」

エンザンは暴れて抜け出そうとするが、抜け出せそうにはない。

パトは何もできず、その場で人間が潰されそうになる様子を見守ることしかできなかった。

「ごのおやろお」

しかし、エンザンは諦めようとはしなかった。気絶しそうになりながらも、自身とヤマブキの間に魔法陣を展開した。

「衝撃波（アンパクト）オ!」

エンザンが渾身の力を振り絞り、魔法により爆発を起こす。

その衝撃の威力は凄まじく、木々が揺れ、爆音が周囲を包んだ。
土煙が舞い上がり、二人の姿は見えなくなる。

「ヤマブキさん!!」

パトは心配し声を上げる。しかし、冷たい声が返ってくる。

「問題アリマセン」

やがて土煙が晴れ、二人の姿が見える。そこにあつたのは無傷のヤマブキの姿と、泡を吹いて倒れているエンザンの姿。

パトはヤマブキが無事であつたことに安堵する。だが……。

パトは倒れているエンザンの元へと駆け寄る。

エンザンの呼吸は荒く、呼吸困難を起こしているようだった。
エンザンは盗賊であり、悪党である。しかし、

パトはヤマブキの頬を叩く。

だが、ヤマブキは無表情で反応はない。

「やりすぎだ。こいつは悪人だ。だが、ここまでやることはない。モンスターじゃない
しな」

パトは出来る限りの応急処置をする。だが、あまり多くの知識もなければ、道具もあるわけではない。

処置をしている最中、森の奥から馬車が向かってくる。

「パトさん！ 無事でしたか！」

馬車を操作しているのはシーヴ。それにエリスとオルガの姿もある。全員無事だったようだ。

「シーヴ、ちよつと来てくれ」

パトはシーヴを呼ぶ。

シーヴの両親は医者で、シーヴは治療魔法を専門に研究している。そのためシーヴならエンザンの容態も分かるはずだ。

「この人は……!? ……いや、それよりも、これは少しまずい状態です。早く王国の警備隊に引き渡して、しっかりした治療を受けさせた方が良いでしょう」

パトはシーヴと協力して、エンザンを馬車に乗せる。

エリスとシーヴの倒した盗賊はすでに警備隊に引き渡したようだ。

馬車を急がせ、
パト達は王国へと向かった。

続く

第16話 【オーボエ王国】

世界最強の兵器はここに!?! 16

著者：pirafu doria

作画：pirafu doria

第16話

【オーボエ王国】

「なんだい？ アイリス、こんな時間に……？」

夜風に髪を靡かせ、女性は北を見つめていた。

「……………そうか、来たんだね」

女を寒い夜風から守るように、風上に立った男は、同じように北を見た。

「招こう。一度話してみるべきだ。全てはそれから……」

男は着ていた上着を女性の方に掛ける。

「さあ、戻ろう。夜風は冷える。温かいスープ用意した。一緒に飲もう」

??????

??????

エンザン達、熊の爪（オングル・ウルス）を警備隊に引き渡したパト達は、オーボエ王国へと入国した。

巨大な門を潜り抜けると、そこには笛のような細長い建物が、天に届くように立ち並んでいる。

「いつ見ても高いな……」

夕暮れだというのに、大通りには多くの人が入り混じり、出店も賑わっている。そんな王国の様子を見ていたオルガがほつりと呟いた。

「これがオーボエ王国か……。変わったな」

仮面越しに王国を見渡す。

「来たことがあったんですか？」

「ああ、昔に仲間と何度かな。だが、かなり王国の風景も変わったな」

オルガは70年も洞窟の中にいた。それだけの年月が経てば、王国の姿も大きく変わる。

それに数十年前に起きたオーボエ王国とフルート王国の戦争。それは急激に文明を進化させた。

現在王国の名物となっている細長の建物。それもここ数十年で文明が一気に発展したことにより、多く見られるようになった建物の一つだ。

「まあ、一旦どこかで泊まりましょうか。早くしないと宿が混んでしまいます」

街を見渡していたオルガ達に、シーヴはそう言う。

「あれ？ でも、エリスとシーヴは寮があるんじゃないか？」

宿と一緒に探してくれている二人に、パトは疑問を抱く。

王立学園の生徒には、学園内に寮が支給され、自由に泊まることができたはずだ。そのことを知っているパトは二人に尋ねる。

「いえ、それが今は規制が厳しく。この時間になると生徒でも学園内へと出入りが禁止

されてるんです」

シーヴはそう答える。詳しい事情は分からないが、二人にも宿が必要ことがわかった。

「じゃあ、宿代は俺が出そう。買い出しは明日からだしな」

パトは父親から買い出しのために貰った多めに金貨を受け取った。そのため宿代くらいなら負担できる。

その後、近くにあった宿で、三人部屋を一つ、二人部屋を一つ借り、男女に分かれて泊まることになった。

宿は一部屋、銀貨2枚と格安だが、とても綺麗でベッドもふかふかだ。

??????

??????

翌日、宿をチョックアウトすると、エリスとシーヴは学園へ、パトとヤマブキ、オルガは買い出しに行くということで別れることになった。

「シーヴ。エリスのことを頼んだぞ」

「はい。ではエリス先輩行きましょう」

「えっと、やっぱり私は……」

「ほらー！」

逃げようとするエリスをシーヴが捕まえ、学園へと引つ張っていく。そんな光景を見送った後、パトは村から引つ張ってきた馬車で連れて、村から持ってきた作物や道具の売買のため、父の知り合いの行商人の店へと向かった。

村のことであるので、買取をしてもらっている間はヤマブキとオルガは自由にしている、
ていいと言ったが、

「私ハパトヲ護衛スルトイウ任務ガアリマスカ」

「俺も手伝うぜ。一人よりも三人でやった方が良いだろ」

二人が手伝ってくれたおかげで、正午には買取の交渉と頼まれていた買い出しも終わることができた。

「これで全部だな」

パトは父親から貰った買い物リストと馬車の荷物をチェックし、全てあることを確認する。

「よし！ 手伝ってくれて、ありがとうございます」

パトは二人に頭を下げて礼を言う。そして二人に一枚の金貨を見せる。

「何か欲しいものはありますか？ 良かったら買いますよ」

二人のおかげで仕事を早く終わらせることもでき、想定よりもはるかに多くの金額を儲けることができた。

その分のお礼として何か欲しいものがあつたら、買ってあげたいとパトは思っていたのだが、二人は首を振る。

「私ハ大丈夫デス」

「俺もだ。それにそれはお前の村のお金だろ。無駄遣いするなよ」

そう言い、二人は遠慮する。

オルガはそうに言ったが、パトとしては二人は既に村の一員である。

それに二人がいなければ、盗賊に襲われて村に辿り着くことすら、出来なかったかも

しれないのだ。

どうしても何かお礼をしたかった。パトは周りを見渡し、すぐ近くに出店があることを発見する。

「では、あれを食べましょう」

??????

??????

出店で買ったソフトクリームを手には、三人は公園のベンチで休憩を取っていた。

ヤマブキさんは抹茶味のソフトクリームを美味しそうに頬張っている。ここまで喜んでもらえると、なんだか嬉しいものだ。

最近分かったことなのだが、ヤマブキさんは基本的に無表情だ。しかし、甘い物を食

べている時にはこうした可愛い表情を見せるのだ。

他にも洞窟でキャファールに襲われた時や、部屋で虫が出た時も、ヤマブキさんの普段は見せない焦りの姿があった。

俺は今までヤマブキさんを科学文明（アルシミー）の遺産だと思っていたが、最近そのことに疑問を感じ始めている。

なんというか、ヤマブキさんには人間らしさを無理やり抑え込まれている。いや、抑え込んでいる。そう感じることもあるのだ。

これは俺の知る科学文明（アルシミー）ではない。そう思い始めている。

「……パト」

一人チョコ味のソフトクリームを食べ終えたオルガが、真剣な声で呟く。

「何かいる……すぐその茂みに……」

そう言い、ベンチに座りながらも、すぐに動けるようにオルガは尻を浮かせている。

ヤマブキはソフトクリームを食べることに真剣で、気づいてはいない。

パトはオルガに言われた茂みに視線をやろうとするが、オルガに止められる。

「待て……気付いていないフリをしろ」

「なんで？」

「武器を持つてる。何が目的かは分からないが、俺たちを見張ってる」

武器を持つてる俺たちを見張っている？

パトはそれを聞き、心臓の鼓動が速くなっていくのを感じる。

何が起きているのかは分からない。だが、武器を持っている人物に見張られているのだ。もしかしたら命を狙われているのかもしれない。

そう考えると、だんだん怖くなってくる。

「落ち着け！ 襲つてはこないと思うぞ」

「本当か？」

「ああ、襲つてはこないと思う。うん、きつと、そう、襲つてはこないんじゃないかな」
「もう少し自信を持っていつてくださいよ！ てかなんでそう思うんですか？」

「勘」

「そりゃー、自信はないですよ。まあ、でも、落ち着かせようとしてくれたんですよ。ありがとうございます」

だが、なぜ見張られているのか、全く心当たりがない。人に恨まれるようなことはした覚えはない。だとしたら、なんなんだろう。

そう考えていると、例の茂みから一瞬光が見えた。

そしてそれと同時に、立派な剣を持った男が茂みから飛び出してきた。

男は剣をパトに振り下ろしてくる。パトは腰を抜かし、口を開け動けない。その横にいたオルガはフードから鎌を取り出すと、男の首に刃を向けるが……。

男がパトの目を前で剣を止めたことにより、オルガも動きを止めた。

しばらくの沈黙の後、男は下がり、剣を腰にしまう。

「すまない。突然の無礼、失礼した」

男は深く頭を下げる。

「私の名はガルム・ウィーク。パト・エイダー様とお見受けしました」

パトは突然の出来事に、未だ固まって動けない。

「あの申し訳ございませんが、そちらのフードの方、武器を下げてもらえますか？」

まだ鎌を向けたままだったオルガに向け、ガルムは武器を下げるようお願いする。しかし、オルガは下げる様子はない。

「突然襲いかかってくるような輩の言うことを聞くとするか？」

そう言われたガルムは納得したように首を振る。

「それはそうですね。申し訳ない。だが、私も我が主人と合わせるに相応しい人物が、それを確認したかったもので……」

ガルムは動けずにいるパトを見つめる。その表情には少し不安そうな雰囲気がある。

しばらく経ち、やっと心臓の動きが元に戻ってきたパトは、深呼吸をしてガルムに聞く。

「えっと、ガルムさんですよ。ど、どういったご用件でしょうか？」

「我が主人があなたと、そして……………」

そう言い、ガルムはソフトクリームを食べ終わったヤマブキに視線を向ける。

「あなた方お二人に、面会を求めています」

パトは首を傾げる。

このガルムという男には初めて会った。そして王国でのパトとの顔見知りはいない。その中の人物に、このガルムのような人間で呼び出しをするような人はいない。

「えっと、その、その人って誰ですか？」

パトの言葉に、ガルムはハッと気づく。

「そういえばまだ、お教えていませんでしたね」

ガラムは王国の中心にある巨大な建物を指す。

「我が主人の名はジョージ・フェリス。このオーボエ王国の第二皇子です」

??????

??????

高級な馬車に揺られ、パトとヤマブキは王国の中心部へと向かう。

オーボエ王国を収める王族フェリス家。彼らはマジール文明を作り上げた一族の生き残りであり、その中でも最も純血に近いと言われている。

そしてジョージ・フェリス。彼はこの国の第二皇子にして、第一皇子アルベルト以上の人気があり、国民からの信頼を厚い、優秀な皇子である。

そんな皇子が、小さな村の村人であるパトに用があるとはどういうことだろうか。

馬車に揺られながら、パトは何の話があるのだろうかと考える。

オルガには村の荷物を任せることになった。

パトと約束の件で少し揉めたようだが、無理矢理納得させたようだ。

しばらくして馬車は王国の中心にある小さな丘にたどり着く。

その丘の頂上には円柱の形をした建物が堂々と立っている。それがこの王国の城。「コンセール城」である。

普段なら白に入るところか、近づくことすら許されない。しかし、その場にやって来た二人。

「こっちだ」

馬車が止まり、ガルムに連れられ城の中へと案内される。

純白の壁で出来た城は雪のように美しく、広場のように広い城内は開放感溢れている。

城内の人間は誰もが清楚な服装をし、二人はまさに場違いな状態である。

パトは城の雰囲気には圧倒されていると、場内から一人の男が猛スピードで近づいてくる。

「が、ガルム様!!」

男は汗だくで、城にいる人達と同じような服を着てはいるが、ヨレヨレになり汚れている。

「どうした？　ワイゼ、またか？」

「はい。またベアリトス様が……ああ!! どこへ行つたのか!!」

よくあることなのだろうか。ガルムはため息をしながら、慣れたように言う。

「分かった。俺もこの客人をジョージ様の元へ案内してから探しに行こう」

「はい。助かります」

ワイゼは一礼すると、城の外へと走っていく。

その様子を見送った後、パト達はガルムに案内され、凄まじく長い螺旋階段を登る。オーボエ王国の建物は円柱形の物が多く、縦に長い。そのため上層に行こうとすれば、エグいほど長い階段を、登らなくてはならない。それは城でも同様である。

体を鍛えているパトであるが、この量の階段を登るのは初めてでへとへとである。それはヤマブキも同様のようだ。

しかし、王国の人間はその生活に慣れているのか、息の切らすことなく階段を登っていく。

窓の外から地上の人間が蟻と同じような大きさに見えるようになった頃。

「エエ」だ」

ガルムが足を止め、やっと客室に着いたようだ。

「私は先程の通り、用がある。ここで失礼させてもらおう」

客室にパト達を入れたガルムはすぐに出ていってしまう。

まだ皇子はいないようだ。

息は整ったが、緊張でパトは体を震わせる。

王族と会うことなんて滅多にない。それなのに突然招待された。パトの緊張感

マックスである。

部屋のあるソファで固くなっているパトの隣で、ヤマブキはお茶を啜る。この状態をヤマブキは理解しているのだろうか。

そうパトが思っていると、扉がノックされ、二人の人間が入ってくる。

一人は金の短髪に青色の王族衣装を見に纏う男性。それと褐色の肌に赤い眼鏡をかけた女性。

「初めまして、パト・エイダー君。そしてヤマブキ君。私がジョージ・フェリスだ」

第17話 【失ったもの】

世界最強の兵器はここに!?! 17

著者：pirafu doria

作画：pirafu doria

第17話

【失ったもの】

「私がジョージ・フェリス。そして妻のアイリスだ」

ジョージとアイリスが一礼する。

それに続き、パトも急いで頭を下げる。

「は、初めまして！ パト・エイダーと申します!!」

パトは額に汗を垂らしながら、隣にいるヤマブキの姿を見る。

「……!？」

そこには頭を下げるでもなく、ジョージ達の姿を見るでもなく。テーブルに出されたお菓子をパクパクと食べ続けるヤマブキがいた。

「ヤマブキさん!!」

パトはヤマブキを止めると、頭を下げさせようとするが、ジョージがそれを止めた。

「まあまあ、彼女も何か失っているのだろう。謝らなくても良い。それにこちらが一方的に君たちに会いたくて招待したんだ。そこまで緊張しなくても良いよ」

そう言う、ジョージ達は部屋に用意されたソファに腰をかける。

「座りたまえ」

ジョージの言葉に従い、パトもヤマブキを連れてジョージ達の向かいのソファに座る。

「すまない。ここまで登るのは大変だっただろう。本当なら転移魔法で登ることもできたのだが、少々面倒なことになっていてね」

ジョージが言っているのは、この部屋に来るまでの階段のことだろう。

転移魔法とは人物や物を特定の場所から移動させることができる魔法だ。おそらくは一回からこの回まで一瞬で移動できたと言うことだろう。だが、面倒なこととはなんだろう。だが、王族の話でもあるので、下手に首を突っ込むことはしない方がいいだろう。

どう返事をしようか、焦ったパトはテンパってしまう。

「い、いえ!! 足腰が鍛えられて良かったです!! ありがたいくらいですよ!!」

「そうか? なら今度から私も使ってみようかな。私は王族として剣術を習っているのだが、なかなか結果が出なくてな。階段を使う……明日、いや、今日からやるか」

ジョージはそう言いながら、微笑む。

なんだが、冗談……だと最初は思ったが、彼の表情を見るとそんな気はしなくなる。

彼は生まれつき体が弱く、才能にも恵まれていなかったと聞く。それでも人一倍努力し、今では優秀な次期国王候補の一人となっている。

「き、きつと、成果がで、でますよ」

「そうだな」

そして彼から滲み出る優しき。それには全くの裏表がない。そう感じるような言葉、表情、態度。

そのせいだろうか。この皇子には不思議と心を許せてしまう。

それに隣にいるアイリスという女性。彼女も言葉こそは発しないが、同じように笑みを浮かべ、優しい表情を作っている。

なんだか、この二人は似ている。そう、思えるのだ。

「おっと、すまない。私は君たちももう少しお話をしていたいのだが、そう時間もない。早速本題に入らせてもらおう」

ジョージはさつきまでの雰囲気とは一変し、真面目な表情になると、ヤマブキに目を向けた。

「彼女は何を失ったのか。教えてもらえるかな？」

「何を失った？」

パトは思わず聞き返してしまう。

「君は知らないのか？ いや、知らないのも当然か、これは私も最近知ったことだしな……」

ジョージは独り言を呟くと、しばらく考え込み。アイリスと目を合わせた後、頷き合うつと、パト達の方を向く。

「パト。君は終焉の物語を知っているかい？」

「え、あ、はい」

終焉の物語。それは大昔から伝わる予言である。

天界に住む神族によって伝えられたこの話の内容は世界の滅びを伝えた物語。そしてそれは天族からの、我々、人間がその滅びを避けるために、対策を講じろ。というメッセージでもあると言われている。

話の内容は大雑把にこうだ。

ある日、天界に住む一人の人間が、予言を見た。それは世界の滅びの姿。

無色のエネルギーが、次々と世界を飲み込んでいく。夢を叶える大樹、夜のみの存在する毒の地、そして私たちの世界。

そして滅びゆく世界に立つ、三人の姉妹。

「その滅びを避ける。そのために君の元にヤマブキ。そして私の元にアイリスが送られてきた」

「ヤマブキさんが……」

パトは理解が追いつかず、その場でヤマブキを見る。だが、見たところでヤマブキは何かに応えることはしない。

「アイリスとヤマブキはこの世界の人間ではない」

「え!？」

「別の世界から送られてきた人間。君も少しは聞いたことがあるだろう」

70年前に異界より送られてきた異世界人のことだろうか。

70年も昔、突然として多くの異世界人がこの世界に現れた。その理由は謎が多いが、多くの者がこの世界に貢献し、様々な物を残していったと聞く。

「じゃあ、ヤマブキもですか？」

「ああ、そしてこれは70年ぶりの異世界人だ」

70年ぶり、それまでは異世界人は送られてくることはなかった。

「それなら他にも……」

「詳しくは知らない。だが、一人知っている。エンドというアングレラ帝国の大賢者を務めている者だ。しかし、今は他の異世界人よりも大事なことがある」

「大切なことですか？」

「そう、ここから先は物語にはない。私の友人が調べた情報だ」

物語にあつた通り、予言を見た天族は、その予言が事実にならないために、その予言に映った三人の姉妹を恐れた。

そしてある結論に辿り着いた。それがその三人の姉妹がこの世にいないければ、この予言は起こり得ない。

その天族は権力を使い、同じ天族であり、悪名高い三姉妹が予言の人物ではないかと

考え、そしてその姉妹の暗殺を計画する。

しかし、それは失敗し、三姉妹は下界へと降りてくる。

下界に降りることのできない天族は、その三姉妹の殺害を下界の者に託した。

それがちょうど70年前。

しかし、三姉妹も天族。天族の力は強大で普通の人間では手に負えない。

それにこの時に天族の中で、断りの外の者でなければ、予言を打破することはできないのではないかという意見が出た。

そのため、天族は異世界人に力を与え、討伐へと向かわせることにした。

しかし、一人の異世界人が姉妹の見方をした。そして他の異世界人や仲間を連れ、天族に牙を向いたのだ。これによって、天族は大きな損害を受けてしまった。

そして70年が経ち、牙を向かない異世界人を作るため、天族は力を蓄え、あることを行なった。

それが鍵（ロック）。これは70年前の異世界人やその仲間達にも行われたもの。

鍵（ロック）はあらゆるものに欠けることができる。

それにより、アイリスとヤマブキにはかけたものがある。

「その鍵（ロック）をかけられたのが、アイリスは言葉なんだよ」

「言葉……ですか？」

「ああ、アイリスは喋ることができない。言葉を奪われてしまったんだ。酷い話だろ。三姉妹を倒したためなのに、なぜ、アイリスから言葉を奪う必要があったのか」

そう言われればそうだ。なぜ、ロックをかける必要があったのか。

「そしてそうとするなら、彼女も何かを失っているだろう」

「ヤマブキさんも……」

だが、それをヤマブキは語ろうとはしない。パト達にはそれを知る方法はない。

「それにもう一つ、今回異世界人を送るにわたり、天族は少し変わったことをしているようだ」

そう言うと、ジョージはパトとヤマブキを交互に見る。

「君達はお互いに同じ魂を持つもの。そして、その者を守るように天族は命令している」
それを聞き、パトはヤマブキに初めて会った時のことを思い出す。

ヤマブキはパトに会った時、平和プロジェクトと言っていた。そしてそれを行うために、パトを守る命令があると言葉にしたのだ。

「そういえば、ヤマブキもそんなことを……」

「これに何の意味があるのか……私にも分からない。だが、ヤマブキやアイリスはその命令に逆らえないように魔法をかけられている」

「魔法ですか!？」

「強力な魔法だ。どんな術者にもこれを解くことはできなかった。そして逆らった時に何が起きるのか……それも分からない」

パトはヤマブキの方へ顔を向ける。

ヤマブキはパトを守るためにと、出会ってからずっとそばにいた。それがなんのためなのかは分からなかった。

しかし、今やっと理解することができたのだ。

「天族がなぜ、異界人に俺たちを守らせるのか、その理由は分からない。だが、一つだけ、

私には分かっていることがある」

ジョージは立ち上がると、窓の外を見つめる。

「私達には必ず試練が訪れる。その覚悟が必要だということを……」

??????

??????

パト達を帰らせた後、ジョージは妻のアイリスと共に紅茶を飲んでいた。

「アイリス。君は彼らについてどう思う？」

ジョージはアイリスに言うと、お互いに見つめ合う。

会話のできないアイリスだが、ジョージとだけは心を通じ合うことができた。

それがお互いの惹かれあつた理由でもあり、支え合える理由なのかもしれない。

「そうか。君もそう思うか……なら、いずれは私達と対立することもあるかもしれない……」

ジョージは窓から外の風景を見下ろす。

王国全体を見通せる絶景。ここからは王国の全てが見える。

「今は様子を見るとしよう」

多くの人々が行き交う街。そこに小さく見える後ろ姿。いつしかその姿は人の波の中に吞まれ、見えなくなる。

そんな見えなくなった背中を探しながら、ジョージはアイリスに呟いた。

「私は君に感謝してる。兄にも弟にも劣った私は自信を失っていた。だが、君がそれを取り戻させてくれた。必ず君の失ったものも取り戻してみせる。この私が……」

第18話

【動物姫との骨の魔術師】

世界最強の兵器はここに!?! 18

著者：pirafu doria

作画：pirafu doria

第18話

【動物姫との骨の魔術師】

パト達と別れたオルガは、馬車を引き連れ宿へと向かっていた。

パトに連れて行ってもらえなかったことは心残りだが、それでも頼まれたことはやり遂げるしかない。

村へと持ち帰る荷物を大切に見守る。それがオルガの課せられた任務だ。

だが、先ほどから少し気掛かりなことがある。それはつい数分前からずっと付けてきている子犬の存在だ。

オルガは犬が苦手だった。

それは小さな頃からずっとで、冒険者になり、そして洞窟で暮らしていた時も同様である。

しかし、骨の姿になってから、オルガはよく犬に好かれるようになってしまった。いったいこの肉のない骨の体のどこにすられているのか分からない。

「いったいどこまで付いてくる気だ……」

オルガは警戒しながら、馬車を進ませる。

しかし、その足取りは徐々に速くなる。

び、ビビってなんかないぞ。ただ、ちよつと速く進みたくなっただけだ!!

そう心に言い聞かせ、馬車を進めるオルガであった。そしていつしか後ろに子犬の姿はなく、前を向くと……

子犬が目の前に立っていた。

「な、なあ、お前……どうやって前に？」

子犬は目線を動かし、路地の方を向く。

「もしかして……近道してきた？」

子犬は縦に首を振る。

てか、この子犬言葉を理解しているし、めっちゃよくそ頭が良い。そして……とても執念深い。

子犬はオルガに向かって飛びつく。

「ひっい!!」

オルガの事を舐めまわし始めた。

「やめ! やめろー!! 俺を舐めるな!!」

オルガは子犬を引き剥がそうとするが、子犬はうまくすり抜けて避けていく。

「い、いの!!」

何度やってもするりと抜ける。まるでこちらの動きを先に読んでいるようだ。

「無駄ですわ。チャロはとても頭が良いの。そう簡単には捕まえられませんのよ」

子犬に舐め回されるオルガを見ながら、頬を膨らませる女の子。

「チャロ。やめなさい。そんな汚い人間舐めたって何も出ませんわよ」

赤髪に真つ赤なドレスを着た少女は不機嫌そうにオルガを睨んだ。この子が子犬（チャロ）の飼い主だろう。

「だったら、早くやめさせてくれ！」

オルガは少女に助けを求める。

すると少女は首を伸ばし、オルガを見つめる。

「青……本当に辛いみたいね」

青？ 何を言っているのだろうか。だとしてもそれより先に！！

「分かつてるなら、助けてくれー!!」

チャロから解放されたオルガは、タオルでベトベトになった体を拭く。

「おい。お前が飼い主ならしつかり教育しろよな」

「教育なんて必要ないですわ。チャロは頭が良いの。普段なら! あんなことはしないわ。なんでアンタなんかを突然舐め出したんだか……」

それはこつちが聞きたい。しかし、教育の出来ない子供にこれ以上文句を言っても疲れるだけだ。

もう出会わないことに期待するしかない。

「そういえばあの馬車の荷物はなんですか?」

少女はオルガの連れている馬車に興味を持つ。

「ん、あれか。あれは大事なもんだ」

「大事なものの？ あれの貧乏臭い魔道具や食料が？ どこかの村の荷物じゃないの？」

いちいち言葉の多い子供だ。

「ああ、そうだ。あれは俺の仲間から受け取った荷物だ。こいつはあいつの大切な村に必要なもの。だから、あいつはこれを大事にしていた。なら、俺もこいつを大事にしなくっちゃならない」

「ねえ、小腹空いたから一つ食べていい？」

「言つたそばから!! やめろ!!」

馬車に積まれた食料を食べようとした少女を、オルガは止める。

話を聞いてもそんな行動をする少女にオルガは苛立ちを覚えるが、怒ると素直にやめてくれた。根は悪い子ではないのだろうか。

とはいえ、この少女にかまっている必要はない。

「じゃあな。俺はあいつらを待たなくっちゃいけないんだ。ガキは公園で遊んでろ」

そう言い、オルガは少女を追い払おうとする。しかし、少女は言う事を聞かず、子犬のチャロと共に後ろをついてくる。

「おい。いつまで付いてくる気だ？」

「あなたについて行ってる気はないわ。私が行くところにあなたも言ってるだけよ」

少女はそっぽを向くと、オルガの前に出て先を歩き出す。

確かに行く方向が同じだっただけのようだ。しかし、それはいつまでも続く。

「あなたこそ、いつまで付いてくるのよ」

「知らねーよ!」

オルガは今夜泊まる予定の宿に向かっていただけだ。パトともそこで合流するように約束した。

昨日は王国の中心近くで泊まったが、夜になっても賑やかな王国。なかなか寝付くことができなかった。そのため中心街から外れた王国の中でも静かな土地にある宿を予約した。

周りにあるのは高い建物の並んだ王国の中では珍しく、三階建ての小さな民家風の建物が中心で、森林や畑も存在している。

王国の中であるため整備はされているが、それでも何も無いこの土地。

「お前は一体何の用なんだ?」

そんな土地に犬を連れた派手な格好をした少女。少し似合わない光景だ。

オルガが不思議に思っていると、オルガ達が泊まる予定の宿の扉が開き、そこから白髪のお爺さんが出てくる。そのお爺さんを見ると少女は嬉しそうにお爺さんの元へと駆けていく。

「パルムスさん!!」

「ん、ああ!」

少女はお爺さんに抱きつく。

「なんじゃ、また来たのですか……」

お爺さんは優しい笑顔で少女を向かい入れる。

「ここはあなたの来るような場所ではないと何度言ったら分かるのですか……」

お爺さんは軽く叱りつけるが、どちらかって言うとう嬉しそうだ。

そんなお爺さんに抱きつきながら、少女はお爺さんの顔を見上げる。

「ねえ、あの子達きてる？」

??????

??????

「どうぞ」

オルガは宿にある小さな食堂でお爺さんに出された渋いお茶を流し込む。

「あの子は？」

そしてさつきから見当たらない子犬を連れた少女のことをお爺さんに聞く。

「ああ、ベアトリス様なら外でお話しされておる」

そうして食堂にある巨大な窓から外を見る。そこにはベアトリスと呼ばれた先程の少女の姿があつた。

少女の周りには犬・猫・小鳥など様々な動物が群がり、中には熊などの凶暴そうな動物の姿も見える。だが、少女は怯えることなく、それどころか動物達と中良さげに話していた。

変わった子だとは思っていたが、動物と話すとは……。

オルガがそう思い、不思議な顔で少女を見てみると、お爺さんは食器を洗いながら語る。

「ベアトリス様は固有魔法『色付き心（アングル・クルー）』という魔法を持っている。それによりあらゆる動物の感情を読み取ることができるだけじゃよ。そしてそれが人間と距離を置く理由ともなった……」

お爺さんはそう寂しそうにベアトリスを見る。

「ベアトリス様はあの能力に苦しめられてきた。相手の感情を見れる能力とは時に武器になり、時には自身を傷つける爆弾にもなる。私はあの子が不憫でならない」

お爺さんの言葉だけでは少女の能力について詳しくはわからない。だが、オルガは知っている。力は時には自分にも襲いかかってくる事を……。

??????

??????

少女に少し興味を持ったオルガはお茶を飲み終わると、宿を出て動物と戯れるベアトリスの元へと行ってみる。

オルガに気づいた動物達は少女の後ろに隠れる。警戒されているようだ。

「何よっ？」

動物達との時間を邪魔されたベアトリスは不機嫌に頬をふくらわせる。

「動物と話してて楽しいのか？」

「ええ、楽しいわよ」

「寂しくないのか？」

「私にはこの子供がいるんだもの。寂しくなんかないわよ」

そう言いベアトリスは後ろに隠れている動物達を抱きしめる。

少女はオルガに背を向けたまま、

「それを言いに来たの？」

そう言った。その少女は小さな手を震わせながらも、強がつて見せる。

「私は人間は嫌いよ。嘘をつくもの」

人は嘘だらけ。それはベアトリスがこの能力で知ったこと。表の裏。人には表面上の感情と、裏に隠された真の感情の二つがある。

ベアトリスの固有魔法『色付き（アングル・クルー）』はそのうち、内側に隠された感情を色として見ることができる。

赤は楽しい。青は悲しい。桃は照れている。緑は心配。などなど色で相手の感情が表される。しかし、それはベアトリスにとって辛い現実を突きつけるものとなる。

相手の気持ちや考えを考慮せず、感情を暴いてしまうこの能力は悪意だけではなく、良心にも影響を及ぼす。

裏に隠された悪意を感じるだけでも辛かったベアトリスだが、嘘の裏に隠された良心に気付いてしまうことの方が辛く思えた。そしていつしか心を閉ざした。

本当の心に嘘をつく人間ではなく。素直な動物とのみ付き合うようになっていった。

「俺だったら、寂しいけどな……」

オルガがそう呟いた時。宿の奥から爆発音が響いた。

「な、なんだ!?!」

爆発が聞こえたのは馬車を置かせてもらっていた倉庫の方。もしやと思いオルガが走ると、そこには燃える馬車と村に運ぶはずだった荷物があつた。

「そ、そんな……」

パトに任された荷物。それが……。

すぐ側にはベアトリスもいる。だが、ベアトリスも状況が分からず混乱しているようだ。

そんな時、さつきまで動物と戯れていた場所から、動物達の悲鳴が聞こえてきた。

何が起こったのかと急いで駆け寄ると、そこには網に捕らえられた動物達がいた。

そして囚われた動物達を見て、腕を組み偉そうにしている二人組の男。

「よく来たな。お嬢様!!」

「ブハッー! 情報は本当だったみたいだな」

ベアトリスを見て、嬉しそうにしている二人。

「姫さんよう、お前を捕まえて、ガッツリ身代金を頂くぜ!」

だが、その男達は俺たちの後ろから現れた鎧の男に後退り、

「この情報も本当みたいだぜ」

「ブハッー！ 元十聖の老ぼれだろ。パルムス・ソーヤ！」

それは宿屋のお爺さん。似合わない鎧を着て、腰には剣をぶら下げている。

「姫様には手出しはさせません。私が相手をしましょう」

二人の男は武器を手にして、お爺さんを警戒する。二人が手にする短剣には少し魔力を感じる。

「ブハッー！ アプー、俺が援護する。パルムスを仕留めるぞ」

「了解。ミニバン!!」

二人はパルムスに襲いかかる。パルムスは勢いこそはないものの、老いた剣術で二人の攻撃をいなす。

「あの爺さん、強いな」

「当たり前よ。パルムスは元十聖なのよ。そして私を支えてくれた唯一の人」

十聖ならオルガも知っている。70年前に会ったことがある。オーボエ王国最強の十人の騎士。選ばれた者しかねない称号だ。

王国のために尽くし、剣で王国の敵を討ち滅ぼす。

そしてその実力は本物だ。並の兵士ならどんなに背伸びしようと勝つことはできない。

そんな元十聖であるお爺さんならその強さにも納得できる。そしてあの盗賊にも簡単に勝つことができるだろう。普通ならば……。

二人の盗賊が持つ武器。そこから感じる魔力。それはなんというか泥のように粘っこい嫌な魔力が付いている。

そしてオルガの感じていた嫌な予感は的中する。

パルムスは二人の攻撃を剣で弾き、受け流しているが、徐々にパルムスが息切れをし始める。ただ単に疲れている負けではない。パルムスの魔力が少しずつ減っていき、それと同時に二人の持つ武器の魔力が増していく。

やがてパルムスは剣を地面に刺し、ふらつき始めた。

「どうということじゃ、私の魔力が吸われている」

「ふふふ、ようやく気づいたようだな。パルムス!! そう、コイツはあの『混沌の色（カオ・クルール）』から買った魔法の武器さ!!」

二人の持つ剣には凄まじい魔力が満ちている。それだけパルムスの魔力が高かったということだ。

「ブハッー! コイツがあれば、十聖だって怖くねー! このまま死んでもらうぜ!!」

二人はパルムスに斬りかかる。しかし、それを止めるようにベアトリスが飛び出した。

そしてパルムスを庇うように立ち塞がる。

「やめて！ 狙いは私なんですよ！ なら、私を連れて行けばいいのよ！ だから、パルムスをこれ以上傷つけないで！」

その姿を見て、二人は動きを止める。

「ブハッー！ いいねー良い子だ」

そしてパルムスに小さな声で謝ったベアトリスは、二人の元へと近づいていく。

二人もベアトリスを拘束する道具を取り出す。そして目の前に来たベアトリスに拘束器具を取り付けようとするが、

「待てよ……」

二人の男に立ち塞がる仮面を被ったフードの男。

「俺の大事な馬車を焼いた落とし前、つけてもらおうか」

第19話 【エリスの目的】

世界最強の兵器はここに!?! 19

著者：p i r a f u d o r i a

作画：p i r a f u d o r i a

第19話

【エリスの目的】

「なんだよ？ あのとろつちー馬車を壊したことを起こってんのか？」

「ブハッー！ それなら謝るぜ。姫様とあの動物どもを引き離すためにやったんだからな」

二人の盗賊はオルガの肩を叩き、そのまま通り過ぎようとする。しかし、オルガは鎌を取り出しそれを止めた。

「だから今、お前たちに仕返しをする」

「ブハッー！ 俺たちは忙しいんだよ！ 後にしやがれ！」

「そうはいかないんだよ。今だ！」

オルガはそう言うと、ベアトリスを後ろに下がらせた。

「姫様を守ろうつてのか？ あのジジイがやられるのを見てただろ？ 素人にやゝ分からねーかもだが、あのジジイはそれなりに強いんだ。それを倒した俺たちにてめーができる？」

オルガは鎌をくるくると回した後、2人の盗賊に刃を向ける。

「なら、お前らが分かってないことを教えてやろうか。お前らよりも俺の方が何倍も強い」

「ブハッー！ 何言つてんだ！ 俺たちの方が強いに決まってる！」

盗賊のアブーとミニバンは標的をオルガに変える。そして手にした魔法の短剣をオルガに向けた。

その間にベアトリスはふらつくパルムスに肩を貸そうとするが、パルムスはそれを首を振って拒否する。そしてパルムスは持っていた剣をベアトリスに渡し、囚われた動物たちを解放するように促す。

ベアトリスは剣を手に動物を包む縄を切りにいく。

「ブハッー！ おい、動物が解放されちゃうぞ！」

「そうだな。パルムスも厄介だが、あいつらも厄介と聞く。急いでコイツを片付けるぞ」

！」

「ブハッー！ 了解!!」

アプーとミニバンは左右に分かれ、オルガを挟むような態勢になる。

「ブハッー！ 俺たちに抵抗してこと、後悔させてやるぜ！」

最初にアプーが切り込んでくる。それに続くようにミニバンもオルガを挟み込む。

オルガは空中にいくつか結界を作ると、その上に飛び乗り、階段のようにして空へと逃げる。

「なに!？」

「どういうことだ？ なんだあの魔法は!？」

オルガはそのまま空中を跳び回った後、鎌を回しながら、二人を適当に攻撃する。

オルガは鎌を大振りに回し、二人の様子を見るような簡単な攻撃をしているが、それでもアプーとミニバンは苦戦しているようだ。

「おいおい、この程度か？」

「う、うるせー！」

「ブハッー！ なめんじゃねーよ！」

アプーとミニバンはそう言うのと、鎌のリーチ的にオルガに攻撃を当てることができないと思ったようで行動を変えた。

狙い始めたのはオルガの持つ鎌。しかしそれは釜を破壊するなどが目的ではない。単に鎌を探検とぶつけようとしてくるのだ。

二人はオルガの攻撃に押されながらも、地道に釜に短剣をぶつけていく。そしてある程度それが繰り返されている最中。パルムスがオルガに叫んだ。

「だめだ！　その武器に触れてはいかん！」

しかし、それを聞いたアプーとミニバンは笑う。

「もう遅い！」

「ブハッー！　そう！　これだけ魔力を吸い取れば、動くことはできないだろう！」

二人は自信満々にオルガを睨む。しかし、オルガは平然と立っていた。

「魔力？　そんなものは一欠片も吸われちゃいない」

それを聞いた二人は驚きの顔を浮かべ、そして自身の見る短剣を見る。

しかし、その短剣にはオルガに攻撃を仕掛ける前と同じ程度の魔力しかなかった。

「な、なぜだ!!」

「そんなものネタは分かっていた。だから防御させてもらったぜ」

オルガは手のひらに小さな結界魔法を作り出す。

「そ、そんなものがなんだって言うんだ?」

アプーとミニバンは理解できていないようだ。しかし、戦いを見ていたパルムスはふと気づく。

「そうか。結界魔法でガードしていたと言うことか!」

「そう。その魔法の武器。それは魔力を吸い取るんだろ。だが、魔力を吸い取るためには条件がある、それは……」

オルガは二人に鎌を向ける。

「吸い取る対象に触れること。それは対象自身じゃなくても構わない。衣服、武器からでも可能となる」

それを聞いていたアプーとミニバンは不満そうな顔をする。

「ブハッー！　そうさ。そしてテメーはカマで俺たちの攻撃を防いだ！　なのになぜ魔力を吸われねー！」

そんな二人にオルガは結界を見せるが、二人は首を傾げる。その様子を見ていたパルムスが口を開く。

「結界魔法で防いだということか」

「そう言うことだ」

オルガは鎌と剣がぶつかる瞬間、その一瞬だけその場に小さな結界魔法を作り、それで直接武器がぶつかり合うことを防いでいたのだ。

「だが、それができるとしたら、かなりの魔法計算力か、固有魔法のみ……お主は一体……」

パルムスはオルガに疑問の眼差しを送る。しかし、オルガはそれに応えることはない。

「こ、これはヤバいか？」

「ブハッー！ まだだ！ まだこつちにはパルムスから吸った魔力がある。そいつを使えば、このヤローもやれるはずだ!!」

そう言い二人は剣を構え、パルムスから吸った魔力を剣に集中させる。

「ブハッー！」

「くらえやー！」

二人は魔力の満ちた短剣でオルガに剣を振り下ろす。しかし、オルガはそれを悠々と躲し続ける。オルガは鎌でガードすることも、結界で防ぐこともしない。それなのに二人の攻撃は全くオルガに当たる気配がない。

「な、なぜだ。なぜ、当たらない！」

「どれだけ強力な武器を持とうと、持ち主がそれに見合った実力がなければ、その武器は本当の価値を発揮できない」

そして躲し続けていたオルガは鎌で軽く二人の頭を叩く。

「痛い！」

「ブハッーっ!？」

二人は頭を抱えその場に蹲る。

「お前らは殺す価値もない。さっさと帰な」

オルガはそう言うと、ひっそりのパルムス達には見えないように、仮面を外してアブーとミニバンにのみ骸骨の顔を見せた。

それを見た二人の顔は青くなり、武器を持つとそそくさと逃げていく。

「こ、こいつは敵わねー!」

「ブハッー! 逃げろ!!」

背を向けて逃げる二人。そんな二人の前に一人の少女と動物たちが立ち塞がった。

「待ちなさい！　あなた達!!」

阻まれた二人は足を止める。

「今回は勘弁してやる！」

「ブハッー！　そうだ！　次こそは……」

そう言いかけた時、ベアトリスの顔を見て二人は固まった。

「次……そう。そんなこと私が許すと思う……」

ベアトリスの前に動物達が牙や爪を輝かして立ち塞がる。

「この可愛らしい私を誘拐したくなる気持ちは分かるわ。でもね。私の大事なこの子達にまた手をあげると言うのなら、そうしたいと思わないくらい。ボコボコになりなさ

い!!」

動物たちが一斉に二人に襲いかかる。

そんな様子をオルガは何もできずに見守る。

二人の抵抗はしているが、あの動物達に手も足も出ないようだ。しかし、それが少しオルガにとっては不思議でもあった。

魔力が少し回復したのか、パルムスがオルガの横へと歩いてきた。

「あの動物達。彼らは小さい時群れを追い出された動物なんじゃ」

多くのモンスターの蔓延るこの世界。この世界で野生の動物が生き抜くためには群れというのものがとても重要視される。

群れを成し、危険をさせ、生き残る。それがより強力な力を持ったモンスターから身を守る術。

動物もまた人間と同じで魔力を持って生まれてくる。

しかし、時折その中でも飛び切り高い魔力を持ったものが生まれることがある。

だが、その個体はよく群れから外される。その理由はより多くの魔力の使える動物は、多くの魔素を放つからだ。モンスターは魔素を好み襲ってくる。そのためそのような個体は群れから追い出されてしまうのだ。

「そんな動物達をベアトリス様は看病し、連れてくる。もしかしたら、自分と重ねているのかもしれない」

パルムスはそう言うと、剣を握り彼らの元へと行く。

「さあ、お前たち!! もう二度と来るなよ! また来たらこの程度では済まないからな!」

パルムスの言葉にアプーとミニバンは背筋を伸ばして怯える。

「はい!!」

「ほら行け!」

パルムスが二人の盗賊を追い出す。とはいえ、あのまま動物たちにやられ続けていたら、あの盗賊たちが死んでいたかもしれない。そのため助けたとも言える。

それだけ強い動物たちなのだ。そしてそれと仲良く接するベアトリスも特別な存在なのかもしれない。

??????

??????

騒ぎも収まり、オルガは壊れた馬車と荷物の下へと行く。

盗賊たちがベアトリスと動物を引き剥がすために荷物は燃やされた。このことをどうパトに説明したら良いだろうか。そのように悩んでいると、ベアトリスがいつの間にかオルガの隣に立っており、喋りかけてきた。

「まあ、これくらい。弁償してあげても良いわよ」

「え？」

「王族の私からすればあの程度の魔道具なんて安いものなのよ。……それにあなたのおかげで助けられたことだし……」

ベアトリスはそう言うと、オルガに馬車に積んでいた荷物を聞いてくる。しかし、オルガにとってそれ以上に気になることがあった。

「そういえば今？　王族って言った？」

「あなた前でしょ。私はオーボエ王国第二皇女ベアトリス・フェリスなのよ」

「……」

??????

??????

久しぶりの王立魔法学園。シーヴに連行され学校に来ることになってしまったエリスであった。

「さあ！ エリス先輩、授業を受けましょう!!」

「受ける必要なんてないよ。私全部分かってるし……」

「いや、でも出席日数が!!」

「それも問題ない。校外学習ってことにしてもらってるから」

「……………」

エリスが淡々と断つていくと、だんだんシーヴの視線が下へ向いていく。

シーヴはエリスにとって一つ下の後輩。学年が違うため受ける授業が重なることはほぼないのだが、出会う度に寄ってくる。

入学の際に色々あつたし、その時に好かれてしまったのだろうか。

エリスと一緒に授業を受けてくれないと知ったシーヴは明らかに落ち込む。流石にその様子を見て罪悪感に駆られたエリスは、一つだけ授業と一緒に受けても良いと伝える。すると、シーヴは飛び上がるように喜ぶ。

シーヴもエリスと同じ特待生の生徒だ。真面目で堅物。勉強が友達のような人間だ。そんな彼が子供のようにはいしゃいであるんだ。少しは真面目に受けてやろうと思うエリスであつた。

??????

??????

授業を受けていると、周りからの目線が気になる。

隣に成績優秀なイケメン後輩のシーヴがいるのが一つの原因かもしれないが、それ以上に私がいるのが問題なのだろう。

エリスは周りをキョロキョロと見渡す。それを見たシーヴがエリスの耳元で話す。

「どうしたんですか？」

「ん、視線がね」

「まあ、エリス先輩がいること自体、珍しいですからね……」

まあ、なんとなく知ってはいた。

自分で言うのもどうかと思うが、天才魔法使いと言われる人間と一緒に授業を受けているのだ。それは気にならないはずはないよね。

エリスはまわりに注目されていることになんだか嬉しく感じる。

自分の力が認められてる。そう感じるからだろうか。

授業を終えた後、エリスはシーヴと別れある教室へと向かっていた。

本来ならもう少し経ってたら来る予定だったが、少し早くなってしまった。しかし、それでも……。

扉を開けると、ドーナツ状のテーブルに先生たちが集まって座っていた。

「え、エリスくん……早かったね」

エリスがやってきたことに気づき、先生たちの顔色が一気に変わった。

「そうですね。アスパル先生」

「さ、さあ、こちらの椅子にどうぞ」

扉に一番近い席に座っていたアスパル先生が立ち上がり、エリスに席を譲る。

「ありがとうございます」

エリスは譲られた椅子に遠慮なく座る。そして腕を組み先生たちを睨みつける。

「それで例の件はうまく進んでいますか？」

エリスのその言葉に先生たちは肩を震わせる。そして怯えたアスパル先生が答える。

「そ、それがまだ……」

「そう、なら早くしてちょうだい。私がこの学校にどれだけ貢献してる思ってるの？」

先生たちの額からは多くの汗が流れ落ちる。

「私は真実が知りたいの。そのためにも……」

奴隷解放編

第20話

【消えた村】

世界最強の兵器はここに!?!?20

著者：p i r a f u d o r i a

作画：p i r a f u d o r i a

第20話

【消えた村】

パトたちがオルガと合流するとそこには立派な馬車があった。

「なにこれ？」

「色々ありまして……」

中に積まれた魔道具も最初に買ったものよりも数倍高いものと置き換わっている。宿のお爺さんも事情を知っているようだが、無くなった負けでもないのです、このままにしておくことにした。

宿で一晩過ごし、翌朝早速王国を出ることにした。

ヤマブキに王国で何かやりたいことはないかと聞いたが、何も無いと言われた。オルガにも同様のことを聞いたが、すでに色々済ませたようだ。

本来ならば、オルガの仲間の搜索も手伝うために情報収集をしたいのだが、城に行つたことで時間がなくなってしまった。

王国の高い門を潜り、オーボエ王国を後にしてサージュ村に帰ろうとすると、道の先にマントを羽織った魔法使いが待っていた。

「エリス!? なぜここに?」

そこで待っていたのは、王立魔法学園に戻ったはずのエリスであった。

「なんでいるんだ？ 学校はどうした？」

パトが心配そうに尋ねると、エリスは胸を張って答える。

「やるべきことは終わらせてきたよ。一緒に帰りましょ」

そう言いエリスは馬車に乗り込んできた。

用事は済ませたようだが、学生としてそれでいいのだろうか。疑問は残るが、こうなってしまったエリスは止めることはできない。

パトは諦めてエリスを連れて、村へと帰ることにした。

??????????

??????????

王立魔法学園。優秀な魔法の才能に長けた若者の通う学校。その学校で一人の生徒が走り回っていた。

「エリス先輩！ どこですか!!」

彼の名前はシーヴ・レーベル。この学校に特待生として入学してきた学校でも特に優れた生徒である。

走り回る彼を女子生徒たちは目をハートして見つめる。

「どこに行っちゃったんですかー!!」

そう言い彼は職員室の扉を開ける。そこには数人の教員の姿がある。

「どうしたね？ シーヴくん」

「エリス先輩はどこですか？」

その後、風水で寂しく昼食を食べていたと聞く。

??????????

??????????

王国に行く途中で盗賊を退治したことにより、村に帰る道中はなんの問題もなく進むことができた。

王国の兵士たちが手を出せなかったエンザンが捕らわれたことにより、山の盗賊の統率が薄わり、殆どの盗賊団が王国に逮捕された。

なんの問題もなく、村へと帰ってこれたパト達であつたが、直ちに違和感に気づいた。

「なんか、静かだな……」

時刻は正午、いつもなら多くの村人たちが働いて賑わっているはずなのに、人の声もない。

そしてそれと同時にオルガもあることに気づく。

「結界に穴が開けられてる……」

オルガは自身の張った結界に穴が開いていることに気がついた。
そしてエリスもあることに気づく。

「まだ魔力が残像してる。警戒して！」

村に漂う僅かな魔力を察知して、エリスは警戒を強める。

何が起きているのかはわからない。しかし、確実に言えるのは、ただ事ではないと言

うことだ。

パトたちは武器を構え、警戒しながら村の中へと入る。村には争った形跡はない。しかし、不思議なことに村人の姿は誰一人としてない。

「父ちゃん……」

無人の村にパトは不安が高まる。

パトの不安そうな顔を見たエリスは、周りを見渡す。

「驚かせようとどこかに隠れているのかも。手分けして探しましょ」

「ああ……」

エリスの提案にパトは覇気のない返事をする。

ドツキリなんかなら、もう出てきていても良いはずだ。それなのに出てこない。

パトの頭の中には最悪の事態が想像されていた。

「……パト」

そんな姿にみんな気持ちが落ち込んでいく。しかし、

「元氣を出しなさい！」

エリスがパトの背中を叩く。

「あなたはここの村長になる人でしょ。まずあなたができることはない？」

エリスにそんな言葉をかけられたパトの視線は徐々に上にいく。

その途中、エリスの手が震えているのが見えた。

エリスはパトよりも魔法の才能に優れている。見た目では争った様子はない。しかし、残像する魔力には気付いていた。

事態の最悪さはエリスの方が理解している。

「……ありがとう、エリス」

パトは深呼吸をし、気持ちを落ち着かせる。そして周りを見渡す。

「何か手がかりがあるかもしれない。村の中を探索しよう」

パト達は効率を良くするために、二手に分かれることにした。

「まだ何が起るかわからない。気をつけろ」

「ああ」

オルガとエリス。そしてヤマブキとパトの二手に分かれて、村を探索する。
パトはまず自身の家へと向かう。

パトの家は村の北の方にある丘のすぐそば。家には村長会議から帰ってきた父親がいるはずである。

広場を抜け、パトの足は徐々に速くなる。

「父ちゃん!!」

扉を開き大声で叫ぶが、返事はない。

家の中を探し回るが、父親の姿は見当たらない。リビングのテーブルには目玉焼きとトーストが置かれている。

「いったいどこ……」

目玉焼きとトーストは生暖かい。時間はさほど経過していないと考えて良いだろう。しかし、食べかけでどこかに出かけるなんてことはあるだろうか……。

パトが不安げに家の中を搜索していると、ヤマブキが村の入り口の方を向き、呟く。

「誰が来ました」

それと同じくして、村の入り口の方から大量の足音が聞こえてくる。

足音からして馬もいる。そのことに気づいたパトは急いで村の入り口へと向かう。入り口にはすでにエリスとオルガが待っていた。

「おい、あれを見ろ」

オルガに言われ、門の外を見るとそこには騎兵がずらりと並んでいる。それぞれが立派な装備をつけ、戦でもするような格好だ。

そんな兵の中から一人の男が出てきた。

男は髭を生やし、分厚い鎧を着たおじさん。この部隊を指揮している人物だろうか。

男はパト達の姿を見つけると、大声で叫ぶ。

「私の名はバイズ・ザード。ニーオン家に支える騎士である!! この村は包囲した!! 大人しく村人を解放しろ!!」

バイズと名乗った騎士はパト達に持っている剣を向ける。威嚇のつもりだろう。しかし、パトには意味が分からない。なぜ、ニーオン家の騎士が村を包囲するのか。村人を解放しろとはどういうことなのだろうか。

何か勘違いがあると分かったパトは大声で返事をする。

「ちよつと待ってください!! 私はこの村のパト・エイダーと言うものです。私も今この村に到着したばかりで事情を聞きたいのですが!!」

パトの返事を聞いたバイズは武器を下ろす。

「分かった。一度事情を聞く!! まずは村の状況を教えてくれ!!」

「村は……村自体は壊れていないのですが!! 村人が見当たりません!!」

それを聞いたバイズは顔を顰める。

「なに!! すぐに状況を……」

バイズが馬から降り、こちらに向かって来ようとするところ。バイズの後ろの馬に乗っていたフードを被った人物が止めた。

身長はバイズよりも小さい。小柄な人物だ。

フードの人物はゆっくりとオルガの方を指すと嘲笑うかのように言う。

「まさか、あの王国の天才が奴隷売買に手を貸しているとはな」

そして懷にあつたナイフを取り出し戦闘態勢を取る。それを見て殺気を感じたオルガもまたいつでも対応できるように体制を変えた。

「ちよつと待ってください。ミリア様。あの人達はおそらく村人です。まずは話を……」

「問答無用!!」

フードの人物はオルガに向けて超スピードで駆ける。そのスピードでフードが外れ顔が見えると、オルガは驚きの表情を浮かべる。

「お前は……盗賊の……!?!」

フードの人物は、黒髪のショート少女。ミリア。

「あの時は不覚を取ったが、今度は負けない!!」

ミリアは両手にナイフを持ち、オルガへと斬りかかる。
オルガはそれを避ける。

凄まじい身のこなし。並の人間ならすぐにやられているだろう。しかし、オルガも負けていない。ミリアの体の動きから次の攻撃を予測し、上手く避けている。

「村人をどこにやった。奴隷売り!」

ミリアは攻撃をしながらそんなことを口にする。

「知るかよ。それはこつちが知りたい」

オルガも避け続けることも困難になってきたのか。反撃をするため鎌を取り出した。

このままでは戦闘が本格化してしまう。犠牲が出るかもしれない。

そう感じたパトは二人を止めようと声をかける。

「ちよつと待つてください。何か勘違いが……」

しかし、二人は話を聞く様子はない。

どんどん戦闘が激しくなっていく。そして二人だけの世界になっていく。

このままだと、本当にまずい。事情も話せず戦闘が起きてしまう。この二人の様子を見て、ヤマブキ達もあちらの兵士もやる気になり始めている。

「戦闘をやめろ!!」

パトの声共にバイズの声も村に響き渡った。

騎士長バイズのおかげでどうにか事態は何事もなく落ち着いた。そしてお互いに事情を話し合い、何があったのか、理解することができた。

「つまり俺の村はその奴隷狩りにあつたと言うことですか」

「そういう事です」

噂では聞いていたが本当に村を襲うことがあるとは……。

フルート王国が滅んでから、その土地に新しくできたアングレラ帝国。帝国は魔法の使用を固く禁じ、肉体の労働を中心に国を支えている。

しかし、魔法の発達したこの時代で魔法無しで経済を回すのは難しい。そのため帝国は奴隷の使用を認めている。

「この村の周辺でアングレラ帝国の軍隊を見つけたと報告があり、我々はニーオン家の指示の元、駆けつけたのですが……」

間に合わず、村人は消えていたということか。しかし、村には争った様子はなかった。村人だって抵抗はする。父ちゃんだっていたのだから、尚更である。そのことをパトが伝えると、バイズは厳しい顔をする。

「奴らは手慣れた集団です。噂にはなつても事件にはならない。それが奴らのやり方です。だから、王国も手を出せない」

そう言われて理解した。アングレラ帝国は奴隷を認めていても、オーボエ王国は認めていない。サージュ村は王国から離れているとはいえ、王国に属している。このことを王国に報告すれば戦争ものだ。

しかし、それはできない。なぜなら証拠がないのだ。

「手口は分からない。しかし、このままでは……。君の村も救うことができないて申し訳ない」

バイズは頭を机に擦り付ける。

「いえ、助けに来てくれただけでも嬉しいですよ」

パトはバイズにお礼を言う。

この男達と、そして外でオルガと喧嘩をしているミリアは村のために命懸けで駆けつけてくれたんだ。感謝はしても恨みはしない。

「お茶でもお代わりしますか？」

「ああ、頂こう」

パトはお茶を追加する。その様子を見ながら、バイズは口ずさむ。

「君達には感謝しかない。エンザンのこと……そしてお嬢様のことも……」

バイズの言葉にパトは理解できずに首を傾げる。そんな中、扉が開き、オルガとミリアが入ってくる。まだお互いに悪口を言い合っているが、なぜか仲良く見えてしまう。

「君が帕特・エイダーで良いんだな」

ミリアはパトの前に立つと改めて名前を聞いてきた。

「はい。この村の村長の息子帕特・エイダーです」

「なら、今はこの村今は君をこの村の代表として、提案しよう。我々に保護されないか？」

??????????

??????????

村を出て馬車に揺られ、パト達は村から南東にあるヤザ村へと向かっていた。

「まさかお前が貴族とはな。驚いた」

オルガはそんなことをミリアに言う。ミリアは呆れた顔でオルガを見た。

「ふん、気づかない奴が悪い。貴様と対峙した時に名乗っただろ」

ミリアの言い方が気に食わなかったのか。オルガが言い返し、また言い合いを始める二人。

ミリア・アドラス・ニーオン。そう、彼女は十二貴族の一つニーオン家のお嬢様であった。

十二貴族とは魔法文明を作り上げたマジーの子孫達を刺し、王族と同じく固有魔法を使うことができる。

しかし、パトは疑問に思う。オルガが言うにはミリアは熊の爪（オングル・ウルス）にいたという。なぜ、貴族のお嬢様が盗賊と一緒にいたのだろうか。

そのことを聞くと、ミリアはやれやれと答える。

「それはだな。こいつの……」

ミリアがそう言い、バイズの方を向くとバイズは俯きながら言う。

「それは私のためですよ。私のため……我が友のためにお嬢様は無茶を……」

そう言いかけた時、外の様子が一気に変わる。森を抜けついたのは煉瓦造りの村。二階建ての建物が綺麗に並べ慣れ、道も煉瓦で整備されている。村の中央には大きな広場と変わった銅像が建てられている。

サージュ村とはまた違った景色だ。そして何よりも村自体が大きい。

「到着しました。ここがヤザ村です」

第21話 【ヤザ村の英雄】

世界最強の兵器はここに!?! 21

著者：pirafu doria

作画：pirafu doria

第21話

【ヤザ村の英雄】

村が奴隷狩りにあつたパト達はニーオン家の保護を受け、ヤザ村へとやってきた。

「家としばらくの食料は用意してやる」

ミリアの提供でパト達は、宿を貸してもらうことになった。

村の中でも高級な宿。ベッドもパトの使っていたものと比べるとふかふかだ。

しかし、パトはそんなベッドに横たわりながらも、全然休むことはできなかった。

「父ちゃん……みんな………」

それは村から連れ出されたみんなのこと。今どうしているのだろうか……。

辛い思いをしてるであろう、みんなのことを想像すると胸が痛み。眠ることもままならなかった。

「まだ起きていたのか……」

寝れずにベッドに蹲っていると、同じ部屋に泊まっているオルガが銭湯から戻ってきた。

「はい。心配で……」

パトの不安そうな表情を見たオルガは、窓に視点を移し、しばらく外を見つめると、扉を半開きにし、親指を外に向ける。

「……ちよつと散歩でもしないか？」

??????????

??????????

気分転換のためにオルガとパトは、夜の村を散歩していた。

サージュ村とは違った風景。家の作りも並びも違う。売り物も、そしてその辺に生えているような雑草にも違いがある。

そんな光景を見ても、どうしても村を思い出してしまう。

しばらく散歩をし、村の中心に着くと、そこには大きな公園があつた。風水もあり、多くの花が植えられている。月明かりが公園を照らす。

そして真ん中には六人の男女の銅像が建てられている。銅像の下には『村の英雄』の書かれていた。

「俺はこの村に来てから、何だか懐かしい気持ちになったんだ」

オルガはそんなことを口にしながら、銅像を見つめた。

「……………パト。今のお前にこれを渡すのは正直どうかと思う。だから、勘違いしないでほしい。これはお前が戦うための道具じゃない、これはお前を守る剣（つるぎ）だ」

オルガはフードの中に手を入れると、中から剣を取り出し、それをパトへ渡す。

剣は古びたどこにでもありそうなもの。派手な装飾も何もない。だが、一つだけ確かなのは、この剣の手入れは完璧に行き届いているということだ。

「オルガさん？　これは……」

「その剣は魔術をやつてゐる時から、手元にあつたんだが、俺は剣は使えない。だけど、どうも捨てる気にはなれなかった」

オルガは銅像の真ん中の変つたポーズをしている男像を見る。

「俺よりもお前が持つてゐる方が相應しい。そう思った。だから使つてくれ、俺の大切な剣だ」

剣を貰つたパトは、散歩をしながら剣を見つめる。オルガには最初に言われた。戦う道具ではなく守る剣だと。

だが、今パトの手に戦ふことのできる武器がある以上、この力でどうにか村を救ふことはできないだろうか。そう考えてしまう。

二人は小さな酒場の前を通る。

酒場では兵士たちが飲み食いをしていて、世間話をしている。

しかし、そんな中から気になる話が聞こえてきた。

「それにしてもミリア様とバイズさんは責任感が強すぎる。何もそこまですることはないだろうに……」

「ああ、何も見ず知らずの村のためになあ」

??????????

??????????

宿から少し歩いたところにある銭湯。そこにヤマブキとエリスは来ていた。

「ふふ、きもち」

「ハイ」

湯船に浸かる二人。肩まで浸かり、旅の疲れを癒す。
夜空を見上げ、星を見ていたエリスはふと真面目な顔になる。

「……あなた、この世界の人間じゃないんでしょ」

「ハイ」

「何が目的なの」

「私ノ任務ハパトノ護衛デス」

「違う。あなたの目的はそれじゃない……」

「……………」

「もう一度聞く。あなたの目的はなんなの？」

「……………」

しかし、ヤマブキは答える様子はない。

「そう、答える気は無いのね……」

答える気のないヤマブキの姿に、エリスは立ち上がろうとすると同時に扉が開く。そして黒髪ショートヘアの少女が入ってきた。

「なんだ？ もう出るのか？」

湯船から立とうとしているエリスの姿を見て、ミリアは少し残念そうに言う。

「いいえ、まだ入るよ」

「そうか。それは良かった。少し話したいことがあったからな」

そう言い、ミリアは体を洗うと早速湯船に浸かろうとする。しかし、足がお湯に当たると同時に飛び上がり、湯船から離れた。

「あああああつうううー!!　なんだ!!　この熱さは!」

「え?　熱い?　これくらい我慢すれば良いじゃない」

「いや!　我慢つてレベルじゃないぞ!!」

湯船に設置された魔道具の温度計は47度を示している。

「何よ。情けないわね。だから貴族のお嬢様は……」

「そういう問題じゃねーんだよ!!　……………てかおい、お前と一緒にいた奴はどこだ?」

「ヤマブキさん?　それなら隣に……」

ヤマブキは顔を赤くし、湯船に浮かんでいた。

「ヤマブキさん!？」

のぼせたヤマブキをソファーに寝かせ、エリスは牛乳を飲みながら、隣でコーヒ―牛乳を飲んでいたミリアに聞いた。

「そういえばさつき、話があるって言ってたけど。何か用なの？」

「ああ、貴様の仲間に骸骨がいるだろう」

それを聞き、エリスはすぐにオルガのことだと気づく。しかし、オルガは普段仮面を付けている。普通なら気づくはずがない。

エリスはミリアを警戒する。

「ええ、いるけど、それが何か？」

「そんな警戒する必要はない。前回の戦闘中、奴から顔を見せたんだ」

ミリアはエリスの警戒を解こうと、何も持っていないとアピールするが、エリスは警戒を緩める様子はない。

ここにオルガがいない以上、ミリアの言っていることに確証を持ってない。そのためエリスはミリアを信用し切ることはできない。

「まあ、良い。貴様にどう思われていようとな。それよりもあの天才魔法使いと言われる野郎に伝言を頼む。……………帰ってきたら、リベンジしてやる」

ミリアの言っている意味がエリスには理解できなかった。なぜオルガが天才魔法使いなのか、そしてリベンジとはなんなのか。

しかし、一つだけ、理解できたことがある。それは彼女の顔は死を覚悟しているということだ。

??????????

??????????

ニーオン家の屋敷。それはヤザ村の中でも特に大きい煉瓦造りの屋敷であり、村の北にある丘に建てられている。周りには背の低い木が均等に並べられ、手入れの行き届いた立派な土地だ。

「本当に行くのかい？」

ベッドに腰を沈め、壁に寄り掛かった髭の男が寂しそうに問いた。

彼の名はゴード・アドラス・ニーオン。ヤザ村に大きな屋敷を持ち、治安を守り納めている。ニーオン家の現在の当主であり、ミリアの実の父親である。

「はい。サージュ村を守れなかったのは私たちの責任。なら、彼らを助ける義務があり

ます」

そうミリアは真剣な顔で父を見つめた。

ゴードはベッドから体を動かさずに、天井を見つめて悩む。
そしてしばらく考えた末、答えを決める。

ゴードはベッドの横で背筋を伸ばして立つ二人に向けて言う。

「分かった。認めよう。だが、一つ約束してくれ……無茶だけはしないでくれ」

ゴードはそう言い、娘の目を見る。

彼女は昔からそうだ。やると言ったことは必ずやる。どんなに反対されようがどうしようが、己の正義を貫き通す。それが彼女、ミリア・アドラス・ニーオンだ。

それはバイズの親友の動向を知るため、熊の爪（オングル・ウルス）に潜入していた時も同様だ。

そしてそれを父であるゴードは止めることのできないことだと知っていた。

そんなゴードの姿を見たバイズは胸を張って宣言する。

「私が命をかけてもお守りします」

そんな頼もしいことを言ってくれるバイズをミリアは見上げる。ミリアの身長とバイズの身長は30センチも違う。そんな彼を見上げながら、ミリアは頼もしく思う。

元フルート王国の聖騎士長である彼は、いつもミリアの側にいた。ゴードへの恩もあっただろう。フルート王国が滅び、帝国に追われた彼を救ったのはゴードだ。しかし、彼はそれ以上にミリアに惚れていた。

それは異性としてではない。戦士として、正義を貫く者としてバイズはミリアを尊敬している。

ミリアをかけても守る。その言葉にバイズにとって嘘偽りはない。

バイズの言葉を聞いたゴードも安心して娘を送り出すことができる。しかし、一つ問題があった。

「奴隷の解放が目的だ。大人数ではいけないだろう。しかし、二人では足りない。どうするつもりだ」

ミリア達の目的は奴隷の解放である。アングレラ帝国に囚われた村人達の救出。

しかし、大軍を引き連れて帝国に向かえば問題になってしまう。この件は一部の人間を除き王国には報告していない。そのためニーオン家の独断行動である。それが知られれば、王国側もどのような対応を取るか分からない。

ミリアは父親のいるベッドの奥にある窓の外を見る。外には夜空が浮かび、月と空が世界を照らしている。

「数名、兵士を連れて行こうと考えている」

奴隷解放のため、ミリア達の取る手段は潜入である。

帝国にはいくつかの番地分けがなされており、多くの奴隷が監禁されているフロアは帝国の北西にある。そこに少人数で潜入し、奴隷達を解放。混乱を起こす。撤退時は奴隷に紛れることで、自分たちの正体を隠して奴隷解放を達成する。それが狙いである。

ミリアがバイズの部下から選んだ兵士の名前を伝えようとした時、突然部屋に一つしかない扉が開かれた。

「ミリアさん！　俺たちを連れて行ってください!!」

そこに現れたのは片手に剣を持ち、ゴーグルをした少年。そして青髪の長髪に白い服を着て胸に宝石の埋まった女性。桃色のとんがり帽子にマントを羽織った魔法使い。紺色フードの長身男。

「君は……?」

初めて見る少年が突如押しかけてきたことに動揺するゴード。

その横でミリアは短剣、バイズは剣を抜き戦闘体制を取る。

「帕特君！ なぜここに!？」

「どうやって入ってきた!! 天才魔法使い!!」

そのミリアの声を聞き、扉の横からひよっこ顔を出す少女達。

10歳にも満たない二人の黒髪の少女達は申し訳なさそうにミリアに聞く。

「お姉さま？ ダメでした？」

「お話がしたいって、お姉さまの友達じゃないの？」

それを聞いたミリアは額に手を置く。

バイズは剣を握り、ジリジリと帕特達との距離を詰めようとする。

部屋は広く、ベッドのある端から扉までは6メートル以上はある。徐々に距離を縮めるバイズに帕特達も警戒するが、下手に刺激をしないために、武器は出さない。帕特達の目的は戦闘ではないのだから……。

「サリス様、ミーニャ様。その方々からお下がりにください」

バイズの言葉に少女達は顔を合わせて、パト達から離れる。しかし、状況が気になるのか、一部始終が見える距離の廊下で足を止め、クルリとそちらを見た。

「パト・エイダー。そう言ったな。君とは短い付き合いだが悪い奴ではないと思っている。しかし、お嬢様方をそそのかし、屋敷に侵入してくるとは……何が目的だ！」

もう少し、あと少しでバイズの間合いに入る。その時、ゴードが止めた。

「待て！ 剣を治めるんだ。バイズ!! そしてミリアも！」

ゴードの言葉に二人は動きを止め、即座に武器をしまう。

「なぜですか？ ゴード様、彼は不法侵入を……」

バイズは振り返りゴードに質問する。

ゴードは四人の姿を順番に見る。オルガ、パト、ヤマブキ、そしてエリスを見て目線を止めた。

「君はエリス。エリス・グランドだね」

ゴードはエリスに問いかける。しかし、それは質問というよりも、確信を持ってそれを確かめるような感じであった。

「……そうですが」

それにエリスは戸惑いながら答える。

「そうか。その髪や顔は母親似。そしてその魔力量は父親譲りということか……。大きくなっただけ」

確かめた内容が確かであったことを確認したゴードは安心したかのように語る。

「ということは君が王国で噂になつてゐる魔法使いだな」

ゴードの言葉にミリアは驚きを隠せずにいる。しかし、そのことを気にせずゴードは今度はパトの方へと目を向ける。

「ということは君がガオ・エイダーの息子。パト君だね」

第22話

【村を救いに】

世界最強の兵器はここに!?!22

著者：p i r a f u d o r i a

作画：p i r a f u d o r i a

第22話

【村を救いに】

9年前。何十年も停戦を続けていたオーボエ王国とフルート王国の間で大きな戦争が起きた。

世界の始まりの大樹が存在すると言われる大陸の西を巡る争い。それはのちに聖地戦争と呼ばれる大戦争である。

戦争は長きに渡り続き、両国とも疲労が溜まりつつあった。

フルート王国はまだ開発段階であつたある兵器の稼働させ、戦況が傾き始める。

しかし、そこに二人の魔法使いが現れた。

二人の活躍により、戦争は終結。長きに渡る悲惨な戦争は終焉を迎えた。

??????????

??????????

「そうか。君は……。分かった」

ゴードはそう言うときミア達に指示を出す。

「連れて行く兵士は彼らにしないさ」

父の意外な言葉にミリアは口を噤ませる。

今日は出会ったばかりの人物。信用できるわけもない。それに天才魔法使いがいるとはいえ、それ以外は村人だ。戦力としても期待できるか不安だ。

不満そうなミリアは姿を見たゴードは続ける。

「彼女達を連れて行くことは、お前にとって成長になる。これは命令だ」

父の強い言葉にミリアは驚く。

ゴードは聖地戦争で足を負傷し、それ以降動くことができなくなった。

しかし、それ以上に娘が父に感じていた以前との違いがある。それは覇気だ。

戦争前は何かに負けないように頑張っていた父であったが、戦争から帰ってきてからその気迫を失った。

屋敷の者の話によれば、戦争で友を失ったとも聞いた。

そんな父から久しぶりに聞く覇気のある言葉。

そのゴードの姿にミリアは懐かしさと憧れを感じる。

そして返事をする事なく、パト達の元へ向かい、すれ違ふと部屋から出て静かに言った。

「……………着いてこい。これから作戦会議をする」

翌朝、馬車に荷物を詰め込み旅の支度をする。

馬車を引く馬は二匹いて、荷台は白い布で覆われて古屋のようになっていた。中にはいくつかの酒の入られたタルが積まれている。

「昨日言つてた偽装の商品ですか」

パトは確認のためバイズに尋ねる。それを聞くとバイズは首を振つて頷いた。

「ああ、これで権門を突破する」

アングレラ王国に入国する際には権門が存在する。しかし、奴隷解放のため武装した状態では突破はできないだろう。そのため権門を突破するために酒を売りに来た商人のフリをする。

支度を終えるとミリアは馬車の前で参加者を整列させる。

「よし、これから出発する準備は良いか!!」

今回の奴隷解放作戦に参加する人員は全部で六人。

固有魔法の転送魔法を使い、自身やモノの位置を移動させることができ、身軽な体術

とナイフ術を得意とする。十二貴族ニーオン家の長女ミリア・アドラス・ニーオン。

元フルート王国の聖騎士長にして、剣術の達人。鎧の下に秘められた剛腕な肉体で巨大な岩すら切り倒す。バイズ・ザード。

未だ画面に隠された状態をする者は少ない。大鎌を武器に敵を切り裂き、感覚が強化された身体は風の動きから敵の動きを感知する。オルガ・ティダード。

膨大な魔力を有し、彼女に魔法知識で敵う者はいない。災害すら操り、体力のモンスターを葬り去る。天才魔法使いがここにエリス・グランツ。

身体に仕込まれた兵器。強靱な肉体と敵の感情を読む解析能力はどこで手に入れたものなのか……。異界より現れし美少女ヤマブキ。

父から教わった武術や剣術。村で培った知識と経験を生かす。オルガから貰った剣を手に、家族を救うため村人が戦う。パト・エイダー。

人員が全員いることを確認すると、ミリアは早速馬車へと乗り込む。

見送りの人間は屋敷の使用人のみ。この作戦を知る者は僅かしかおらず、ミリアは二人の妹にもこのことは黙ってきている。

全員が馬車に乗り込むと、バイズが馬を引いて馬車を動かし始めた。

「それでは出発する」

馬車はゆつくりと動き出し徐々に速度を上げていく。

小さく見えなくなっていくヤザ村を目にミリアは呟く。

「必ず……」

??????????

??????????

馬車が進みもうすぐ日が暮れる。アングレラ帝国までは約三日かかる。そのうち一日目は村までの距離も遠く野外で寝ることになりそうだ。

馬車を操作するバイズはこの前の鎧は脱いでいるが、モンスターに遭遇した際はすぐに戦闘できるように剣を腰に持っている。

馬車の中では各々が時間を潰していた。

「またその本を読んでのの？」

杖を磨いていたエリスが、そばで本を読むパトに呆れた顔で聞く。

パトが読んでいるのは『アルシミーのシミのようなアル秘密』という本。昔友人であるエスから貰った本であるが、パトは飽きずに何度も読み返している。

「何度読んでも飽きないさ。もしかしたらみんなを救う方法が見つかるかもしれない」

パトの期待に満ちた言葉にエリスはため息を吐き。

「それはないと思う」

と答えた。その様子を見ていたミリアは前々から聞きたかったことを聞く。

「なぜ貴様は恐れない。家族や友人を助きたい気持ちはわかる。しかし、これから行くのはフルート王国を滅ぼし新たな国となった武力の国。下手をすれば戦闘になるのだぞ」

それを聞くとパトは本を閉じる。

「分かってます。怖い気持ちもあります。でも、俺には目指すものがあるんです」

「目指すもの？ 騎士か？」

「いいえ、頼れる村長です」

その言葉にミリアは目を丸くする。

「村長……」

そして吹き出すように笑い出す。

「貴様の中の村長は戦うのか？」

「はい。戦いますとも村のためなら……。命だつて……」

??????????

??????????

しばらく馬車を進ませ、昼を過ぎて日が沈み始めた頃。場所が突然止まった。

何があつたのか気になり、布を少しめくり外を覗くと外には二人の男が仁王立ちで立ち塞がっていた。

一人の男は金髪で大柄な厳つい男。もう一人はその男の身長の腰程度しかないが坊主でこちらも馬車を睨んでいる。

まだアングレラ帝国とは距離がある。権門はまだ先のはずだ。しかし、相手の情報が分からない今は、馬車の中に身を隠してバイズに任せるしかない。

ミリアも同じ考えのようで、馬車の中で堂々と心配することなく見守っている。

「何の用だね、君たち？」

馬車からは降りず、いつでも馬車を動かせる状態でバイズは聞く。

すると金髪の男は口元を緩めニヤリと笑い話しかけてくる。

「ここは俺たち、ルーヴの縄張りだ。ここを通りたいってんなら、金目のもんを置いていくんだな！」

二人は武器を取り出すと馬車を囲う。金髪の男は木製の巨大ハンマー。坊主はナイフのような短剣。

行動や発言から盗賊だと判断したミリアは馬車から身を出す。

それに続き。パト達も馬車から顔を出した。

相手は二人だが、時間をかけている暇はない。盗賊相手なら多少強引でも切り抜けてしまいたい。

バイズに手を貸そうと此方も武器を取り出そうとするが、横に手を伸ばしそれらを止めた。

「ミリア様……ここは私が」

それを聞いたミリアは「……そうか」と小声で答えると武器をしまう。

バイズは懷にある劍を取ると、道を塞ぐ二人へと歩み始めた。

「なんだア！ おっさん、やる氣かア？」

バイズが近づいてくるのに少しびびったのか。坊主は短劍を振り回し足を振るつかせながら挑発する。

その挑発に対しバイズははつきりと返す。

「ああ、私一人で君たちの相手をしよう……それに」

懷から布を取り出すと、それで劍の鞘と鐔をぐるぐると巻く。何十にも巻いてガチガチに固まった劍を二人に見せつける。

「この劍を抜かないと宣言しよう」

バイズの言葉に坊主は眉を寄せる。

「な、何を言つて……………」

「ふざけんなアア!!」

坊主が何か言いかけた時、金髪の男が大声を叫びながらバイズへと突つ走り始めた。

金髪の男は運動能力が高いのか、それなりの距離が離れていたはずなのにすぐにバイズの目の前に立つ。

「ウオオオリヤオアアア!!」

そしてハンマーを振り上げると、思いつきりバイズに振り下ろした。

しかし、バイズは何も驚くことなく。冷静に一步前に入る。

ハンマーが振り下ろされるよりも早く、金髪の男の腹のみぞを肘で殴り付けた。

腹を殴られた男は口から透明な液体を吐き出しながら倒れる。

「ラグナアアア!!」

大の字に地面に伏す男を見て、坊主の男が悲鳴をあげる。

それに答えるようにラグナと呼ばれた金髪の男は声を返す。

「うるせえな。ナト」

だが、その声はガラガラでダメージは大きいらしい。息を整えラグナが立ち上がるとナトの元へとそのそと戻っていく。

バイズの攻撃は確かに手加減をしてみねうちをした。しかし、それでもしばらく立ち上がれない程度に攻撃したつもりだったのに、ラグナが立ち上がり仲間の元へと戻れることに疑問を覚える。

ラグナはナトの元にたどり着くと、腰を落としてナトに耳打ちをする。

「おい、こいつ結構強エぞ」

ラグナは耳打ちのつもりらしいが、声が大きくて距離のあるパト達にも声が聞こえてしまう。

しかも、ラグナはバイズの攻撃をやせ我慢しているのか、足が震え鼻からは血が垂れている。

ナトに鼻血が出ていることを指摘されると、ラグナは腕で豪快に拭き取り、今後のことを相談し出す。

「兄貴、ここは一旦退いて師匠に相談してみてもどうで？」

「俺様に逃げろだとオ!? …………… いや、そうするか。ここは一旦退却だ！」

ラグナとナトは相談が終わると、そそくさと武器をしまい、バイズとは反対側の森に身体を向け足踏みを始める。

「ガハハ！　今回は見逃してやる！　次会った時は覚悟すんだな！」

そう捨て台詞を吐くと、猛スピードで森の中へと消えていった。

「逃げたみたいね」

逃げ去った二人を見てエリスが呟く。それを聞いたバイズは剣を解きながら、

「これで懲りたら良いが。あの感じまた来そうだな……」

出だし早々盗賊に襲われる。そしてその盗賊に目をつけられた。道中に不安を覚える一同であった。

第23話 【月の光】

世界最強の兵器はここに!?!?23

著者：pirafu doria
作画：pirafu doria

第23話

【月の光】

く
月明かりが暗闇を照らす。今日は快晴、満月と星々の光が夜だというのに辺りの明るくしている。

アングレラ帝国に向けて馬車で移動するパト達一行は、火が沈みこれ以上の移動は危険ということで火を起こし森で一晩を過ごすことにした。

「夜は交代で見張りを頼みたい。モンスターの発見に優れた魔法を使える者はいるか？」

夜の森はモンスターの巣窟。モンスター除けの魔石を馬車に付けているとはいえ、それだけに頼るのは危険だ。

バイズの質問にオルガが手を挙げる。

「俺なら感覚強化でモンスターの発見ができる」

「そうか、他には？」

バイズの質問に他の者は誰も応じない。

「そうか、分かった。オルガと言ったな。俺とお前で見張りをする」

オルガも賛成のようで分かったと頷く。

その様子を見ながらパトは一つ思うところがあり、エリスの耳元であることを聞く。

「おい、お前っは確か……………」

パトの言葉にエリスは横目で睨み、他の人には聞かれないように呟く。

「めんどくさい」

なんとなく分かつてはいたが、予想通りの回答が返ってきた。

エリスは魔力感知を使うことができる。それにより周囲の魔力や魔素の動きを把握することができるのだが……。

そんなこともありながら、馬車に積んでいた食料で夕食を済ませる。

偽装のために積んできた酒。それを見つめるバイズをミリアが叱りつけながら時間

が過ぎ、そろそろ寝つこうと思った頃。

辺りを警戒していたオルガがあることに気づく。

「風の流れがおかしい……」

魔力感知に比べれば、オルガの感覚強化は索敵としては劣るだろう。しかし、長年の勘がオルガに伝えていた。

「何かが来る……」と。

それを聞いたミリアは即座に焚き火を増やし辺りを警戒する。

「お前達かア！ 俺の弟子達を可愛がってくれたのはア!!」

声がするのは上。さらに上。

野宿をするためにパト達が確保したのは森にある小さな空き地。しかし、森があるのは三方向で一方向には急な岩山が立っていた。

モンスターや盗賊が現れるなら森の方向。岩山方面は安全だろうと勝手に思い込んでいた。

しかし、岩山から月をバックに人影が現れる。

人のような影をしている。だが、何か違和感を感じる影だ。そう、それは人間にはないものが付いている。

人影は岩山から飛び降りると、空中で回転しながら華麗に着地する。

「……………こいつは」

焚き火に照らされ、声の主の人物の姿がはっきりと見える。

身体中が灰色の毛で覆われ、前方に飛び出す口と鼻。そして頭部から生えた耳。まるで獣のような見た目をした男。

狼男だ。

すぐに全員戦闘態勢を取る。

狼男の姿を見たパトは驚きながら率直に思ったことを口にする。

「モンスターか……でも、モンスターは会話はできないはず……」

そのパトの疑問に警戒しながら狼男を観察していたバイズが答える。

「モンスターじゃない。魔素に侵された被害者だ」

つまりはオルガと同じように、高濃度の魔素により身体に影響を及ぼした元人間ということだ。

ならば、オルガと同様に見た目はモンスターであつても、内面の心は人間のはずである。話し合いができるはず。

パトは狼男に事情を聞けないか、説得をしようと試みる。しかし、狼男の気象は荒く。

「うるせー！」

と一喝されてしまう。

狼男が言うにはパト達一行に弟子の二人がやられたらしい。

その説明を受けてパトは昼に出会った二人組の男を思い出す。

そういえば、師匠に相談するとか言っていた……。

そのことを思い出し、パトは再び狼男を説得しようと試みる。

「あのく、俺たちは彼らに仕掛けられたから抵抗を……」

しかし、狼男はそれを認めない。

「俺の弟子が仕掛けただア？ ………………嘘つくな！」

少し迷っていたようにも感じたが……。それでも納得する様子はない。

狼男は今にも飛びかかってきそうな勢いだ。戦闘は避けられないのだろうか。そう思っていると、横でバイズが静かに震えていた。

騎士としての誇りだろうか。それを隠そうとして剣を地面に突き刺しているが、そばにいるパトとミリアにはその震えが見えていた。

「バイズ……お前は下がってて良いぞ」

ミリアがそうバイズに告げる。

パトにはバイズが震える理由が分からない。しかし、ミリアは事情を知っているような口ぶりだ。

ミリアはバイズの横を通り、狼男の前に出ようとするが、バイズが横から手を出しミリアの肩を掴んだ。

「いいえ、ここは私が……私がやります」

その声にはいつものような覇気はなく。どこか怯えた様子も感じ取れる。

その様子を見た狼男は挑発する。

「貴様、その震えた状態で俺様とやり合おうってのか？」

しかし、狼男は油断する様子はない。

挑発に乗るように鞘に収まった剣を握ったバイズを見て、狼男も戦闘態勢を取った。武器は持っていない。敵は狼男だ。最初は牙や爪を使う攻撃を取ると予想していた。しかし、それは違った。

男が取った姿勢は狼のような四つん這いの姿ではない。

二本足のまま、構えた。その構えは人間の取る構え、そしてパトには見覚えのある構えでもある。

「あの構え……父ちゃんがやってた……」

パトの父親は武術の経験者である。そしてパトは何度か父に稽古をつけてもらったことがあるから知っている。

「その構え……カミナ流空手か……」

オーボエ王国では有名な武術の一つ。対人からモンスターまであらゆる戦闘に対応可能に作られた空手。

そんな強力な武術をこの狼男が使えるとは……。

構えを見たバイズはより人狼に対しての警戒を強める。

「私は君たちのような被害者に償いをしなければならない。そして道を踏み外した者を正す義務がある。これ以上、我が友、エンザンのようにさせないために！」

バイズは体を震える体を引き締める。それを見た狼男はニヤリと笑った。

「そういうことか……。バイズ・ザード。『元』騎士長である貴公と会えるとは光栄だ」

狼男は構えを解かず、そんなことをバイズに言い出す。

「俺はカミナ。カミナ・ランガだ！」

そして名乗りを上げた。

カミナ・ランガという名前を聞き、パトは聞き覚えのある名前に驚くが、そんなまさかと自分の中で否定した。

そしてカミナは真剣な顔で

「しかし、バイズ。俺は貴様の考えている原因でこの姿になったわけではない。俺は友のためにこの姿になった。俺とお前の問題は別件だ」

カミナの言葉にバイズは疑問符を浮かべるが、カミナは答える気はないようだ。

「せっかくの機会だ。フルート王国最強と言われる聖騎士長!! 手合わせを願おうかア!!」

カミナはバイズに向かい、走り出した。

真つ直ぐ直線でカミナはバイズの元へと駆け寄る。距離は離れていたはずなのに、カミナの素早い動きは一瞬で間合いを詰めていた。

バイズは鞘から剣を抜かず、耐性を低くしてどつしりと構える。先程の二人組とは違い、バイズの構えに腰が入っている。

「あの人狼……かなりやるな」

パトの隣にいたミリアが腕を組みながら呟く。

それはパトから見たら、狼男を見て判断したとか、バイズを見て判断したのか、どちらかは分からない。

しかし、パトもミリアと同じ意見であった。

カミナはバイズの懐に潜り込むと、顎を目掛けて左腕で殴り込む。

バイズは鞘に収まった剣の中心を持ち、剣を拳に当てて攻撃を逸らした。

攻撃を避けたバイズは右足で蹴りを入れようとするが、カミナは足運びを使い最小限

の動きで蹴りを躲した。

その間は1秒にも満たない一瞬の攻防。

しかし、二人はお互いに敵の隙を見つけては、殴り、蹴り、それを繰り返し続ける。だが、どちらの攻撃もヒットすることはなく。

このハイスピードの攻防戦を数回に渡って繰り返す。

その光景に戦いを見守る者は呼吸を忘れ、息を飲む。

しかし、この攻防戦は永遠に続くわけではない。バイズの疲れか、カミナの身体が温まったのか、二人の動きに差が生まれだす。

最初はほんの少しの差であった。しかし、徐々に攻撃の頻度に違いが現れ出し、バイズが押され出した。

カミナの攻撃を防ぎきれず、バイズの身体は所々赤く腫れていく。

その様子を見ていたパトは手を貸そうとするが、ミリアに止められた。

「バイズはこの程度で敗れる男じゃない」

ミリアはバイズを見守る。一步も動かず、胸を張って男の勝利を待っている。

しかし、ミリアもこの戦いにバイズの勝利を願う人間であり、勝敗を知る者ではない。手に汗を握り、バイズの命に危険があれば助けに行きたい。そう思っている。

だが、助ける仕事や心配する表情を浮かべるわけにはいかない。それは上司として友として、そして「あの事件」を知る者として、彼に任せるしかない。

ミリアの信じて待つ姿を見たパトは、自身が恥ずべき行動をしていたと戦いを見守ることにする。

ミリアとバイズの関係は彼は知らない。しかし、彼が騎士であることは知っている。騎士の誇りを傷つけるわけにはいかない。

やがてバイズは攻撃をすることができず、カミナの攻撃を防ぐので精一杯になる。し

かもその攻撃を全て防いでいるわけではない。そんな状態だと言うのに、ミリアは見守る。

そんな時、パトは気がつく。

攻撃を喰らい、カミナの方が戦闘では推している。だというのにバイズは一步も退いていないということに!!

いや、むしろバイズはカミナの連撃を受けながらも、ゆつくりと前に踏み込んでいる。

そしてそれは魔法使いであるエリスにも目に見えるほどに現れ出す。

「攻撃されているのに、押している?」

カミナもこの違和感に攻撃が緩む。

その一瞬。カミナの動きが鈍くなった瞬間にバイズは動いた。剣の鞘を持ち、柄の部分突き出すように押し出した。

カミナは素早く後退し、バイズから距離を取る。

その素早さはまさにベアウルフ並みで、目で追うのがやつとの速さ。そんな速さの回避であったが、カミナの肩には軽い痕が残っていた。

「あそこで反撃してくるか……。面白い」

ダメージは受けていないが、あの連撃からの反撃に驚いたのか。安易にバイズに近づこうとする様子はない。

お互いに仕掛けることはなく、静寂な時間が流れる。

バイズの荒い息と焚き火の音が静かな森に響く。

二人の動きに集中していた三人であったが、突然後ろから物音があった。そしてそれと同時に男の悲鳴が響く。

振り向き馬車の方を向くと、そこにはヤマブキとオルガは地面の下を見ている。

地面の下を見ると、人間も落ちてしまいそうな大きな穴がそこにはあった。

戦闘をしていたバイズ達もこの騒動で気が緩んだのか。警戒をしながらも構えを一度解く。

「どうしたんですか？」

「敵対反応ヲ感知シマシタ」

そうヤマブキは穴の下を指さす。

そこには昼にあった二人組の男がいた。

そんな二人を見下ろして、オルガがニヤリと笑った。

「掛かったな。俺の落とし穴に……」

この穴はオルガの作ったものようだ。

ラグナとナトは「出せ出せ！」と穴の下で騒ぐ。しかし、オルガは出す気がないよう
でずっと見下ろしている。

「奇襲を仕掛けようとしたのはそっちだろ。助けるかよ」

突然の出来事に混乱していたパトであつたが、エリスに説明を受けて理解する。

バイズとカミナの戦闘に夢中になっているうちに、ラグナ達は馬車の後ろに隠れてい
た。

そしてタイミングを見計らって奇襲を仕掛けてきたようだ。

しかし、奇襲を仕掛けたものの、ヤマブキとオルガに気づかれ、すでに備えていたオ
ルガの落とし穴にはまってしまったようだ。

落とし穴にハマった二人を見てオルガは嬉しそうに笑う。

それを見ていたカミナがふと口にした。

「お前……もしや、オルガか？」

その声はどこか懐かしむようであり、今までの勢いのある声と違い、震えたように言った。

だが、それに対してオルガは無関心な返しをする。

「ああ、そうだが？」

カミナはオルガのことを知っているが、オルガはカミナのことを知らない様子だ。オルガが頭に疑問符を浮かべるが、カミナは嬉しそうに頬を上がらせた。

「俺のことを覚えているか？」

カミナの質問にオルガは首を振る。

カミナは少し落ち込む。カミナの激しい感情の起伏は元々人間としても分かりやすい動きをするが、人狼であるからより分かりやすい。

オルガに覚えていないと言われ、ショックを受けたカミナであつたが、しばらく無言になり、

「そうだな。俺も姿が変わつた。……いや、それだけじゃないな」

何かを思い出したように語つた。

そしてバイズに背を向ける。

「今回は俺の負けで良い。だが、次は決着を付けるぞ」

「なんだと……」

バイズは納得していないようだが、カミナは跳躍するとバイズやパト達の頭上を飛び越え、落とし穴の近くへと着地した。

落とし穴のすぐそばにはオルガがいるが、お互いに睨み合うと何もするでもなく、カミナは下にいる二人に声をかけた。

「おい、お前ら!! なぜ来た!」

カミナの言葉に二人は怯えながら答える。

「し、師匠が心配で!!」

その回答を聞き、ため息を吐く。

「お前らなア。俺が一对一でやってる時に水を差すなど言ったよな」

「す、すみません!!」

カミナは落とし穴に飛び込むと、二人を抱える。

「次からは気を付けろよ」

「はい！」

二人を抱えた状態で3メートル近くある落とし穴から一回の跳躍で抜け出すと、オルガに背を向けて、

「じゃあな……………元気そうで良かった」

そう寂しそうに呟き、森の方へと姿を消した。

第24話

【アングレラ帝国へ】

世界最強の兵器はここに!?!? 24

著者：p i r a f u d o r i a

作画：p i r a f u d o r i a

第24話

【アングレラ帝国へ】

カミナとの騒動後は問題なく馬車を進めることができ、無事にアングレラ帝国の領土へと入ることができた。

検問ではバイズは商人のフリをして、パト達は馬車の中に身を隠した。馬車の隙間から外を見渡すと、もうそこは別世界。

草木の一切ない砂漠のような土地。

岩などが地形を作って入るが、植物がないことで視界を遮るものはない。ずうつと先に見える建物が小さく見えるほどに、見晴らしが良い。

その光景にフルート王国時代の自然溢れる大地の面影はない。

ただただ砂や岩で出来た道をパト達は進んでいた。

数年前にこの地に存在していたフルート王国は第魔法の失敗により、大爆発と共に大量の魔素が放出された。

それを原因にモンスターや魔素による被害が増加し、王国内は混乱状態になってしまった。そして反乱勢力と王国の激突の末、王国が滅び、新たな国が出来上がった。それがアングレラ帝国だ。

今のアングレラ帝国は魔法の使用を一部の選ばれた人間を除き禁止している。それによりモンスターによる被害はなくなった。しかし、魔素を養分とする植物は絶えてしまったのだ。

パト達は馬車の中に身を隠す。植物がないからか、アングレラ帝国に入ってから温
度が上がったように感じる。

それに景色の変化を感じないのも退屈に感じている。

「領土には入ったが目的地まではどのくらいなんだ？」

先の見えない土地を見て、不安に思ったのかオルガがそんなことを聞いてきた。

「私たちの目指すのはアングレラ帝国の北西にある第六フロアだ。そこに奴隷達が捕
まってる」

ミリアは馬車の中からそつと外の景色を指さす。

奥に見えるのは石の煉瓦で作られた建物の並ぶ王国。オーボエ王国とは違い、高い建
物はないが石煉瓦で居住区が8つに分けられている。

まだ遠くに見えるそれらの中で、左の方にある最も大きな区画を指した。

「あそこが第六フロアだ。そこに飼われていない奴隷達が捕まってる」

ミリアの刺した区域を見て、エリスが口を開く。

「かなりデカいのね」

「ああ、基本的に最初に囚われた奴隷はあそこに運ばれる。おそらくは村人達もそこにいるだろう」

パトはやつと村人や父親を助けることができると、オルガから貰った剣を握りしめる。

そんなパトにヤマブキが言った。

「安心シテクダサイ。アナタハ私が守リマス」

続いてオルガもパトの肩を叩く。

「ああ、俺もお前を守つてやる。だから安心しろ」

そう二人に言われ、パトは初めて気付く。自身の腕が震えていたことに……。

恐怖からか、恐れからか、パトは何に震えているのか。自身では理解できていなかった。

実戦経験はない。パトは村人だ。

村に攻めて来るモンスターと戦うのも門番に任せていた。戦闘の訓練は受けたが、戦いに自信があるわけではない。

しかし、彼は村のためなら命をかける。

それが彼の目標であり、彼の目指すものである。

だから、この作戦もパトにとっては、村のために村のために命を捨てて挑む。そのような作戦であった。

身体は震えていても、心は怯えない。

この恐怖に。パトが気づいていないのが、吉と出るか凶と出るか。

数時間馬車に揺られ、砂漠を進み、検問を向けてがもう見えなくなってきた頃。馬車が止まった。

不思議に思い、そつと隙間から外を覗くと、そこには二メートル近い身長に、ガツチリした肉体の男がいた。

白い鉢巻を頭に巻いて、青いスーツのボタンを全開にした男は、真つ赤な鞆に包まれた刀を片手に馬車の進行方向に立ち塞がった。

「待ちな」

男はそう言い、パト達にいる馬車を睨みつける。

「俺はテツ・ロウ。その荷台を改めさせてもらうぜ」

男の周りには誰もいない。しかし、明らかにこの荷台を警戒している。

テツ・ロウという名前を聞き、ミリアが小さな声で呟いた。

「ヤバいな……」

それにパトが反応する。

「どういうことですか？」

「奴は賢者の一人だ」

アングレラ帝国では基本は魔法の使用が禁止されている。しかし、王に認められた一部の人間は魔法を使うことが許されるのだ。その人物達は賢者・大賢者と呼ばれる。

まずこの国の王であるハオウ・リュウガを筆頭に、八人の大賢者と呼ばれる大幹部がいる。

彼らには役職が与えられ、医療、裁判、奴隷などを管理している。

そして一部の大賢者を除き、その部下として賢者と呼ばれる役職がある。

「奴は警備隊の一人だ。ここでバレては奴隷施設までたどり着くことができない」

どうして怪しまれたのかは分からない。しかし、このままでは目的地に着く前に捕まってしまう。

バイズは怪しまれないように話し合いで解決しようとする。しかし、テツは問答無用でこちらに近づいてくる。

このままではマズイ。何か脱する方法はないかと悩んでいる中、ミリアが決断する。

「ここから先は歩いて向かうぞ」

そして立ち上がると、パト達に手を差し出す。

「捕まれ、私の固有魔法で一旦身を隠す」

その言葉を聞いてパトは目を見開いた。

「待ってください。バイズさんはどうするんですか？」

「バイズなら大丈夫だ。それよりもここに私たちがいる方が問題になる」

ミリアの言葉には自信が満ちており、バイズを信用しているようだった。

パトは戸惑いながらも、ミリアの手を掴む。それに続いてエリスとヤマブキとミリアに掴まったが、オルガのみ腕を組んだまま動かなかった。

「オルガさん？」

パトはオルガの手も掴もうとするが、オルガは拒む。

「俺はここに残る。俺なら死体のフリをしてやり過ごせるからな」

仮面を取ると、骸骨である素顔をあらわにする。

そして馬車に積まれた木箱の横に背持たれるように寝っ転がる。

「この前人狼に会ったとき……ヤザ村の銅像を見た時と同じ感覚がしたんだ。理由は分からないが懐かしいと感じた」

オルガは続ける。

「だから俺は残る。あの騎士を放っておくことはできない」

テツはもうすぐそこまで来ている。説得している時間はない。

パトは頷き、オルガを置いていくことを決める。その様子を見ていたミリアもオルガを睨みながら言う。

「お前との決着はまだ付いてない。死ぬなよ」

「ああ、どっちが先に着くかは知らねえが、待つてるぜ」

ミリアは馬車の外にある岩陰に魔法陣を展開すると、転送魔法を使い馬車からテレポートした。

姿を消したと同時にテツが馬車に入ってくる。しかし、中にはあるのは果物と酒の入られた木箱と無造作に置かれた白骨死体。

パト達は無事にアングレラ帝国に侵入することができた。

??????????

??????????

転送先は馬車から数十メートル離れた岩陰。岩陰から馬車の方を覗くと、バイズとテツが何かを話し合っているのが見える。しかし、距離があるせいか、話している内容は聞き取ることができなかった。

しかし、疑問が残る。なぜ、無事に検問を突破した俺たちにテツは近づいてきたのか。

明らかに行動は怪しんでいた。

悩んでいるパトを他所に、ミリアは早く先に進むことを提案する。

「今ここで考えていても時間の無駄だ。バイズが引きつけているうちに距離を取るぞ」

バイズには何の説明もなしに転送魔法で別れた。しかし、馬車に姿がないことでいち早く理解したようだ。

話の内容は聞こえないが、テツの意識を周りが行かないように、うまく誘導している。やがて話がついたのか、テツは馬車の中へと入っていき、馬車が動き出した。

様子を見ながらパト達は隠れながら進んでいく。緑が少なく隠れるところの少ない土地。前に進むのにも苦勞しながら、二時間かけてやっと目的へと着くことができた。

王国に着けばもうそこは砂漠の王国。多くの人が買い物や仕事に没頭している。しかし、歩く人々の中に鉄の首輪の付けられた人物がいる事に気がつく。

「あれが奴隷だ。奴隷には首輪が付けられる。それが奴隷の証だ。奴隷の労働があるからこそ、この国は存在できているんだ」

アングレラ帝国は魔法を禁止した国だ。魔法を使用すれば、オーボエ王国のように縦長の建物や巨大な結界を作ることができる。

農作物も魔素がなければ、育つことはない。

この国での奴隷の仕事は魔法で出来ないことを補うこと。建築やモンスター退治などそれがこの国で奴隷に与えられる仕事だ。

王国を見渡したパトは人の多さに驚愕する。オーボエ王国もかなりの数の人口がいた。しかし、この国はその倍に近い人口が密集している。

「この中からサージュ村の人たちを探す気なの？」

エリスはめんどくさそうにそんなことを言う。普段は人前では弱気な発言をしないエリスであるが、流石にこの数からは無理を感じたようだ。

「大丈夫だ。サージュ村が襲われたのは数日前。奴隷はまずこの地区で首輪を付けられる。まだこの地区内にいるはずだ」

ミリアは自信満々に言う。しかし、その地区の人口で驚いているのだ。そんなことを言われても思っているとミリアが続けた。

「私は一つの村だけを助けに来たわけじゃない。パト、あなたの村を助けに来たのは確かだが、チャンスがあれば、全ての奴隷を解放しに来たんだ。作戦がある。良く聞け」

ミリアは腰に付けた布のバックから地図を取り出す。

「情報によれば、この第六フロアを管理するのは、奴隷管理を務める四人の幹部」

暴食暴飲、欲望に忠実な男。賢者フェス・クローバー。

氷の姫の噂される、美貌と魔性を兼ね備えた。賢者クリスタ・L・リードレアーム。

純粋な力と凶暴性から陸に上がった海の猛獣と言われる。賢者ガレット・シャーク。

そして奴隷産業を中心に、アングレラ帝国の最高幹部を務める。大賢者ジェイ・アウン。

人物の名前を聞き、パトは腰を抜かす。村でも噂を聞いたことのある人物の名前がちらほらいた。

聞いた話ではオーボエ王国の十聖にも匹敵する力を持っているという。

そんな実力のある人たちを相手にすることになる。恐怖はある、しかしそれ以上に、やらなければならないという使命感の方が強い。

「彼らはそれぞれで奴隷の管理をしているはずだ。気をつけるべきはそいつらだ。それとさっきのテツのように別の賢者が来ている可能性もある。それも十分に注意する必要がある」

「分かった。だが、チャンスがあれば他の奴隷も解放するってどうするんですか？」
「ふふふ、私を誰だと思っている。作戦がある」

ミリアはニヤリと不敵に笑った。

第25話 【氷の女王】

世界最強の兵器はここに!?! 25

著者：p i r a f u d o r i a

作画：p i r a f u d o r i a

第25話

【氷の女王】

パトはヤマブキと共に建物の影に隠れながら、王国内を移動していた。

ミリアの提案した作戦。それはあまりにもシンプルなもの。

パト達で二手に分かれて、奴隷を解放していく。

解放する奴隷はサージユ村の者に限らず、見つけた奴隷を手当たり次第に解放すると言うもの。

この地区内が開放された奴隷で溢れば、混乱が起きて動きやすくなるというものだ。

しかし、奴隷に付けられた首輪は賢者の一人フェス・クローバーの魔力によるものらしい。

首輪がある限り、奴隷も反旗を起こすのは難しい。

そのため開放するのは、首輪が付けられる前の奴隷達。つまりはサージユ村と同様に最近連れてこられた者たちである。

彼らが騒動を起こしているうちに、フェスを倒し、首輪の奴隷も解除。そして大混乱を起こしているうちに逃げ出すという作戦だ。

既に王国内にある牢屋から数名の奴隷を解放したパト達は、人の少ない倉庫の並んだエリアに辿り着いた。

「この見張りも少ないな」

解放した奴隷と共に隠れながら、サージュ村の村人を居場所を聞くが、捕まった奴隷は別々の牢屋に入れられるため誰も知っているものはいなかった。

二手に分かれてから時間もそれなりに経っている。

パトとヤマブキは首輪のない奴隷の解放。エリスとミリアはフェスを倒しに向かった。そろそろエリス達がフェスのいる建物に着いた頃だろう。こちらも多く多くの奴隷を解放し、暴動を起こさなければ、あちらに王国の勢力が集まるかもしれない。

パトの顔に焦りが見え始める。

それなりの数の奴隷を解放したが、まだ騒動が起こるほどではない。より多くの奴隷を解放して混乱を招かなければならない。

「ここです。ここにも奴隷が囚われているはずですよ」

ここまで案内してくれた奴隷の一人が、倉庫の一つを指さす。

それは他の倉庫に比べてデカく、村の建物よりも大きな倉庫。

「ありがとうございます。この奴隷は俺たちが解放します。なので他のところをお願いします」

パトは礼を言うのとミリアから貰った鍵を奴隷達に渡す。

転送魔法で奪った牢屋の鍵らしい。

その一つの鍵を受け取ると、案内してくれた奴隷達は他の奴隷を解放するために別の牢屋へと向かっていく。

残ったパトとヤマブキは案内された倉庫の扉を開く。

開くと同時に白い空気が流れ出し、冷気が体に染み込む。まるで真冬のような倉庫の空気に体を震わせた。倉庫の壁は凍りつき、天井には氷柱が見える。

「本当にこんなところに奴隷が？」

パトは疑問に思いながらも、薄暗い倉庫の中へと足を進める。

すると、

「おい、そこにいるのは？ パトか！」

どこか聞き覚えのある懐かしい声が聞こえる。

声の方へと振り向くと、そこには半裸のマツチヨ男がいた。

「オリパさん!？」

それはサーージュ村一番の力持ちオリパ・ハンマーがいる。その周りには体つきの良い男達が震えながら座っていた。

半裸なのにオリパは全く震えることなく、堂々と言う。

「なぜ、君がここに？」

「助けに来たんです」

パトと回答にオリパは目を丸くして驚くが、すぐに納得する。

「それは助かった。感謝する」

しかし、牢屋には見たことのない人たちだらけ、村のみんなは見当たらない。

もしかしたらもうすでにこの首輪を付けられて他の区間に売られてしまったのだろうか。

パトは恐る恐る他の村人の居場所について聞く。

「他のみんなは？」

パトの表情から不安を感じ取ったのか。オリパはパトの心配を振り払うように言い放った。

「ここに入れられたのは俺だけだ。他のみんなは別の牢屋に入れられた。だが、王国に着いたのは今日だ。まだ近くにいるはずだ」

オリパの言葉を聞いたパトは、村のみんなを救い出せることを喜ぶ。

そんなパトの表情を見たオリパは胸を張った。

「この牢屋にいる他の奴隷も出してやってくれ。コイツらは良い筋肉の持ち主だ。手を貸してくれる」

そう言われて周りの牢屋を見渡すと、寒さに凍えながらも身体付きの良い男どもが牢屋に入れられていた。

二人の話の聞こえた奴隷達は胸を叩いたり、うなずいたりして手を貸すと言ってくれた。

「ありがとうございます。多くの奴隷を解放するためにも騒ぎを起こさないといけないんです」

パトの説明を聞き、奴隷達は任せろと活気付く。

寒さで手が震えてきたパトは、奴隷達を解放するために懷から鍵を取り出した時。

「なんじゃ〜？ 妾の商品に何をしようとしておる？ ネズミ」

薄暗い倉庫の奥から女性の声が聞こえる。

声の方に目を向けると、そこには青い髪に白い着物を着たスレンダーボディの女性が
いる。

厚い化粧をしているが、大人びた雰囲気醸し出し、手に持つ扇を仰ぐ。

「なんじゃなんじゃ〜。奴隷を解放する輩がいると聞いて、どんな奴が来たのかと思え
ば……小僧ではないか」

女性はパトの姿を見るなり、目を押さえて甲高い声で笑う。

どういう原理か分からないが、女性が喋ったり動いたたびに倉庫の温度が下がっている
気がする。

倉庫の冷気に奴隷たちは身体を振るわせる。隣にいるヤマブキもその場でうずくまってしまった。

「やめろ！」

原理は分らないが、確実にこの冷気を放っているのはあの女性である。それに気づいたパトは女性に止めるように叫んだ。

しかし、女性は扇をパトに向ける。

「やめろ？ 何を言っておる。妾を誰と思っておる」

パトに向けたまま扇を開く。

「妾はリュウガ様より賢者の地位を授かりし、クリスタ・L・リードREAMであるぞ。小ネズミ如きが妾にそんな口を聞くでない！」

クリスタが扇を仰ぐと、そこから冷気の風が発生し、パト達を襲った。

まるで吹雪のような冷たい風。手が悴み、口から出る息は白くなっている。

「パト!!」

オリパはパトを心配するように叫ぶ。オリパも同時にクリスタの冷氣に当てられている。しかも半裸の状態だ。

なのにパトよりも元気なのは、仲間を心配する心からだろうか。それとも彼の筋肉からだろうか。

冷氣を受けながらもパトは踏ん張って鍵を取り出すと、牢屋の鍵を開ける。

薄暗い倉庫ということもあり、クリスタからは何をやっているのか、うまく見えなかったようだ。クリスタが気づいたのは鍵が空いた時。

オリパに続き、他の奴隷たちも牢屋から続々と出ていく。

「なんじゃと? なぜ鍵を持っておる!?!」

奴隸たちが牢屋から出て、クリスタは驚きの表情を浮かべる。

「ある方が手に入れたんです」

「……どうということじゃ、その鍵は……。いや、今はいい」

クリスタは鍵の入手に疑問を持ったようだが、追及はしないようだ。

しかし、それはパトにとっても好都合。仲間と別れて別行動をしていることがバレれば、エリスたちにも危険が及ぶ。

「パト、ここは逃げた方が良い」

耳元でオリパが提案する。それにパトは素早く賛同する。

相手は賢者だ。それにこの冷気を操るほどの魔法使いとなるとかなりの腕となる。

それにヤマブキの様子が先ほどからおかしい。この寒い倉庫に入ってから、目を細め

てうとうとしていた。今では体育座りでうずくまっている。

「そうしましょう」

逃げることにして出口の方へと向かう。解放された奴隷達はパト達の入ってきた出入り口から出て行く。

パトもヤマブキを抱えて出口へと向かおうとするが、クリスタがそれを許さなかった。

オリパ達が待つ外へと向かおうとパトは走るが、クリスタが扇を振ると、出入り口に氷の壁が生成される。

氷の壁は進路を塞ぎ、外と内を完全に遮断した。

「逃すと思っておるのか？ 小ネズミ」

氷の向こうには薄らとオリパ達の姿が見える。あちらからもパトとヤマブキが飛び

込められたのが分かったようで、呼ぶ声が聞こえる。

しかし、氷の壁はガツチリと扉を塞ぎ、倉庫の壁も分厚い。声もはつきりとは聞こえない。

クリスタは倉庫の奥から二人を見下した。

「いいのゝいいのゝ、その表情……」

パトはまだどうにか身体を動かすことができる。しかし、ヤマブキは身体を震えさせて、外をじつと見ている。

氷の壁に手をついて、外へ出れないことを悲しむ。よっぽど寒さが苦手のようなだ。パトは座るヤマブキに目線を合わせるため、その場にしゃがむ。

「大丈夫……じゃないですよね」

言葉にはしないし、表情には出さないが、この冷気を嫌がっているのは確かだ。
パトは着ていた上着をやマブキに被せると立ち上がる。

「ヤマブキさんはここで待っていてください。すぐに出しますから」

そしてクリスタに剣を向けた。

ヤマブキはパトの言葉を聞き、素直に上着を被せられると、外を見つめるのをやめて、
パトとクリスタの方へと体の向きを変えた。

「いいのお、其方のような勇敢な少年が絶望する様は……妾の好物じゃ」

クリスタは扇をもう一つ取り出すと、片手に一つずつ取る。今までの冷気は本気では
なかったようだ。

「そうはなりませんよ。さあ、この氷の魔法を解除してもらいます」

パトは剣を握り、クリスタの元へと走り出した。

第26話 【剣の声】

世界最強の兵器はここに!?!? 26

著者：pirafu doria

作画：pirafu doria

第26話

【剣の声】

凍えるほどの低温。壁や天井には氷が張り付き、至る所に氷柱が出来ている。

薄暗い倉庫にパトとヤマブキは閉じ込められていた。

倉庫は長く両脇には牢屋が設置されている。パト達のいる入り口は氷の壁により出ることは不可能。

残りはアングレラ帝国で唯一魔法を使うことを許された賢者の役職を与えられた特

別な人物。クリスタ・L・リードレームが立つ倉庫の奥に存在する。

「ヤマブキさんはここで待っていてください」

パトはヤマブキに着ていた上着を被せる。上着を貰ったヤマブキは何も言わずにそれを頭から羽織った。

上着を脱いだことにより、半袖になり身体が震える。それでも気合いで剣を握った。

クリスタが身体を動かすたびに冷気が発せられ、温度がみるみるうちに下がっていく。

長期戦になればなるほど不利になる。しかし、パトは戦闘用の魔法を使うことはできない。武器になるのは手に持つこの剣だけだ。

パトはクリスタに向き合うが、相手との距離はかなり離れている。数字にすると約20メートルくらいだろうか。

それだけ離れた距離がある状況、相手からしても冷気は届いているが、それ以外に攻

撃をする手段はないだろう。パトはそう考えていた。しかし、

クリスタが扇で小さな円を描くと、そこに白い粉が線を作って集まり、やがてツララが出来上がった。

ツララは縦に伸びているのではなく、パトに向けて槍のような方向に伸びている。

「さあ踊れエー！」

扇を振るとツララがパトへ目掛けて一直線に飛んでくる。

速度は速いわけではない。それに一直線に飛んでくるということもあつて、簡単に避けることができた。

遠距離攻撃があることには驚いた。しかし、避けられない攻撃ではない。どうにか距離を詰めて、攻撃、出来ることなら無傷で捕縛したい。

そう考えていたパトであつたが、その考えはすぐに不可能であつたということを知ら

しめられる。

クリスタが扇で円を描くと、続々とツララが出来上がる。そしてそれをパトに向けて連続で放ってきた。

一発一発の速度が遅くても、数が多くなれば避けるのが難しくなる。パトは近づくことすらできず、入り口のそばでツララを避けるので精一杯になってしまう。

身体を上下左右に動かして、必死にツララを避け続ける。倉庫の温度も下がりつつある。これ以上長期戦になるのは危険だ。

パトに焦り見え始める。しかし、それはクリスタも同様であった。

クリスタはこの倉庫周辺の奴隷の管理を任せられた人物である。

上司であるジェイのから奴隷を解放している人物がいると報告受けて、見回りを兼ねてこの倉庫にやってきた。そこで奴隷を解放する反逆者に出会ったのだ。

鍵を持っていた侵入者はこの倉庫に閉じ込めた。鍵を取り戻し、事情を聞いたのちに他の奴隷も捕獲すれば良い。

だが、そうではないことに今更気がつく。

倉庫が暗く目が慣れるまで時間がかかったため、やっと侵入者の二人の姿や服装を見ることができた。

そこで今戦っている人物の影に隠れ震えている女性。彼女の服装に見覚えを感じる。

色やデザインは違う。しかし、珍しい服装という点が彼女の中である人物を連想させた。

——リュウガ様の側近の——

フルート王国が存在した頃、クリスタは食糧を保存する冷凍保存場で働いていた。魔法で食料を凍らせて、長期間保存する。

魔法の使用が制限される前の時代だ。社員も全員魔法を使って冷凍をしていた。そんな会社で一番優秀であつたのがクリスタである。しかし、彼女は女性であるという理

由から、出世が許されずにずっと冷凍の作業をやらされていた。

だが、ある時王国が滅んだ。そしてクリスタの元に英雄が現れる。彼は新たな国の王を名乗り、自ら足を運んで各地で優秀な人材を集めた。

その中にクリスタはいたのだ。

初めて自分を認めてくれる人間。性別や種族では判断しない。彼こそこの国の王で相応しい。

その彼の側近に似た服装の人物。彼の隣によくいる女。大賢者エンド。彼女の素性は謎だ。一つ分かるのはリュウガ様と共に王国にやってきたということ。

リュウガ様は彼女を大いに信頼していると聞く。しかし、彼女が反旗を起こそうと考えていたらどうだろうか。

確証はない。しかし、服装が似ている。そのことがクリスタにとって最悪な事態を想像させた。

——そんなはずはないはずじゃ。じゃが——

帝国では奴隸の使用が認められている。しかし、奴隸にも最低限の衣食住を与える事が義務付けられており、奴隸に危害を加えることは許されていない。

それは帝国が魔法を失ったから代わりに人力に貸した権利。

クリスタはアングレラ帝国で唯一魔法の使用を許された人物。彼女が賢者になったのは奴隸を守るため、そしてリュウガの正義を信じたため。

リュウガは人間は人間である。それを最低限守っている。だから、侵入者以外は傷つけないように倉庫の外に出した。そして戦意のない相手には攻撃をしない。

この戦闘において、クリスタは一度もヤマブキを狙うことはなかった。

だが、服装を見た時彼女の手元が狂った。一発のツララが真っ直ぐに無防備な状態のヤマブキへと飛んでいく。

狙ったわけではない。もしもエンドと関係があるなら捕らえてから事情を吐かせれば良い。しかし、一つ彼女には心の揺らぎがあった。

帝国の王であるリュウガは、どれだけ出世しようと遠い存在だ。彼女にとっては自分を認めてくれた人物。憧れと尊敬がある。

だが、それと同時に常にあのお方の近くににいるあの女が憎く感じていた。

顔も声にも出さない。心の奥に秘めた気持ち。だが、この戦闘のほんの一瞬にその感情が牙を剥いた。

クリスタは小さく「あ……」と声を溢すが、飛ばしてしまったツララは彼女にはどうすることもできない。

賢者になってから彼女は好みの男性を捕まえて、ちよつとした悪戯をすることが多かった。若い男や体つきの良い男に意地悪するのが彼女に密かな楽しみだ。

だが、他の侵入者や盗賊と戦闘になることは何度もあった。それでも殺人はしたことはなかった。

剣を持つ少年を狙ったツララだって、急所は狙っていない。足や腕を中心に狙い、動きを封じるのが狙いである。

だが、青髪の少女に放たれたツララは身体を中心である胸を目掛けて飛んでいった。丁度そこには少女は蒼の宝石を付けている。

そのツララが当たったのならば、宝石は砕け散り、少女の身体にツララは刺さるだろう。

クリスタは胸を締め付けられるような、苦しい感覚に陥る。

ツララの一つがヤマブキに向かって飛んでいくことに気がついたパトは、自身を狙うツララのことすら忘れ、ヤマブキを庇おうと動いた。

パトはお人好しである。だが、無条件で人を助けるヒーローではない。彼にだって、助ける優先順位が存在する。

家族や友人、村の人々。彼にとって何よりも大事なものだ。

そしてヤマブキはすでに彼の中で仲間であり、同じ村に住む住民である。彼にとって助ける存在だ。それは自分を犠牲にしたとしても……。

鞘から出した剣を振り、向かう途中に飛んでくるツララを弾いていく。完璧には防ぎ切れず、彼の身体に破片が刺さるがそんなことは関係ない。急いでヤマブキの元へと向かう。

ヤマブキとの距離はあと少し。だが、ツララはもうそこまで来ていた。あと一歩、だが、この一歩を踏み出す余裕がない。

パトは剣を振り、一か八かツララを破壊しようとする。しかし、剣は届くことはなく。ツララに剣先が当たったのみで砕くことができなかった。

パトの汗が凍りつく。その時、パトの頭の中に聞き覚えのない女性の声が聞こえてくる。

それは音として聞こえると言うよりも、直接頭の中に語りかけてくるような感覚。

——諦めないで、まだ助けられる——

その声はその言葉だけ。だが、その声が頭の中で再生されている間。ほんの一瞬、時間が止まったような感覚がした。

声の直後。剣から突如の刃に異変が起きる。

突如として熱気を発し出し、剣先の当たったツララは一瞬にして水へと変換される。

急激な温度の変化で倉庫の中は蒸気に覆われる。白い煙が倉庫一帯を包み込み、冷たく凍えるような状態であった倉庫は、外とさほど変わらない温度へと変化した。

これを引き起こしたのは、オルガから貰った剣。

剣は熱を発し、倉庫の温度を急激に上げた。だが、それだけの高温でありながら、パトやヤマブキは火傷などはしていない。

しかし、ひとつだけ理解したことがある。

ヤマブキが無傷なことを確認したパトは剣を握りしめて、クリスタと向かい合った。

「これなら魔法に対抗できる」

理由は分からないし、どんな力なのかも分からない。魔法なのか、それとも別の力なのか。

だが、この剣の力があれば村人を救うことができる。

辺りの氷も溶け、身体も温まり始めた。

パトは剣を手にクリスタへと走り出す。

温度が上がったとはいえ、扉の氷は溶けていない。この倉庫から脱出するためにはクリスタを倒し、奥にある扉から外に出る必要がある。

突然の温度の変化に驚いていたクリスタだが、パトが近づいてきていることに気づく。

あの少年にはこれだけの力はないと予想していた。しかし、現状を引き起こしたのなら、近づかれるのはまずい。

クリスタは扇を振り、大量のツララを生成すると、パトに向かって次々と飛ばしていく。

パトは剣を振り、ツララを払っていく。だが、ツララを切ったり砕いているのは違う。ツララは県にぶつかると同時に溶けて消えている。

クリスタは自身の攻撃が全く効いていないことに気づき、焦りを見せ始める。

それをチャンスとばかりに一気に距離を詰め、ついに倉庫の反対側のクリスタの元へと辿り着いた。

「なんなんじゃ……何が起こつておるんじゃアアア！」

クリスタは焦り叫ぶが、パトにもこの剣の力について理解できていない。説明をすることはできない。

ついに間合いに入った。パトは力一杯に剣を振る。

横薙ぎに振られた剣の刃はクリスタを目の前にとらえる。しかし、もう少しでクリスタの身体に当たるところで剣の動きが止まった。

いや、正確には止められた。

「氷の巨壁（ファレーズ・グラス）」

クリスタは寸前で氷の壁を生成に剣を防いだ。急いでいたと言うこともあり、分厚い壁ではない。しかし、クリスタの全身全霊の魔力を込めたことで、熱を帯びた剣であっても簡単に溶けることはなかった。

剣は氷の壁に突き刺さり、ピクリとも動かなくなる。パトは剣を振った体制のまま、その場に固まる。

氷の壁に剣が挟まり動けなくなった。パトを見て、クリスタがニヤリと笑った。

「こ、小ネズミが……。妾を驚かせおって……」

そしてクリスタはパトを囲むようにツララを生成する。四方八方を氷の槍に覆われたパトにはもう逃げ場がない。

「じゃが、ここまでの功績は認めよう。お主は特別に妾直属の奴隷にしてやろうぞ。感謝するが良い」

十本以上のツララがパトに向かって発射される。ほぼゼロ距離からの攻撃。どこに逃げようが避けることはできない。そう、逃げようとするのなら……。

——逃げるな。前に進め！——

今度は頭の中に直接、男の人の声が聞こえてくる。

その声の持ち主は優しい声をしている。しかし、その声のイメージとは裏腹に怒っているような、そんなイメージを持つ言い方をした。

パトは声に後押しされるように剣を強く握る。そして氷の壁にさらに剣を捻じ曲げるように力を入れた。

分厚い氷の壁は今まで通りならびくともしなかっただろう。だが、剣に変化が起きる。

熱を帯びていた剣の温度がさらに高まり、剣の先に火花が散り始める。そして辺りの氷を溶かしながら、剣は真つ赤な炎を帯びた。

剣は分厚かった氷の壁すらも溶かす。氷の壁が溶けたことで切断され、クリスタとパトは対面する。

「小ネズミがアアア！」

焦ったクリスタはパトの周囲に生成したツララを発射させるが、パトは燃える剣を手に身体を回転させて、向かってくるツララを溶かした。

そしてその勢いのまま、クリスタへと切りかかる。しかし、刃がクリスタへと接触しようとした時、剣先が爆発し、二人はお互いに反対方向へと吹っ飛ばされる。

吹っ飛ばされた二人は壁に激突し、背中を強打。パトがどうにか意識を失うことはなかったが、壁に激突したときの衝撃で、景色がくらくらする。

同じように吹っ飛ばされたクリスタは反対側の壁で意識を失いぐったりしている。

爆発した剣の先は、何事もなかったかのように無事である。何が起きたのか理解はできないが、とりあえずは危機を脱することができたようだ。

クリスタが意識を失った影響か、倉庫の冷気は消えて、入り口を塞いでいた氷の壁はなくなる。

第27話 【モンスターの民】

世界最強の兵器はここに!?!? 27

著者：pirafu doria
作画：pirafu doria

第27話

【モンスターの民】

パトと別れたオルガは揺れる馬車の中で死体のフリを続けていた。
オルガと隣でテツは剣を磨いている。どうにかバレてはいないが、いつボロが出るか
オルガはヒヤヒヤしながら様子を伺う。

賢者であるテツは見張りの仕事のために第六フロアへと向かっていたらしい、その最
中にこの馬車を通りかかったため乗せてもらうことにしたようだ。

パト達はうまく脱出することはできたらしい。だが、目的地は同じ第六フロアだ。作戦成功のためにはできることなら遠ざけたい。

剣を磨き終えたテツは剣を鞘にしまうと、すぐに手にできるように自身に左側に置いた。隙があれば馬車の中で倒してしまおうかとも考えたが、隙が全くない。

いや、それ以上に警戒されているように感じる。オルガには気付いている様子はないが、明らかにこの馬車を怪しんでいる。

見張りの仕事が本当かどうかは分からないが、それだけの地位のある人間ならば、無理にこの馬車に乗る必要もない。

やがて外が騒がしくなる。荒野を抜けて街中へと入ったようだ。そしてしばらく進んだところで、馬車は動きを止めた。

耳を澄まして外の声を聞くと、奴隷が逃げ出したようで何者かが走り回っているようだ。

そんな中、馬車を止めたバイズは代車の中に顔を入れた。

「着きましたが……騒ぎのようですよ」

しかし、テツは剣を握ってゆっくり立ち上がると、何事もないようにゆっくりと外に出た。

「俺には関係ない。……ここまで送ってもらい助かった」

剣を腰のベルトに刺すと、テツは騒ぎとは反対側へと歩いていった。

去り際に何か呟いていたが、二人にはうまく聞き取れなかった。テツの姿が完全に見えるようになってから、バイズは馬車の中に顔を入れた。

「行つたようだな。残つたのはお前だけか……」

ミリア達がいらないことに気がついたようだが、脱出したことにはなんとなく分かつて

いたようだ。

「お前も一緒に行けば良かっただろ」

バイズは荷台に入り、中央に堂々と座る。オルガは腕を組みながら答えた。

「そうも考えたがな。……俺にも事情があるんだよ」

回答にバイズは興味がないように「そうか」とだけ答える。

そしてバイズは話を変えるように続けて言った。

「おそらくこの騒動はミリア様が起こしたものだ。俺の推測にはなるがこれからの動きを指示する」

バイズはそう言うのとミリアの作戦と今後の行動について説明した。

説明を聞き終えたオルガは腕を組む。

「ああ、暴動を起こすってのは理解した。だが、それだと賢者が集まってくる可能性だつてあるだろ」

オルガが説明されたのは、奴隷を解放して暴動を起こし、その間にサージユ村の住民を助け出すと言うもの。

しかし、その作戦にはリスクがある。それは応援をよばれる可能性だ。

だが、バイズは首を振る。

「問題ない。賢者達にはそれぞれの役職が決められていて、他の役職には手を出さないことが決められている」

それを聞き、さっきのテツの行動をオルガは思い出す。目の前で騒ぎが起きていると言うのに、テツはそれを無視して目的にへと向かって行った。

「それにこの国には奴隷を保護する法律もある。ある一人の賢者の魔法さえ解除すれば、奴隷は王都の住民と大差はない」

その話を聞き、オルガは周りの騒ぎの様子に納得がいく。そう、王都で起きている騒ぎは奴隷の脱走だ。しかし、奴隷達を捕まえようとしている者たちは誰一人武器などは手にしていない。

だが、だとするならば、なぜ奴隷が存在しているのか。
その疑問にバイズはすぐに答えた。

「住民を増やすためだ。魔法がないから人力を頼る。だが、特定の人間に苦勞はさせず、皆が苦勞し国を支える。それがこの国の目指す政治。奴隷は他の国から連れてきた住民は手放さないためにする檻のようなもの。檻を破壊するそれが俺たちの目的だ」

そんな話をしていると、外から荷台の壁をコンコンと叩く音が聞こえる。

「おおい。そこに誰かいるのかア？」

気だるそうな男の声が外から聞こえる。何の理由で声をかけてきたのかは分からない。だが、バイズは立ち上がると、オルガに死体のフリをするように目で合図を送った。オルガはその通りに壁に寄りかかり、死体のフリをする。バイズはそれを確認すると、外にいる人物と話すために外へと出た。

外に出ると、荷台の横にロングヘアの男が待っていた。しかし、普通の人間とは違う。

皮膚は青く硬い鱗が全身を覆い、歯は牙のように鋭く尖っていた。

男の背中には男と同じくらいの身長何かを背負っている。しかし、それは布で包まれており、何を背負っているのかは分からない。

バイズは頭に手を乗せて、腰を低くして商人のフリをした。

「すみません。今荷台の整理をしてまして。後にしてもらっても良いですか？」

しかし、男は腕を組むと、

「それはできないなァ。俺は賢者だ。脱走した奴隷が隠れてるかもしれねエ。中を改めさせてもらうぜエ」

そう言い、バイズを押しつけて無理やり荷台の中へと入ってきた。
バイズは後を追うように荷台に入る。

男は荷台を見渡す。そして奥に白骨死体が落ちていることに気がついた。

「おい、これはなんだ？」

男はバイズを睨みつける。それに対してバイズは平然と答える。

「いえ、道中で見つけたんですが、そのまま放っておくのも可哀想で、どこかの墓に埋めてあげようと……」

「そうか。……盗賊か。それとも冒険者か。まあ、可哀想なもんだ」

そう言いながら、男は背負っている何かに手をかけた。
そしてニヤリと笑う。

「死体だしな。生きてる必要はないよなア!!」

男は背負っていた何かをオルガに向かって振り下ろす。

危険を感じたオルガは咄嗟に逃げ出し、危機一髪のところ馬車から脱出した。

一撃。たったの一撃で馬車は真つ二つに切断された。

同じように馬車から脱出したバイズは剣を取り出しながら呟いた。

「奴がガレットか……」

ガレットが背負っていたのは巨大なノコギリ。大きな刃が何本も付いた二メートル近いノコギリ型の剣である。

しかし、その武器を使ったから馬車を一撃で粉砕できるはずはない。あの剣の相当な重さはある。一体どれだけの力を必要としているのか。

「……ツチ。おっさんもそのスケルトンも、この騒動の関係者か？」

奴隷の脱走時に現れた、謎の二人組。しかもその一人がスケルトン。これほど怪しい存在はいない。

「答えねエか。俺ア、賢者ガレット。見たところ奴隷エじゃねエな。なら、侵入者として相手してもらうぜエ」

ガレットは容易に巨大なノコギリ型の大剣を振り、オルガ達に向けた。オルガはフードから鎌を取り出す。バイズも同様に鞘から剣を抜いた。

二人に緊張感が流れる。周りにいた人々は戦闘が走るとすぐさまこの場から離れていく。

ガレットは民衆がいなくなるまで、いつでも戦える体制であるが攻撃を仕掛けてこない。目や顔の動きから民衆が逃げるのを待っているようだ。

民衆を見守るガレットには油断がある。それによって隙が生じるはずである。しかし、二人はガレットに近づくことすらできない。

それはこの無防備に見える男に、一切の隙がないと二人は理解したからだ。

オルガは古い冒険者の記憶から、バイズは騎士として、この男の実力を先程の一撃で理解していた。

二人はガレットに何もすることができず、その場で武器を持ちながら時間を待つ。やがて、全ての住民が逃げ終えたことを確認すると、ガレットが動き出した。

「待つてくれるとはなア。それとも怯えて動けなかったか。それじゃあ、俺から仕掛けさせてもらうぜエ!!」

ガレットは重たそうな大剣を持ちながら、一直線に走り出す。標的はバイズだ。

巨大な剣を持ちながらも、それを全く感じさせないスピードでバイズに近づく。

そして高らかに剣を振り上げると、勢いよくバイズに向けて振り下ろす。バイズは剣を横にして大剣を受け止めるが、その威力は凄まじい。

剣を振った衝撃で風が起き、砂埃が宙に舞う。

最初の一撃を受け止めたバイズであるが、ガレットは剣を上下に動かし、ノコギリの刃でバイズの剣を削っていく。

このままではまずいと思ったバイズは、魔法陣を展開し、身体強化で自身の肉体を強化し、硬化魔法で剣の強度をあげる。

そして剣をこれ以上傷つけないように、力一杯にガレットの剣を払い除けた。ガレットは少し後ろに下がったが、すぐに体制を立て直し、バイズに剣を振るい始めた。

右へ、左へ、上へ、そして右へ、何度も襲いかかる剣をバイズは剣で受け流す。バイ

ズの剣術はかなりの腕だ。

ガレットは威力は高いが、バイズの剣の腕には及ばないようでその防御を突破することができない。しかし、ガレットの一撃一撃は重く、バイズは一步また一步と後ろへと下がっていく。

そして気がつけば、バイズの後ろには煉瓦でできた建物がすぐそばに近づいていた。

オルガは鎌を手にバイズを助けるようにガレットの背後から奇襲を仕掛ける。

しかし、奇襲はガレットにバレていたようで、自身を中心に大剣で360度回転させる。

オルガは空中から飛びかかっていた瞬間であり、この攻撃に気づき、結界魔法を足下に展開するとそれを足場にしてすぐさま後退する。

バイズはすぐ後ろに建物があつたこともあり逃げ場がなく、ガレットの拳を真っ向から受け止める。

しかし、その破壊力は高く、バイズを後ろの建物に押し付けると、そのままの勢いで

建物を破壊して、バイズを家の中に押し込んだ。

壁はボロボロに崩れ去り、中は砂埃で何も見えない。

今の一撃でバイズを倒したと判断したガレッドは、背後を気にすることなく、オルガと向き合う。

「不意打ちとは卑怯なことをするなア。スケルトン。だが、どんなに気配を消そうが、俺には分かるぜエ」

そう言い、ガレッドはオルガに大剣を向ける。

「その身体、俺と同じ魔素にやられた口だな。俺は何人もの同胞が同じような醜い姿になっちまった。だから、分かるんだよオ。その異様な魔素の濃さにはよオ!!」

ガレッドは今度はオルガに向かって走り出す。

距離は先程の攻撃を避ける際に、結界魔法で後退してそれなりに離れた。しかし、そ

の距離もすぐに埋まるだろう。

ガレットの筋力人間の筋力をはるかに上回っている。

人間離れた筋力に、皮膚は魚のような鱗がついている。彼もオルガと同じように魔素によって、モンスターの姿に変化してしまった人物の一人なのだ。

オルガに向かって突進してくるガレットであるが、その後ろにから炎の玉が飛んできて、ガレットの背中に直撃した。

ガレットが炎の玉に直撃したが、背中を摩り何事もなかったかのように立っている。

そして炎の玉が飛んできた方へと目を向けた。

そこには誇りの舞う室内で膝をつきながらも、右手を突き出し魔法を放つバイズの姿。

バイズは倒れたテーブルに寄りかかりながら立ち上がる。

「すまないオルガ君。……ここは私にやらせてくれないか？」

バイズは両手で剣を握りしめる。そしてガレッドを睨みつけた。

ガレッドは呆れたようにバイズへと向き直る。最初は仕留め損ねた相手には興味がないような態度をとっていたが、バイズの言葉を聞きそれは豹変する。

バイズはダメージを受けた身体で、ゆつくりと外へ出てくる。そして剣を持って構えると、ガレッドに向かって言った。

「私はバイズ・ザード。元フルート王国の聖騎士長だ」

その名乗りがどんな意味を持つのか。それはオルガには理解できなかった。

しかし、確実にその名乗りを行なったことで、この場の空気が変化したのを感じた。

それが良い方向に進むとか、それとも悪い方向へと進むのか。

ガレッドの後ろ姿を見ていたオルガは、その身体がピクリピクリと震えるのが見えた。そして

「テムエが………バイズ・ザード。……テムエが、俺の……俺たちの………」

ガレットの言葉には今にも爆発しそうな怒りが込められていた。

第28話

【過去の償い】

世界最強の兵器はここに!?!?28

著者：pirafu doria

作画：pirafu doria

第28話

【過去の償い】

魔法の大国がそこには存在した。

ティダードと呼ばれる王族が国を支え、大陸でも二大国伝統ある王国である。

平和な時代が長く続き、民は増え、国は発展していった。

しかし、ある時その国に一人の王が生まれた。

王は欲望強い人間であり、王は欲望のままに伝統ある国を蝕み続けた。それからである。この国が壊れ始めたのは……。

王はさらに力を欲し、伝説の樹木を手に入れようと考えた。樹木は神の住う天界に繋がる唯一の手段であり、さらには世界を想像した力がある。

樹木を求めた王はもう一つの大国に宣戦布告を仕掛ける。多くの民の血と涙が流れることになる。

それでも王の求めるものは手に入らない。戦争に勝つために王は魔法の力を集結させた、強大な兵器を作ることをつく。

国民に偽り、国の真ん中に設置して国民たちの魔力を密かに蓄える。

そして完成した兵器は戦争で大活躍した。

戦況は優勢になり、王の理想はもうすぐそこまで来ていた。しかし、それを大魔法使いの夫婦によって阻止される。

さらに悲劇が王国を襲う。

王国の中央に設置された大魔道具。それが突如暴走したのだ。原因を確かめるために数名の騎士を向かわせる。だが、彼らが戻ってくることはなく、大魔道具は暴発した。大量の魔素が王国中に放出される。王国は混乱状態になる。さらには反乱軍が各地で立ち上がり、王国の施設の占拠を始めた。

国の状態に逃げることにした王の前にある男が立ち塞がる。彼は王国を打ち取り、新たな国を立ち上げた。

????????????
 ??????????
 ガレットはバイズを睨み付ける。

「テメエらのせいだ。テメエらのせいでオレたちはこうなったんだ」

齒を食いしぱり、ガレットは言う。その言葉には強い怒りが込められている。

「ああ、君たちが我々を恨む理由は分かる」

バイズはガレットとは対照的に落ち着いているように見える。いや、正確には落ち着こうとしている。

彼は胸を張って言う。

「分かるだ？　王と同じく国を見捨てた裏切り者が!!」

「見捨ててなどいない。我々は国のため、民のためになろうと努力した」

「嘘を言うな!!　なら、俺の体を……俺の仲間を返せ!!」

ガレットは罵声を浴びせ、バイズに向かって走り出した。

「そうだな。だが、失ったものは取り戻すことはできない」

「ならば、なぜ今更この国に現れた!!」

「私は向き合いにきたのだ。君たちと。そして君たちの怒りを受け止めて、共に歩むために!!」

「ふざけたことを!!」

ガレットはバイズに大剣を振り下ろす。バイズは地面を蹴り、ガレットの右へと避ける。

ガレットの大剣はそのまま振り下ろされ、地面に激突し、大地を削り取った。

小さな瓦礫が二人に降り注ぐが、そんなことは気にしない。

バイズは避けた状態のまま、剣を横にすると通り過ぎるようにガレットを斬りつける。

しかし、バイズの剣の刃はガレットの鱗を貫通することはできず、金属音を鳴らして剣を弾き返した。

バイズの腕は硬いものを叩いたかのように震える。いや、正確には硬い。名剣にさらに魔法を付与した状態よりも彼の身体は強固である。

ガレッドは地面から大剣を抜き取ると、大きく横に振りバイズを襲う。

バイズは剣でガレッドの横振りを防ぐが、力一杯に振られた攻撃はバイズの身体を浮かし、道の反対側にある屋台まで吹っ飛ばした。

「バイズ!!」

オルガは心配して駆け寄ろうとする。しかし、それよりも早く瓦礫の中からバイズは立ち上がった。

「……鎧でも着てくるべきだったか」

バイズの身体はボロボロであり、頭から血を流し、左目は血が入ったのか瞑っている。

「鎧如きで俺の攻撃が防げるかよオ」

ガレッドは自信満々に言うと、大剣を肩に掛ける。

バイズは意識が朦朧としているのか、足元がおぼつかない。そんなバイズの姿に苛立ったガレッド。

「何が受け止めるだ。貴様らは分かっているのか。俺らから奪い取ったものはなんなのか……この程度で、この程度で怒りが収まると思うのかア！」

ガレッドは大剣を手にバイズにトドメを刺そうと突進していく。

しかし、そんなガレッドの目の前に半透明な壁が現れて、彼の行く手を阻んだ。

「なんだ、これは……」

それはガラスの様に奥の風景を映し出す薄い壁。厚さはないが強度はそれなりにあり、軽く叩いただけでは割れない。

「テメエの仕業か」

ガレットはそう言うとおルガの方に視線を向ける。オルガは腕を組みそちらを向かずと言う。

「そうだとしたら？」

「邪魔をするな。俺はコイツを殺す」

ガレットはオルガの挑発には乗らず。大剣を振り下ろし結界魔法を破壊する。結界は簡単に粉々に砕け散り蒸発する。

ガレットは結界を破壊すると、再びバイズに向かい進み出した。バイズは剣を握り立っているが、ガレットの姿に反応しない。もう意識はないのかもしれない。

オルガは鎌を手にガレットに攻撃を仕掛ける。背後から近づき、ガレットの首を鎌で

一閃する。だが、ガレッドの身体には傷一つ付かない。

「邪魔をするな！ 貴様から先に殺すぞ！」

オルガを行動にガレッドは足を止める。

「なぜ、そこまでこの男にこだわる」

オルガはこれまでの二人のやり取りから、疑問に思つたことを聞く。

70年もの間洞窟に籠つていたオルガは外の世界がどう変化したのかまだ知らない。

何よりもオルガにとっては思い出もあるフルート王国が無くなつていたことに驚いた。そしてその元王国の騎士だと名乗る男と、その国の関係者らしき男。

オルガにとっては昔のことで、さらには縁を切つた国のこと。だが、王国と聞くとあの男を思い出す。またあの男によつて人生を狂わされた人がいるのかもしれない。そう思うと関わる以外の選択肢はなかった。

オルガの質問を聞いたガレットはオルガの身体を見る。

「お前も被害者じゃないのか？」

被害者？ 何のことだか分からないオルガは疑問符を浮かべる。

「別件か……。だとしてもその身体になったということは相当の魔素に触れたはず。ならば知っているだろ。その危険性を!!」

確かに魔素は人体にとって有毒である。身体に障害が起こり不自由になることもあれば、オルガ達のように身体が変形してしまう場合もある。さらには命の保証すらない。しかし、そんな大量の魔素に侵されることは相当のことがないとはあるはずがない。

オルガがどうしてそんな量の魔素に触れることになったのか聞こうとしたが、その前にガレットは話し出した。

「王国にオレ達を見捨てたんだ」

元々はこの土地は緑溢れる土地であつた。自然も多く、人々も何の不満もなく暮らしていた。

しかし、あるとき王の決断で国の中央に大きな魔道具が設置された。

それは家よりも遥かに大きい円錐型の石の塊。王の説明ではそれは自然を増やし人々の暮らしを豊かにする魔道具だと言つた。

確かにその魔道具が設置されてから、作物の成長は遥かに良くなった。だから、対して国民達は王がやっと改心したと喜んだ。

しかし、それは全く違つた。

魔道具が出来てから、国王軍は戦争での勝利が続く。だが、それと対比する様に国民の間では病が流行り始める。

ある日、国王軍が負けたという報告を受けた。戦力では上回っていたが、ある魔道具の暴発により国王軍は半壊したという。

それから国の魔道具に騎士が出入りする様になる。その頃から薄々感じている国民

もいだろう。

そして事件が起きる。何の前触れもなく国の中心にある魔道具は爆発した。

爆風は家を飲み込み、緑を焼いた。多くの死者を出したが、被害はそれだけでは済まなかった。

魔道具の大爆発により大量の魔素が王国中に散らばる。

それは国中を多い、国民を魔素が蝕んでいった。

そこまで起これば、鈍い国民も気がつく。緑は確かに増えた。しかし、それは魔道具から漏れ出していた魔素が原因。

魔素は植物にとつては必要な栄養だが、人体には害を及ぼす。通常状態でも常に魔素を放出していた魔道具だが、爆発により溜まっていた魔力を全て使い切り、魔素に変換して降り注いだのだ。

さらには魔道具のエネルギー源となる魔力は、国民から少しずつ奪い取り、それを戦争の兵器として使っていたこともちに発覚した。

それを知った国民は国に抗議に向かう。さらには魔素の影響を受けた者達も助けを

求める様に国王の元へと向かった。しかし、国王軍は国民を払い除け、さらには魔素の影響で異形となった者を差別しだした。

武器は取り上げられ、魔素の影響でまともに動くことのできない国民には反応することとはできなかった。あの人たちが現れるまでは……。

「コイツらはオレ達を利用するだけ利用して、最後には捨てたんだ。それが許せねエ、許しちやいけねエんだ!!」

ガレットは怒りの籠もった声で言い放った。事情を聞いたオルガは納得する。

「そうか、あの男か、それともその先祖か。どちらにしろ、いつかは滅ぶとは思ってた。その瞬間を見れなかったのが悔しいな」

それを聞いたガレットはオルガの言葉の意味を理解できなかった。だが、滅んだことを喜んでるように言っているオルガを不快に感じる。

「オレ達が苦しんでいるのを嘲笑う気か？」

「そうじゃねえ。お前らについては不幸だと思う。だが、アイツに苦しめられたのはお前らだけじゃねえーってことだ」

しかし、オルガの言葉を関係なしにガレットは大剣を振り回し襲ってくる。
オルガは結界魔法で足場を作り、空中に逃げ込む。

「ツチ、すばしっこいな」

確かにガレットのスピードも素早い。しかし、オルガはそのさらに上をいく。

ガレットはジャンプして空中にいるオルガに剣を振るうが、オルガは次から次へと足場を作り、空中を散歩するように逃げていく。

しばらく攻撃をして、オルガに攻撃を仕掛けることが不可能だと分かったガレットは動きを止める。

「どうした？ 諦めたのか？」

オルガは空中からガレットを見下ろす。だが、ガレットは上にいるオルガを見るのではなく、下にしやがみながら言う。

「そんなわけないだろオ」

ガレットは魔法計算をすると自身に肉体を強化する魔法を付与する。

今まで魔法を使わずにあの破壊力だったことを考えると、一体どんな身体の構造なのか想像もつかない。

大剣を地面に振り下ろし、地面を砕くと人の半分くらいの大きさの瓦礫を手にする。そして瓦礫を自身の前にひょいと投げると、大剣を振ってそれを粉々にしながらオルガに飛ばした。

砕けた瓦礫は小さな破片となり、空中にいるオルガに向けて飛んでいく。

一つ一つは小石程度の大きさではあるが、スピードが速く当たればタダでは済まない

だろう。

オルガは瓦礫をガードするために、結界魔法を壁の代わりに展開する。ガレットのパワーも見ているため、念のために重ねて四つの結界を盾として生成した。

しかし、瓦礫は簡単に一枚目と二枚目、そして三枚目を破壊したところで勢いがなくなり、地面に帰っていった。

用心して作った結界が、ギリギリまで壊されてしまったことにオルガは衝撃を受ける。

ガレットの力が凄まじいのは分かっていたが、ここまでのパワーがあるとは。

再び同じ攻撃をされれば、今度は受けられる保証はない。

そこでオルガは攻撃に転じようとするが……。

ガレットの身体は強固な鱗で覆われている。通常の刃物では傷を負わせることはで

きないだろう。オルガの鎌もバイズの剣もあの鱗に弾かれてしまった。

オルガがもしもガレットを倒すことができるのなら、神器の力を使うしかない。だが、それには大きなリスクがある。

オルガが悩んでいるうちに、ガレットは再び瓦礫を手に入れようとする。だが、それは横から飛び出してきた相手にとって阻止される。

「なア、テメエ!!」

それは意識すら朦朧としていたバイズ。

バイズは横から飛び出すとガレットに抱きついた。

そして二人の間に魔法陣を展開すると魔法計算を始める。バイズが行おうとしている魔法は……。

「……………っ」

バイズの展開した魔法陣が閃光を放つと、激しい爆音と共に爆発する。爆発に巻き込まれた二人は煙に包まれる。

「バイズ!!」

オルガは爆風に受けながら二人を見守る。煙が晴れると、バイズは未だにガレットに抱きついていてる。

しかし、お互いに服が破け半裸になり、身体中が火傷だらけになっている。

だが、二人とも同じ距離で爆発を喰らったはずなのに、バイズに比べてガレットのダメージは少ないように感じる。

「自爆か？　だが、その程度で俺は……」

そうガレットが言いかけた時。バイズは再び魔法陣を展開してもう一度爆発を起こした。

今度は流石のガレットもダメージが溜まってきたようで、足が震えている。

「て……メエ……………」

バイズは再び魔法陣を展開する。

「お、…………おい」

そして何も言わずに爆発を起こした。この爆発にはガレットは耐えきれなかったよう、ゆっくりと倒れる。そして倒れてる最中にある人物の名前を呟く。

「リュ…………ウ…………ガ……………リュウガ様……………」

そして倒れるガレットに続き、バイズも崩れ落ちた。

——真の王は、あのお方だ——

第29話 【天才魔法使い】

世界最強の兵器はここに!?!?29

著者：pirafu doria

作画：pirafu doria

第29話

【天才魔法使い】

エリスとミリアは順調に奴隷を解放しながら、目的地である施設まで進行していた。

だが、エリスは先を行くミリアから敵意に似た視線を感じる。いや、正確には旅の途中からだ。

パトに心配をかけたくなかったから、このことは黙っていたが、パトがいらないのなら

ば少し話を聞いてみるのも良いだろう。

エリスは建物の影に隠れている最中に、ミリアにそのことを聞こうとするが、その前にミリアが口を開いた。

「……エリス・グランツ。……どこかで聞いた名だと思った。そう、やつと思い出した。お前がああグランツ夫婦の娘か」

グランツ夫婦という名前を聞いたエリスは驚きの表情を浮かべた後、ミリアから目を逸らした。

「……ええ、そうよ。それがどうしたのよ」

「父の古き友人グランツ夫婦。父の認める大魔法使いであり、もう手の届かないライバル。……父はそう言っていた」

自身の両親とミリアの父親が知り合いだったことに、エリスは驚き杖を強く握りしめ

た。

「あの骸骨は本当の王国で噂の天才魔法使いじゃない。どういう事情でそう名乗ったのかは分からないが、本物は貴様で間違いないな」

「ええ、そうね」

睨むように言うミリアの迫力に押され気味にエリスが答える。

今にも襲いかかってきそうな気迫だが、ミリアは背を向けて辺りを警戒する。

「父は、もう氣にするな。と言っていた。だが、私はいつか取り戻す。その時を覚悟するんだな」

ミリアが何をしたいのか。それをエリスは理解できていない。しかし、それは今ではないようだ。

辺りに敵がいなことを判断したミリアは、エリスを連れて先へと進む。

順調に奴隷を解放しつつ、やがて目的に辿り着く。そこはドーム状の形をした黄金に輝く施設。

周りにはカラフルなテントが店を出している。

「ここに賢者がいるの？」

外から見た外見や民衆の出入りの激しさから、ここが敵のアジトとは思えない。中からは大歓声が聞こえ、ここは何かの舞台場のように思える。

「ああ、私の情報は確かだ。ここに賢者フェス・クローバーがいる」

ミリアは自信満々に答えると、エリスを連れて建物の正面から入る。

多くの客がいる中、受付で料金を払うと二人は奥へと入る。奥は巨大なホールになっており、観客席が円を描くように並び、中央には広めの舞台が用意されている。

ミリアは適当なところの席に座ると、反対側にある特別席を指さした。

他の席とは明らかに違い、黄金で豪華に作られた巨大な椅子には、巨大の男が座って

いる。

身体は風船のように膨らんでいて、あれでは足で全身を支えることはできないだろう。

椅子に座る体制も、背もたれに支えられているからやつと座れているが、何もなければ亀のように倒れてしまいそうな体格だ。

「奴がターゲットだ」

見るからに偉そうな人物だ。周りには鎖を付けられた女性が囲んでいる。しかし、賢者は魔法に優れた実力者だと聞いていた。エリスから見れば、あの男にはそこまでの力があるように感じない。

馬車の移動中に現れた男の方が魔力も高く経験もあるように感じる。決して舐めているわけではないが、この人物からはそこまでの気迫を感じない。

そんな中、会場の照明が一度消えると、中央の舞台にライトが集中される。そしてそ

ここに顔が真っ白で赤い鼻をしたピエロが現れた。

「ようこそ！ お客様！ 奴隷販売会場にお越しくださり、ありがとうございます！」

ピエロは舞台の真ん中で観客達に頭を下げて挨拶する。

どうやら、ここが王国中に奴隷を販売する施設のようだ。

「今日も数多くの奴隷達をご用意致しました！ ご希望の奴隷が居ましたら!! 椅子に取り付けられた魔道具でお知らせください！」

二人が椅子の下を見ると、ピエロの説明通りに椅子にボタンが取り付けられている。希望する奴隷が居たら、これで購入するようだが……。

エリスは周りの客にもバレないように小さな声でミリアに聞く。

「ねえ、どうするのよ。私たちの目的はあの賢者を倒すことですよ？ 奴隷販売を見てどうするのよ」

「安心しろ。すぐに仕留める。だが、その前に奴の魔法を見ておきたい。貴様もそう思わないか？」

そう言われると確かにそうではある。エリスは殆どの魔法を網羅している。しかし、世界には魔法と魔法を組み合わせて独自の魔法を作り出している人物がいる。それは複合魔法と言われている。

多くの場合は特殊な効果を発揮する場合が多く、複雑な魔法の割には使い道が限られる。そのためエリスは複合魔法でも効率の悪いものには興味がない。

しかし、一度魔法計算を見ておいて損はない。魔法の解析ができれば、より効率の良い村人を救う方法も見つかるかもしれない。

「そうね。でも、どうするの？」

「私に考えがある」

しかし、ミリアはそう言った後、すぐに動くことはせず。状況を見守っている。やが

て一人の客が金髪の少年を指名する。

ピエロとの値段の取引を終えた後、交渉が成立し、少年は奴隷として買われることが決定した。

ピエロは少年に近くに来るように指示する。少年が怯えながら近づくと、ピエロは鉄で出来た首輪を手にする。

「お買い上げありがとうございます。それではこちらの魔法の首輪をお付けし、最初のお客様の元へ……」

ピエロはそう言い、首輪の少年に付けようとする。首輪が少年に近づくと、首輪に魔法陣が現れる。

首輪を付ければ、奴隷を縛る魔法の首輪の完成というわけだ。

首輪が少年の首に取付けられようとした時、ミリアは瞬時に立ち上がり、ピエロに向けてナイフを投げた。

ナイフは勢いよく飛んでいき、ピエロの頭に突き刺さる。ピエロは少年に首輪をつける前に、その場に倒れ伏した。

ピエロの姿を見た客達は動揺し、一斉に外へと出ようとする。

混乱する建物の中、ミリアは堂々と反対側にいるフェスを睨み付けていた。

魔法陣を見た時に分かった。あの魔法は危険である。

あの魔法陣は爆発魔法も含まれていた。それはつまり無理に首輪を外そうとしたり、ある特定の条件を満たせば、首輪ごと奴隷は爆発死するということだ。

これだけ奴隷が自由に歩いている街であるが、これで奴隷が反抗できない理由がわかった。

そして首輪が爆発する条件まではエリスでも解読することはできなかった。おそらくかなり念入りに作られた魔法陣であろう。その理由としてはあれはピエロの魔法ではなく、首輪を少年に近づけた時に発動したことも分かる。

爆発条件が分からない以上、これ以上の人質を増やすわけにはいかない。それでミリアはナイフを投げたのだろう。

やがて客が一人残らず外へ逃げ出し、残ったのはエリスとミリア。そして反対側にい

るフェス・クローバーと、それを囲む女性の奴隷達。真ん中にいた売られそうになっていた奴隷達は、混乱に紛れて逃げていったようだ。

静かになった広い会場で、フェスは高らかに笑い出す。

大きな身体を揺らし、お腹の脂肪は波打つように揺れている。

「ダァーハッハハハ!!　なんだお前達は?」

フェスは大笑いしながらミリア達に問う。

仲間が殺されたというのに、なぜこの男はここまで冷静にしていられるのだろうか。

「奴隷を解放しに来た」

ミリアは正直に答える。すると、フェスは嬉しそうに笑う。

「いいね、いいね。君たちのような正直者は好きだ。私は嘘つきが嫌いだね。君た

ちのような正直者はとても尊敬できる」

フェスはそんなことを言っているが、とてもこの男は本心から言っているようにには感じない。

「そこで正直者の君達にはチャンスを与えることにしよう。目的は……奴隷解放だったな」

フェスは周りを囲む女性の奴隷から、二人の奴隷を選ぶと舞台上に上がるように指示する。

奴隷達は逆らう気力すらないのか、何も言わずに舞台へと向かう。

そのうち一人の奴隷には剣が渡される。

「これからこの奴隷と試合をしてもらう。君たちが勝ったなら奴隷を解放しよう。しかし、私が勝ったなら、私の奴隷になる。それでどうかな？」

何を言い出すのかと思えば、戯れをしたいようだ。

しかし、そんなことをする意味が分からない。そう思っていると、

「我々は王により魔法の使用が制限されている。ともに武力で制圧されれば、対応はできない。しかし、君たちはあの魔法陣を見て知ったのだろう。首輪の魔法を……」

首輪の魔法。それを聞いた途端奴隷達の顔は青ざめる。

彼らはこの首輪の効果を知っているようだ。

「ならなぜ、そのような条件を出す？」

ミリアが聞くと、フェスはため息を吐く。

「余興だよ。余興。ただの遊びさ。だが、さっき言った通り、君たちが奴隷を勝てば解放しよう」

なぜ、そんなことをするのか。意味がわからない。

確かに奴隷を解放しにきた人物を捕まえれば、その仲間も割り出すことはできる。し

かし、その代わりに提示するリスクが大きすぎる。

さらにこの男がルールを守るような男には到底見えない。

二人の怪しむ目線を感じてか。フェスはため息をつく。

「信じてないか……。それも無理はないな。だが、もう君たちは逆らうことはできないのだよ」

気がつくと、二人は首のあたりに違和感を感じる。

お互いに見合うと、首に奴隷用の首輪が付けられていた。

「いつの間に！」

ミリアは無理に剥がそうとするが、力ではどうしようもない。いつ付けられたのかは分からなかった。

フェスは魔法陣を展開していなかった。なら、これはどうやってつけられたのだろうか。

「その首輪は普通の奴隷のものとは違い、この建物から出ると爆発するように設定した」
首輪を付けたから戦えということだらうか。しかし、付けられたとしても対策はある。

「ああ、これも言っておこう」

そう言うのと、フェスは舞台の上に転がっているピエロの死体を指で指す。
そして魔法陣を展開したと同時に、死体は爆発して粉々に吹き飛んだ。

「ちよつとした魔法を追加すれば、こいつはすぐに爆発する。俺様を倒そうとしても無駄だ。君たちが救いたい奴隷も、君たちも俺の魔法一つで全て粉々になるからな！
ガアーツハハハ!!」

つまりは魔法を解除してもらうか、解除させるかしかないと言ふことらしい。
先ほど魔法陣を見た時、外からこの魔法を解除することは不可能だと分かった。

「どうする気？」

「そんなの決まってるだろう。敵の策に乗る！」

ミリアは高く飛び上がると、舞台に着地する。エリスも追うように舞台に登る。

すでに2人の奴隷が舞台の上で待ち構えている。一人はピンクの短髪をしていて、小柄な女の子。もう一人は緑色の長髪に片手には剣を持っている女性の奴隷。

四人が舞台に登ると、フェスは近くにいた黒髪の少女に命令し、ゴングを持って来させる。

ゴングの準備ができると、四人はそれぞれ戦闘態勢を取る。

エリスは杖を取り出し、ミリアも腰にあるナイフに手を置いた。
向こうは素手と剣で戦うらしい。

舞台がライトで照らされ、観客の歓声のない静かなゴングが鳴らされた。

続く

第30話

【奴隸との戦い】

世界最強の兵器はここに!?!?30

著者：pirafu doria

作画：pirafu doria

第30話

【奴隸との戦い】

アングレラ帝国の中心にある城。そこにある知らせが訪れる。

「侵入者が奴隸解放をしているようです」

情報を受け取った王のそばに付き添う女が告げる。

「そうか。それはお前の言っていた例の奴らか」

女は無言で頷いた。

「だが、奴隷解放か……。そうなると奴とぶつかることになるな」

「ああ、大賢者のジェイのことですか」

「いや、ジェイは忠義と復讐により力を得る。しかし、奴には欲がない。それに比べてアイツには俺にさえも瞞みつこうとする欲を持っている」

どれほどの力か。見させてもらおうか。

観客のいない舞台上で静かにゴングが鳴らされる。

ゴングと同時にいち早く動いたのはミリアである。
姿勢を低くし、二人に向かって走り出す。

その走る速さは風のように早く、エリスには到底真似できない動きである。

ミリアは腰にあるバックからナイフを取り出すと逆手に構える。

そして二人の目の前まで迫り着くと、姿を消した。

魔法陣を展開していたわけではない。エリスには見えないスピードで、ミリアは二人の背後に回り込んでいた。

ナイフで緑色の長髪の女性に攻撃を仕掛ける。

武器を持っているのはこの女性のみ。もう一人は素手の少女だ。先に仕留めるなら、こちらだと判断したのだろう。しかし、その判断は誤っていた。

ミリアは気がつく、天井を見上げていた。身体は痺れるように動かない。

次の瞬間、背中に強い衝撃を受ける。そして自身になりが起ったのか理解した。

ミリアは後ろに吹き飛ばされていた。そして地面に倒れたのだ。

まだ揺れる視界の中、ミリアは誰にやられたのか確認するために周りを見渡す。
エリスは戦闘開始から未だ動いた気配はない。緑色の長髪奴隷も同様だ。

ならば、攻撃していたのは、ミリアを見下ろすように、格闘技の構えをしているピンク色の髪をした少女であろう。

遠くから見ていたエリスにも理解が追いついていなかった。

猛スピードで近づき、奇襲を仕掛けたミリア。あの奇襲に反応できたのは、この場で一人だけ、桃色の髪の少女だけだ。

驚く様子を見たフェスは笑いながら説明する。

「どうだ。俺様の自慢の奴隷は？ そいつはモモナ・ファナと言つてな。希少な戦闘民族エル族の生き残りだよ。エル族は魔力を常時、身体を流し肉体の強化を行う。これ

は魔法計算や固有魔法ではなく、特殊体質だ。これにどう勝つ?」

アングレラ帝国は魔法の使用が禁止されている。それは奴隷も同様だ。しかし、このような体質は魔法とは別と考えられている。

あちらは魔法を使つてこないから、問題はないと考えていたが、これは予想以上に辛い戦いかもしれない。

立ち上がろうとするミリアにそうはさせまいと、ピンク髪の奴隷は足を上げると、そのまま地面ごと蹴りつけた。

ミリアは寝っ転がった状態で、身体を回転させてどうにか回避する。蹴られた地面は砕け散り、少女の蹴りで穴が小さなできる。

ミリアは回避で精一杯で立て直すことができないらしい。それを気づいたエリスは助けに入ろうと杖を手にするが、彼女の前に緑色の神の奴隷が立ち塞がる。

緑髪の奴隷は両手で剣を握り行く手を遮る。その構えはまるで教科書に載っているように正確で、その構えだけで彼女の真面目な性格が滲み出る。

彼女は剣を震わせながら小さな声で、

「すまん。これも生きるためだ」

息苦しそうにしながら剣を振る。

その表情にエリスは同情するが、今はどうすることもできない。

エリスは背を向けて、剣から逃げる。

運動能力は高いわけではない。エリスの身体能力では普通では剣から逃れることはできなかっただろう。

しかし、緑髪の奴隷の剣はエリスの背中の中のすぐ横を通る。

だが、剣は一度だけではない。逃げるエリスを追うように追撃が加えられる。

緑髪の奴隷は一步踏み込むと、もう一度を振り下ろす。今度の一撃はハズレない。確実に射程に入っている。

エリスは危険を感じ振り向くが、どうすることもできない。叫ぶ間もなく剣は向かってくる。

次の瞬間、緑髪の奴隷の頸に蹴りが入れられる。奴隷は力が抜けたように、前倒しに倒れるが剣は決して離さない。

奇襲攻撃を仕掛けたのは、先程までピンク髪の奴隷に追われていたミリアだ。

ミリアは追われるふりをしながら、転送魔法の魔法陣を用意し、緑神の奴隷の背後にレポートしてきたのだ。

転送魔法でレポートしたミリアは、素早く緑神の女性に蹴りを入れ倒した。

ピンク髪の奴隷は突然消えたミリアを探し、キョロキョロしている。

「助かった」

エリスは礼を言うが、ミリアは何も反応しない。

ピンク髪の奴隷はミリアを見つけ、仲間が倒されていることに気づき、衝撃を受ける。
だが、

「……問題ない。モモナ」

「……マリ………」

緑髪の奴隷は何事もなかったように立ち上がる。

その姿にミリアは衝撃を受ける。

今の一撃は確実に敵の意識を奪っていた。殺す気はなかったが、数日は立ち上がれないほどの攻撃だ。

そんな攻撃を喰らっても、何事もなかったように立ち上がる女性にエリスは違和感を覚える。

女性からは微かな魔力を感じる。だが、魔法を使う仕草はなかった。

緑髪の奴隷は立ち上がると、エリス達から距離を取り、ピンク髪の奴隷のそばに寄る。

二人の奴隷は上にある観客席で見守るフェスを見る。

フェスはニヤニヤしてこの光景を見ていた。

その傍らには黒髪の少女の奴隷がいる。他の奴隷はフェスから離れた場所にいるのに、なぜあの少女だけフェスの側にいるのだろうか。

攻撃が効かなかったことは理解できないが、ミリアはこれで諦めたわけではないようだ。

腰を曲げて、前屈みの体制になる。

それを見たエリスも杖を強く握る。

この作戦において、この二人がフェスを倒せるか倒せないか。それが大きな効果を発揮する。

奴隸の大暴動が起これば、王国中が混乱に陥る。しかし、それが出来なければ、他の賢者や大賢者が集結し、エリス達だけではない。パト達も危険に晒される。

ゲームと言い、この余興を楽しんでいるところを見るにフェスは油断をしている。タイミングを見計らい。攻撃を仕掛けたい。

だが、そんなことは彼女達が許さない。

魔法が制限されたこの状態でも、かなりの實力を持っている。

建物の中ということもあり、エリスは強力な魔法を使えないし、使えば奴隸である彼女達も殺してしまう。

今は敵対をしているが、彼女達も奴隸にされた被害者。ゲームには勝っても、殺すわけにはいかない。

だから、フェスもこのゲームを提案したのだろう。奴隷を傷つけるわけにはいかない。だが、敵の奴隷は主人の命令に逆らえず、本気で攻撃をしてくる。

敵は二人とも近距離を得意とする格闘家と剣士。それに対してこちらは魔法使いと盗賊まがいの短刀使い。距離を詰められては先ほどのように不利になる。

「ミリア。あなた囷になりなさいよ」

エリスはそう提案するが、拒否される。

実際に魔法使いのエリスにとって、連携は重要である。

これが囷になる囷にならないの問題ではなく、前衛と後衛に分かれて、お互いがしっかりカバーしあうことが必要だ。

だが、先ほどの行動からしてミリアはエリスに協力する気はないように感じる。

後衛に魔法使いがいる場合、前衛は注意を惹きつけて後衛に攻撃が行かないようにしないといけない。

だが、ミリアは先ほど関係なしに突っ込んでいった。

一応は助けてはくれたが、あの調子ではいつやられてもおかしくない。

こちらの連携は最悪だ。

エリスがどうしようか考えているうちに、奴隷の二人は動き出す。

緑髪の奴隷が戦闘にその後ろにピンク髪の奴隷が連なってくる。一列に列になっている理由はわからないが、何かの作戦だろうか。

緑髪の奴隷はピンク髪を守るようにして突っ込んでくる。エリスは近づかれないように距離を取ろうとする。

しかし、ミリアにそれを止められた。

「一度だけ。一度だけだ。協力しろ」

そう言う、一人で敵へと走り出す。緑髪は冷静に剣を構えて、ミリアに狙いを定める。

ミリアが緑髪の射程距離に入り、剣が振り下ろされる。しかし、ミリアは魔法陣を展開するとその姿を消した。

そして緑髪の真上に現れる。だが、それを予想していたようにピンク髪が後ろから援護するため、ジャンプしようとした時。違和感に気がつく。

地面から足が離れない。そして地面から感じる冷気。

「ええ、私もアンタとの協力はもう勘弁よ」

エリスが魔法で地面を凍らせていた。凍った地面により二人は身動きが取れない。

おそらく奴隷二人の作戦は、緑髪が盾となりピンク髪がカバーすると言うものだった

のだろう。

エリスには魔法を緑髪が受け止めて近づく。ミリアには先ほどのような奇襲をピンク髪がカバーする。

だが、二人で近くにいたことが仇となる。氷の魔法により二人は同時に身動きを封じられる。だが、これもミリアが二人の意思をエリスから遠ざけたことにより生まれた隙。

ミリアは緑髪の顔を蹴り飛ばした後、ピンク髪に飛びかかり短刀を首に向けた。

「これで試合終了だ」

蹴り飛ばされた緑髪は地面に倒れた後、すぐに助けに入ろうとしたが、立ち上がる前にエリスが杖を向けて威嚇した。

対戦相手の動きは封じられた。これで戦闘に勝ったのだ。

その様子を上から見ていたフェスは手を叩きながら笑う。

「見事見事。実に見事だ」

賢者であるフェスとの勝負に勝った。これで奴隷を解放することができる。

「さあ、早く解放しなさい！」

エリスの言葉にフェスは笑顔で首を縦に振る。

「当然だ。奴隷は解放しよう」

思っていたよりも素直に言うことを聞くのだろうか。

その時、ミリアが動いた。

「待ちな。もうここまでだ」

ミリアはそう言うのと右手を前に突き出し、何かを掴むようなポーズをした。

「ああ、試合は終わったぞ。お前たちの勝ちだ」

「そう、私たちの勝ち。そしてテメーの悪事の終わりだ」

するとミリアは腰のバックの中から小さな魔道具を取り出す。

それを見たフェスの笑いは止まり、動きは固まる。

「戦闘中にお前から盗んでおいた」

フェスは汗を流す。

そしてそれを上にあげて周りに見せびらかせる。

「これは首輪の爆破スイッチ。だから、やめろ。奴の言うことを聞く必要はない」

ミリアがそう言うのと、後ろで何かが落ちる音がした。そしてフェスの近くにいた黒髪短髪の奴隷が魔法陣を出すと、魔法が解除されたようでその音の正体が分かった。

それは透明になっていた人。女性だ。彼女も首輪をつけられた奴隷のようだ。

そこでエリスは理解する。最初に首輪がつけられた時。なぜそれに気づくことができなかったのか。それは透明になっていたこの女性に首輪をつけられたから。

さらには戦闘中の回復もこの透明になる魔法で外から援護していた可能性が高い。

そして首輪の魔法は複雑な魔法計算が使われている。爆発の条件は帝国の外に出ること。しかし、フェスは自身の意思でも爆破できるような発言をしていた。

だが、それを行うには魔法計算が複雑になりすぎる。さらには帝国中の奴隷に首輪はつけられている。特定の人間だけ、爆破するのは無理に等しい。

それを補うために魔道具を使っていた。この魔道具を奪った今、帝国内で奴隷が爆破される可能性はない。

勝ちを喜ぶエリスの横で、ミリアは右手を突き出し、何かを掴むポーズを取る。そし

て手のひらに魔法陣を展開した。

「一つ。お前に聞きたい。なぜ、こんなことをした？」

ミリアはフェスに問う。フェスは丸い体で立ち上がる。

「俺様は王だ!! リュウガを倒し、俺は王になるんだ!! 貴様ら奴隷どもとは違う!!
俺様は偉いんだよ!!」

フェスは疲れたのか再び椅子に座る。地面はフェスの汗で湖のようになっていた。

「だからどんなことをしても許されるんだ!! 俺様がルールだ!!」

それを聞いたミリアはため息を吐く。

「大人しく奴隷を解放するか？」

「するかよ!! 俺様はなあ!!」

その時、フェスの動きが止まった。そしてミリアの魔法陣も消える。魔法の発動が終わったようだ。

ミリアの手の中にあるものを見たフェスは驚きの表情を浮かべる。

「それは……………俺……………の」

口から血を出して、フェスは倒れるように死んだ。

「お前のような人間は、あの人の国の邪魔になる」

ミリアの手の中にはフェスの心臓が握られていた。